531
17

設

文學士　齋藤清衛著

國文學の序說

四大國文學者の批判

大正
14.4.24
内交

東京　古今書院發行

531-17

序

廣島における文部省夏季講習會の席上で、わたくしが、「五大國文學者」（紫式部、西行、兼好、芭蕉、漱石）といふ演題のもとに、貧しい研究の一端を講じてから、早くも四箇年に近い月日が過ぎてゐる。王朝時代、武家時代、南北朝時代、江戸幕府時代および現代の各時代から、環境の中にあつて自照の生活と表現を完うした代表的作家を、一名宛選出し、それら人々の個性の展開を叙することによつて、同時に時代思潮の流を辿らうといふのが、その時その講演の目的であつた。顧れば、當時、校門を出て未だ日淺く、學不足のわたくしの業として、その計劃があまりに大きくあまりに高きに過ぎてゐたことは今更省慮して、慙愧に堪へないことゝ信ずる次第である。

しかし、批評は一つの創作でなければならぬ――この一事は、その當時から、動きのないわたくしの一信念であつた。その際、わたくしは力限りに、わたくしの捉へ得た直觀そのまゝを公にした。しかも、月日と共に、またわたくしはその表現の中に、誤つた觀察や推論をしてゐることに氣付かされねばならなかつた。その度毎に、わたくしは顏を赧くした。どうしてそれを報償すべきかに思ひ惱んだ。しかし、やがてわたくしの心は喜悅の色を以て充たされた。それは何故であるか。

理由の第一は、わたし自身、わたしの生長を感得したからである。しかも、その上にわたくしを喜ばしたものは、わたくしの創造的法悅であつた。一たび、各文學者の生活が、眞面目さを以てわたくしの筆に上せられた時、すでに、わたしの描いたかれらの生活は、わたくしと無緣のものでなく、そのまゝわたくしの血肉に融け込んで來てゐた。かくてわたくしの生活は、それによつて、さまゝに彩られ得たのであつた。

今、こゝに、わたくしはその講演の内容に、補訂を加へて上梓し公にする。ひたすら、わたくしの獲た物を一般に頒ち、わたくしと他と喜びを共にしたいといふ念願からである。（漱石論はこれを頁數の都合上本書から割愛した考證家は、なほ、本書中の叙事の疎漏を指摘して批難を加へられるかもしれない。註釋家は、また、本書中の解釋の誤謬を發見して反問されるかもしれない。これら大方の情誼深い叱正はまた、わたくしの進んで、受けたいと望むところのものである。しかし、眞の評傳は、創作精神を俟つて始めて完成される――この持論だけは、わたくしのどうしても讓歩する餘地を持たない所である。わたくしは、この小著の中に、わたくしを生かしてゐる。それには何人でもないわたくし自身の姿が籠つてゐるからである。貧しい心のわたくしは、ルナンのキリスト傳や、メレヂコフスキのトルストイ論などを例證すること、それだけで冒瀆の行爲になりはしないかを怖れるのではあるが、つまりさうした評傳者の心持が今のわたくしにもある。たゞこの場合、わたくしを生かしたこの道が、讀者諸君を寸分でも共感せしめたなら、わ

たくしの喜びはこれに加へるものを知らないであらう。

拙著「國文學の本質」を公刊してから、一箇年の月日が過ぎた。されば本書は、わたくしの次男と呼ぶことが出來ようし、本年に於けるわたくしの心のモニユメントと見ることも出來よう。本書を題して「國文學の序說」となしたのも、この關係に出てた點が多いのである。前著に盛つたわたくしの藝術觀を、本書により、一層證認して下さる諸君があるならば、重ねて、鞭達を賜はらんことを希つておく。なほ、前著に豫約しておいた國文學生活史の研究も諸君の督勵と相俟つて遠からず完結され得るだらうと思ふ。

本書の刊行に際しては、再び、垣内松三氏の御手を煩はすところが甚だ多かつた。玆に記して、厚く謝意の一端を表する次第である。

大正十四年初春

齋藤清衛しるす

國文學の序說目次

紫式部……一
世界最古の小說家……二
その環境（一——五）……八
その稟賦（鑑照力、官能力、批判力）と藝術觀……二二
その人生觀（戀愛觀、女性觀、厭世觀、宗教觀、美觀）……四一
總收……九三

西行……九五
歌聖西行の出生……九七
文より武への時代……九八
現實より非現實へ（一——四）……一一
その個性展開の諸相（意志的、情愛的、自然愛、藝術愛、宗教愛）……一二七
總收……一九八

兼好……二〇三
徒然草の兼好の生誕……二〇四
諸思想對立の時代（文と武、新と舊）……二〇八
我愛より無我愛へ……二三一
觀照と體驗の人（道德上、宗教上、藝術上）……二六三
總收……三〇六
芭蕉……三〇九
俳聖芭蕉の出生……三一〇
その環境（一——三）……三一三
時代の人芭蕉……三六〇
獨自の人芭蕉（閑住、旅住、愛住）……三七五
總收……四三一

紫式部

紫式部、この一婦人の名はたゞちに、源氏物語を聯想せしめる。源氏物語、この一冊の書名はたゞちに、爛熟した平安朝時代と幽艶な戀愛文學を想起せしめるてあらう。かくて世の人々の胸には紫式部といふ人名と、源氏物語といふ書名と、平安朝の幽艶な戀愛小説といふこの三つの言葉が、換言語（シノニム）であるかの如く響いてゐるやうである。まして、元祿時代の西鶴の作「好色一代男」と、この源氏物語とを並稱して、わが文學史上の二大戀愛小説となし、閨秀作家紫式部と浮世草子作者西鶴とを、好一對として見るものさへあるやうに思はれる。言ふ如く、源氏物語は、一つの戀愛小説である。しかし、同時にそれが、好色一代男や好色五人女などゝ、甚だ、間隔のある戀愛小説てあることを、私たちは、まづ以て銘記しておきたい。源氏は果して人々に精讀されてゐるか。世に、傑作名作と稱せられる作品て、却て、恣讀されてゐないものは古今東西しば〳〵ある。その中ても、源氏物語ほど高閣につらねられてゐる作物は他に無いと斷言していい。悲しいかな、この事實は、まず〳〵源氏物語の眞價を朧化せしめ、作者紫式部の偉大さを概念化せしめてゐるのてはあるまいか。

英國文學史を繙いたものは、誰しも、リチャアドスンのパミラ（一七四〇年）が、小説の世界的開祖

として、その榮譽を擔つてゐるのを記憶してるてあらう。佛國文學史家は、この説に異議を挾み、自國のプレヴォウやマアリイヴォの作品を始祖として擧げたけれど、かれらとても、十六世紀のものに過ぎない。しかも、パミラにしても、またプレヴォウ物にしても、小説の先驅者として果して、十分な價値があるかといふ問題になると、それは甚だ疑はしい。かれらより五百年餘の以前、東洋の一島國に紫式部の存したことに思ひ及べば、開祖などといふかれら文學史家の讃辭は如何にも片腹痛い。

源氏物語は、實に世界最古の小説（ノベル）である。しかも近代小説に比較して遜色のない大作てある。それが一閨秀作歌の手によつて完成されたといふことは、世界文學史上、全くの奇蹟と評しても、過賞てない。しかも作者紫式部の人としての研究が、いまだにわが國に大成されてないのは、私たち日本人にとつて、何といふ寂寥さてあらう、不滿なことてあらう。こゝに、手掛りとしての史料の乏しい事實は、今更、如何にとも致し方はない。しかし、私たちは、この源氏物語や紫式部日記の中から、何とかして紫式部の心境を索め來り、大鏡や榮花物語等の歴史物、伊勢や宇都保等の物語物から材料を獲て、こゝに肉づけをおへ、かれ紫式部を髣髴せしめる像を作りあげることは出來ないてあらうか。

おゝ、紫式部、その名があまりに一般化されてゐるに反し、その姿は極端に空漠てある、われ〳〵に幻影をさへ思ひ描かしめない。わたくしは、かの女に憧憬れつゝこれから、深山幽谷にその姿を尋ね入らうとするものてある、しかしわたくしの探求も遂には水泡に歸して、先人の到つた以上に一歩

も踏み出し得ないかもしれない。すべての試策が、無暴の擧に終るかもしれない。それでも、僅かに出來上るかもしれない浮彫の一本の手、一本の蹠の習作にさへも、わたくしの全生命は籠るであらう。しかもこの力が、最後の扉の前でわたくしの倒れるまで、諸君を案内し得たら、どんなにわたくしは歡喜の情に慄ふであらうか。わたくしは、涙にぬれた手で、諸君の手を硬く握り得るであらう。

もし、國文學史の第一隆興期を、萬葉集の中に求めるならば、その柿本人麻呂の生存してゐた持統文武兩帝の藤原朝時代は、あたかも西暦七世紀の末で、東ローマ帝國がサラセン族との交渉に惱んでゐた時代であつた。その世に、わが祖先がすでに萬葉集中の絶品を詠みえたといふことは、わたくしたちの、甚だ心強く思ふ點であるが、一方それら歌人の傳を詳かになしえないのは、甚だ遺憾とする所である。しかし、わたくしは敢て、人麻呂や赤人や旅人や家持の傳記を求め、その個性を描き出さうと望まないのは、どうした譯であらうか。

言ふ迄もなく、萬葉集には、ひろく國民性の反映があり、時代の空氣の浸潤があり、個人的主觀もさま〳〵に詠出されてゐる。さりながら人麻呂の長歌すら、われ〳〵は、かれ自身の性格を度外視して、充分鑑賞し得てゐるやうに思ふ。ましてや、多くの相聞歌において一々作者の傳を究めずとも、一つの民族詩としてそれを味はひうるのでないか。かくて赤人や旅人の作には、それ〳〵、その性格

と稱すべきものは出てゐるであらうが、萬葉集の歌は、纖細な個性の綾をいまだ、その中に織込んではゐない、また、ホーマーの叙事詩のやうに民族精神を充分歌つてはゐない、ただ、萬葉集は一國民詩の俤を持つてゐる。また、一大抒情詩集と言ふべき姿をのみ持つてゐる。

時世は、奈良朝から平安朝へと展開した。こゝに、第二の文學隆盛期とも見られる延喜時代が擡頭する。かの古今和歌集が勅撰されたのは、十世紀の末期に屬し、平安奠都より一百年餘を經、藤原氏の權勢はこゝに治定し、その政策も劃定してきた。偉才紀貫之が現はれて、勅撰第一集として恥づかしからざる古今集を撰進した事實の背後には、かゝる時代の影響が存する。

萬葉集の歌は、粗樸、古今集の歌は、巧麗、かれには赤裸な眞情の流露があり、これには床しい風流の吟咏がある、かれは男性的、これは女性的——およそ古今調は、萬葉調と對立してゐて、また別種の趣致に富んでゐる。しかし、個性の顯現に乏しく、餘りに平板の調子に偏しすぎた點は、前説の萬葉調以上である。貫之と躬恒の距離の遠くないことは、人麻呂と赤人の比ではない。總じて歌は、古今調に及んで、いよ〳〵平坦な抒情主義に墮してしまつた。

これは、單に、詩歌の上においてのことのみではない。その時代までの作として傳はつてゐる小説類や日記類のものにしても、一種の筋の上の味や漠とした心持だけは出てゐよう。しかし、作家の個性(インディビアユアリチー)の表現においては、なほ絶無とさへこれを言ひたいのである。性格といへば、ほとんど、それ

は類性氣質(かたぎ)である。何等作家の俤が、作品の中に喰ひ入つてゐない。そこに自己が生かされてゐない。

しかるに十一世紀の初頭、文字通り破天荒の傑作源氏物語が顯出した。しかもその源氏物語は、表現された紫式部その人の相である。アンナ、カレニナの一字一句に行きわたつて　トルストイの呼吸が感ぜられるやうに、源氏物語の隅々まで張りついてゐる作者の魂を見よ。それは二體同心とでも言ひたい。作物はそのまゝ作者の權化となつてゐる。

「作よりも、まづ人を」といふわたくしの國文學研究出立の門出において、人麻呂よりも貫之よりもこの一閨秀作家が、わたくしを捉へたことを、諸君はこゝに諒解して下さるであらう。これ、わたくしが、文學者の研究の第一人に紫式部を選んだ所以である。

泰西にあつては、あだかも、東ローマ帝國がいよ〳〵最隆盛期に入つた時期、支那においては太祖宋の國を建てゝ二世太宗の卽位を見た時期において、わが紫式部は、この國土にその生を享けたのであつた。紫式部の生年に關する確實な資料はこれを求め難いのであるが、大日本史の說によれば（逆算によつて）天延三年（皇紀一六三五）となり、安藤爲章の推定によれば、長保二三年の交（皇紀一六三七——一六三八）といふことになつてゐる。これらの說は、紫式部に關する種々の事實と殊更、矛盾を引きおこさないから、暫らく本章においてわたくしは大日本史の說によることにしよう。

つぎに、紫式部の履歷について、それも遺憾ながらこゝにほとんどこれを知ることが出來ない。假に天延三年說を採つて述べると、廿七歲の時（長保三年）夫、左衞門權佐宣孝を失なひ、卅一歲（寬弘二年）の頃、中宮のもとに出仕したが、とかく憂ひ氣味で、つねに里の方に住みがちであつた。中宮に、文集の樂府を御敎へ奉つたとか、道長が式部に言ひ寄つたといふことなども出仕中の出來事なのである。（現存の紫式部日記と稱するものは、寬弘五年七月から寬弘六年一月十五日までの斷續的記錄にすぎない）

式部がいつ出仕を辭したものか、また、出家したことが事實ならそれは何歲の時であつたか、これらに關しても何等考證すべき根據がない。こは式部研究に當つて誰しも望羊の嘆を繰更したところであらう。しかし、正傳の缺除といふ障碍が、殊に式部の生活研究において、それほど甚しい支障とならないことは、ましてもの慰めである。それは、かの女が一人の詩人歌人でなく、小說家であつたからに外ならない。また、斷片とは言へ、極めて貴重な紫式部日記の中に、かの女自身の綿密な心跡を遺しておいてくれたからに外ならない。

紫式部の傳記に關する新しい史料の發見されない限り、永久に式部の少年時代の模樣、宣孝と婚姻した次第、源氏物語製作の年代、源氏以外かの女の創作に關する諸問題、晩年のかの女等——各項について明確な推斷を下すことは出來ない。さりながら、一度、源氏物語を通讀するものは、誰しも眼

前に髣髴として浮び出る作者紫式部の俤を認めずには居られまい。しかもその俤たるや、われ〳〵に迫つて來、さらに、われ〳〵に話しかけてくれる。そこからわれ〳〵は、式部の若い日の姿、老後の模樣さへも充分想像し得られるのではあるまいか。

まづ、わたくしは、この式部論において、かの女の環境から筆を進めて行くことにしよう。

紫式部の環境について、これを概說すれば、貴族的といふ一語が最も適應してゐるやうである。平民(下素)的、庶民的ならざる貴族的、高踏的の精神である。すなはち、紫式部の生存した社會そのものが貴族階級であり、かれらの態度が高踏的であり、かれらの時代が、貴族趣味の爛熟したものであつた。さてその時世相を要約して見ると、

一、かれら貴族は、名譽心の滿足のために、ひたすら全生命をも賭してゐた。

貴族的好尙は、いつの世としても變りはない。かれらには確實な生活の保證があり、糧を求めるためには、今更寸耗の勞力をも要しない。鎌足が藤原氏の基礎を築いてから、すでに三百五十年の歲月を經した當時、藤原氏一門の施政的階級と、一般の勞働階級との間には截然とした差別が成り立つた。施政階級者は官職相當の應酬に依つて、寢ながらにして納稅の分配に預ることが出來たのである。

しかし、生活難を知らなかつたかれらには、高位高官に對する不斷の野心と、榮譽を獲るがために、

日もこれ足らないほどの焦心さがあつた。しかも人才登用が行はれずして、ほとんど、情實によつてのみ採用も非免も行はれたために、官界は姦策と陰謀の巢窟であつて、到るところに嫉視怨恨憤懣傷心の叫のたえる暇がなかつた。

殊にも、最高官の交迭は、全官界を震駭せしめた。藤原氏にあつて攝政の先例を開いたのは良房である。かくて次々の攝政は、幼帝を刪立しては、その外戚者の榮譽を負うて、全政を裁量した。故に顯官にあるものゝ第一の望はまづ容貌秀麗の女を產むことである。つぎにはその女を后妃として入內せしめることであつた。さて皇子を生ましめ奉り春宮の外戚となり攝政に登ることがかれらの最後の目的であつたので、その遂行のためには、兄弟叔姪間の親和の道も同族互助すべき策もこれを捨てゝ省みなかつたのである。近く兼家は、兄の伊尹や兼通を凌いで最も榮え、紫式部の世には、兼家の長男道隆一派の權勢は、全然末子道長のために奪はれてゐた。榮花物語の「見はてぬ夢」の卷は兄弟墻に鬩ぐさまを描いて極めて周到である。しかし「浦々のわかれ」や「鳥邊野」の卷は、いかに道隆一人の失脚が、その一統の人々に脅威であつたかを細寫して、讀む者をしてそゞろ時弊を痛嘆せしめずにはおかない。源氏物語の筋にあつても、外戚權が三變する。それが、見られる通り、各派の人々にそれ〳〵濃い陰翳の綾を織出してゐるのである。

紫式部は、御堂關白道長が皇后彰子の外戚として、(一條帝と彰子皇后との御間柄については榮花物

語のかゞやく藤壺の卷を參照あれ）權勢並ぶものゝない時代、後宮に奉仕したので、いかに多くの女官が彰子の勢力下にあることを己が誇りとしてゐたかは、榮花物語の「かゞやく藤壺」中の「侍ふ人々『あなめでたや、この世のめでたき事には、只今の我等がまじらひをこそせめ』とぞいひ思ひける」といふ一節だけで充分釋明されるだらう。

しかし時を得て輝く者の背後には、運命に泣く中宮定子の如きがあり、その女房清少納言の如きがあることを認めなければならない。しかもかゝる暗い運命がまた道長一派の上にも來るだらうといふことをも、誰が否定し得るであらうか。

この貴族的名譽心は、また、日常の諸生活に大きい影響を持つてゐる。すなはち、かれらにとつて己が行爲は、その正否の問題より、まづそれが物わらへになるか、ならないかゞ重大事であつた。源氏物語において感ずることは、婦人には、いまだ完全な貞操觀らしいものが生じなかつたことである。しかも、たゞ、かの女たちの怖れたところは他の思はくであつた。浮舟なども「下すなどの塵ばかりも聞きたらんにいと甚しからんと言ひゐたる心地おそろし」と、言つてる通り、匂宮に關係した身を薫大將に知られるより、むしろ世の噂にのぼる事を恐れてゐる。もつとも通信機關の絶無の時代であるが、貴族連の一身上の動作が、意外に早く臣下や庶民の噂に上つたことは、源氏物語に依つてこれを知り得られる。口さがない京童部は、武家時代も王朝時代もその點に變りなかつたものらしい。源氏

の君さへ、夢見を信ずるとては「人わらへ」を氣にし（須磨の卷）己が戀の果されないについて「交野の少將にさへ笑はれむ」とも獨言てゐるやうに、當時の人々の主眼としたところは、己が行ひを如何にして物わらひの種にならないやうにすべきかといふことであり、從つて如何にしてわが名聲をより高くすべきかといふ事が、一生の大目的であつた。

こゝに婦人の悲劇の大部分が、夫の地位を目あてに結婚するその淺はかな名譽心に兆してゐたことも當然であらう。源氏物語の東屋の卷で、浮舟の母がわが子に心から洩す述懷遺訓は、恐らくこの意味に苦い經驗を嘗めさせられた當時の女の等しく抱いた心であつたであらう。

二、次にかれら貴族の生活は、しば〳〵戀愛三昧的のものであつた。

戀愛關係は、いつの世、いづれの處にも斷えず存してゐよう。しかも戀愛の諸相に、それ〴〵時代的反映もあれば、個人的差異も現れてゐる。菟原少女を戀した奈良朝時代の二青年が、刃を交へ生命を賭さうとした眞劍さと、白金の目貫の太刀を佩いて、顏には粉飾をさへ施し、夜な〳〵女房の局に戀を漁つてゐる平安朝貴公子の戲態との間には雲泥の差別がある。赫射姫をそれ〴〵戀した五人の男子が、姫から與へられた難題を果さうとして失敗を演ずるといふ筋の竹取物語には、世相に對する皮肉觀が見えるではないか。一夫多妻の許されてゐた時に、好色の男が噂立つた美姫から美姫へと追うて、わがものと努めることは必然の現象であらう。うつぼ物語も一人の女性を繞る男性のことが骨子

になつてゐるが、かゝる戀の奪略戰は到る處に演じられたものらしい。源氏物語の中では、明石姫君や玉鬘などが、多くの男性によつて同時に愛を送られてゐる。

しかし、女の容貌に接せず、まして性格などの理解なくして單純な歌の贈答程度の知解で戀するといふのが、當時貴族の一般の風であつた。玆にその戀と呼ばれてゐるものゝ內容がいかなるものであるかは怖らく想見されるであらう。一つは結婚により權勢ある人を舅に持つて、おのが昇進的野心を滿たさうといふもの、二は、緣族關係から我利を貪り獲ようとするもの、三には、たゞ競爭心からおのれを競爭の渦中に投じて女を手に收め、他をして羨望せしめようとするもの——およそかゝる不純の原因によるものがその戀愛と稱するものゝ大半であつて、相互の性格諒解による眞面目な戀愛關係は、千に一つもあり得なかつたのである。もし一女性に對する眞の愛情の發露されるならば、それは多く情を契つてから後のことであつた。

かゝる男子の間における女子の位置のみじめさは、ほゞ想像されうる。若い女子は、つねに男子の狩獵の的になつてゐたのである。たとへば名も知らぬ、まして見も知らぬ男から、

紅に匂ふはいづら白雪の枝もたはゝに降るかとも見る

と言ふやうな仄めかしの歌が贈られて來る。そこで贈歌に對して返歌をするのは、婦人の一つの禮儀となつてゐたので、

紅に匂ふが上の白雪は折りける人の袖かとぞ見る

と言ひ返す。それは男からの戀歌をとぼけて曲解したまゝ返したものである。かうしたことが男女の交際の始めとなるのであるが、男は、多くの場合女の歌の詠振と、字の巧拙以外に何等、女について深く知ることを得ない。それすら返歌が侍女によつて代作、代書されることがあるから多くは當てにもならなかつた。かくて、女は暫らくつれなづくりの返しを繰更えしてゐるとしても、その弱い心から、もし、一度その貞操を男に許してしまへば、こゝに女の尊嚴さは一擧に打崩されてしまふ。結婚後といへ女の宅に男が通つてくる風習の當時では、一度許した後、女はたゞ戰々兢々と夫の愛を繫がうとしてのみ專心する。世評を重視した當時の女は、捨てられるそのことより、むしろそのことが、笑へになることを恥としたのであつた。

しかも、數知れぬ歌の贈答の後、男がいよ〳〵相手に接近して見ると、相手が意外な醜女であつたといふことは決して珍しい事ではなかつた。源氏物語の末摘花の如きその適例である。從つて女の方が、男より數歲の年長である仲らひも少くなかつた。こゝに一度契つた限り、二夜と通はないといふやうな悲劇も頻出して來た。

あひ思はで離れぬる人を止めかねわが身は今ぞ消え果てぬめる。（伊勢物語廿二段）

といふ如き怨嗟は、哀れな女性の口からいく度か洩れ出た。　かつ橫暴な男性の餌食になつて夫ある

身ながら、奪はれてゆく國經の妻（藤原時平のため）の如きに至つては、一層女性そのもゝ不愍さを思はしめられる。源氏物語中の、空蟬や藤壺や朧月夜内侍等が源氏の君と契を結ぶ經路は、讀むものをして餘りに女性の弱々しく抵抗性の無いことを痛ましめるのである。

貴族生活の無氣力さはかくて、かれらの中から、葛飾の乙女や茅渟の處女をも奪つてしまつたが、その結果男の方は、男女關係をます〳〵遊戯化せしめた。その事實は、在原業平（伊勢物語中の）や源氏の君が理想的の男性として視られてきたことで分る。「里び男」て無い「宮び男」の典型とされたことを以て想像出來る。すなはち、戀を漁り異性を狩ることは貴公子の特權であつたが、同時に、一度許した女に對して男は永久に見ついてやらなければならない、それが宮び男の宮び男たる所以である。伊勢物語の主人公が、白髮の老婆の思ひに對してもあはれを見せたことにつき、作者は「此の人（主人公）は、そのけじめ見せぬ心なんありける」と私かに賞揚してゐるてはないか。このことは、たゞちに源氏の君が老典侍の戀をうけいれたこと、末摘花等醜婦をも見ついてゐた叙述を聯想さす。しかし、かゝる憐愍の中に、どうして燃え立つ眞の戀情が湧き得よう。どこまでも暇つぶしの遊びとしての男女關係、乃至權威獲得のため利用化された夫婦關係が、當時の戀愛の大半てあつたのてある。戀愛といふ事實が、當時いかに概念化されてゐたかは、戀歌と稱せられる一般の作がこれを立證してゐる。

行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり。（古今集）

我が戀の數をかぞへば天の原曇りふたがり降る雨のごと。（後撰集）

海も淺し山も程無しわが戀を何によそへて君にいはまし。（拾遺集）

三、つぎに、かれらの特性は萬事を裝飾化し、遊戯娯樂事に多くの時を費した事てある。平安朝末期に至つて、中央政府の執るべき國務の範圍は、いよ〳〵狹まつてきた。大寶令の制度が、元々唐制に則取つたゝめ小帝國にとつては規模の大にすぎるものがあつたのであるが、その後廢官、兼併、兼職等が行はれたとはいへ、なほ剩官が多かつた。加ふるに、藤氏の專横と共に綱紀は紊亂を極めて、司法制度の如きもほとんど實施はされてゐなかつたものらしい。行政中複雜な地方問題も、莊田私有田は益々增加し、國守も遙任、受領のことが認められて、中央政府との有機的連絡は殆更薄いものになつてゐた。

こゝに、公卿殿上人、女御更衣と稱せられる徒が如何に終日閑暇で無爲に苦しんてゐたかは、その當時の日記の一頁を開いてみただけて想像が出來るだらう。その心持をつれ〳〵とかれらは稱へてゐる。（紫式部日記）源氏物語は、門院の「つれ〳〵おはしますに」慰として奉つたものてあつた。男子の生活もその倦怠さにおいて同樣てある。しかし、かれらは、武士階級や庶民階級に比較して、その實力は失つてゐたといへ、いまだ偶像的崇拜の的となりえてゐたのてある。かれらの位置、および、かれらが庶民より誅求した資力は、なほ以て臣下を頤使するに充分てあつた。武士階級にも、いまだ、

公家階級に弓を引くだけの自信が生じて、ゐなかつた。しかし公家階級は、實力を持ち合さぬだけ、虚勢を保ち威嚴を張る必要を感じてゐた。これは自ら、虚飾と榮花の形となつて、かれらの生活に現はれてゐる。さうして當路の公家達は、任官、叙位、年中行事等わづかな職務時間外の無爲退屈な時を費すにこの方面に出口を見出だし得た。その中、年中行事や賀筵や祭祀佛事迄が純然たる興行的のものになり終つたこと諸記録の載すとほりである。

朝儀には、元日節會、白馬節會、踏歌節會、端午節會、相撲節會といふやうに次を追うて節會が行はれ、賭弓、曲水宴、灌佛、乞巧奠、重陽宴、五節舞等の行事が連續し、更に即位、大嘗會の特殊な儀式における仰々しさには、全く、甚しいものがあつた。その他祭祀においては諸社の行幸始、特にも賀茂祭は見物(みもの)として上下擧つて待つ處であり、石清水の放生會もかれらに待たれた大行事の一つであつた。なほ佛事の方面では、數多い寺院においてつぎ〳〵に修法といひ、維摩會といひ、大乘會といひ、法華會といひ、また定例の法會の催さるゝ外、特に八講といひ三十講などいひ貴顯の寄せた特別法會が行はれた。閑暇に苦む貴族は、ひたすらかゝる催しを、指折り數へて待ちかまへてゐたのである。婦人もまた劣らじと物見車や物詣車をひき出させた。車の簾の下からは、出衣(いだしぎぬ)と言つて殊更に衣の端を出して虚飾を施した。しかもかゝる機會が、男女を接近せしめて戀の導きたらしめた例はあまねく諸書に見えてゐる。冠婚葬祭の諸儀では、出産（特に長男、また春宮に奉りうべき女子の生れた

時）元服のとかく過差にすぎてゐたことは、紫式部日記の彰子の皇子を生み奉つた折の記録、源氏物語の源氏の君の元服の描寫等で、他の一般が想像出來るであらう。衣食住では、衣服に最も華美を盡したやうに考へられるが、菊合の器物が金銀の裝飾をこらさしてある點を思ふと、工匠の手の入つた贅澤な器物も當時意外に多かつたものらしい。

また、歌舞遊戯は甚だ隆盛であつた。歌舞にあつては、神樂、催馬樂、東遊、風俗、朗詠などが唐樂と共に行はれ、遊戯においては歌合、香合、根合類の合物、韻ふたぎ、偏つぎ、蹴鞠、賭弓等到る處に行はれてゐる。やゝ後の時代に屬すけれど、東三條殿で四十餘日の間毎夜、日の出る時刻まで遊び戯れたことすらあつたのである。

しかしかゝる過差の行事、遊戯の催し方について、なほ「この世をばわが世とぞ思ふ」と詠んだ御堂關白の榮耀の生活に、幾分とも虚飾的氣分は無かつたであらうか。かれの心の中に、すでに大舞臺の旋りかけてゐるといふ如き不安の秋風は吹きそめてはゐなかつたらうか。

四、今一つ述べておきたいことは、文事を重視した結果、よろづの文學が爛んになつたことである。眞の文學は、太平の世と混沌たる世との差別なく、また、貴族階級と平民階級の差別なく、つねに到る處、存すべきものであるが、武事の少ない時代、有閑階級によつて遊戯的文學の流行を見た事實は、古今東西その轍を一にしてゐる。

平安朝時代は、藤原氏の威勢の基礎確立するに比例して、文運の發展も顯著になつて來てゐる。御堂關白の世はまさに百花の文運の艶美を競ふといふ盛況を將來した。しかしすべての文化が、貴族階級によつてなされ、貴族階級のために仕組まれ、貴族階級のものであつたといふことは言ふ迄もない。歌に後拾遺振りがあり、日記物に蜻蛉、和泉式部、紫、更科あり、隨筆物に枕草子といふ傑作がある。小說は源氏の榮名に蓋はれて他が顯はれない憾があるが、狹衣といひ濱松といひその他散佚して書名のみ傳はつてゐるものをあげるなら、當代の小說壇も想見に餘りあるであらう。かつ、その一般的趨勢は延喜時代に比して一頭地を拔いてゐる。一層、そこに才力の潑溂さが出てゐる。

さてこれは、詠歌について感ぜられることではあるが、文學がいかにかれらの日常生活に缺くべからざるものであつたかが、まづ、かれらに注意される。殊に、歌はかれらの交際機關であつたといつてよい、これは、本居宣長が源氏物語論においても述べてゐる所であるが、かれらは絕えず自らの體驗をいかに和歌として表出すべきかに腐心してゐた。聲朗かに自作を吟詠し、書信の中には一二首の作を必ずかき加へた。名歌を印刷して弘布するといふ機關のない當時において、撰集は殊更期待された。しかし、古今集中の四季の歌の吟詠心理を省慮してもすぐ分るやうに、叙景歌的のものの多くはある機會において、ある相手があつて作られたもので、かなり樂屋落ちに近いものである。すなはち主觀味が濃厚に出すぎてゐる。さらに換言すれば當時の生活狀況を諒解しなかつたり、作者の巧致

の存する所に思ひ及ばないと歌のねらひか會得され難いものが多い。

古の名歌をつねに記憶しておいて、ある場合にその一節をにほはして（歌、文、會話などの中に）おのれの知識を衒ふといふことは、時代と共に著しくなつた。

結び上げたるたゝりの簾の端より、几帳の綻びに透きて見えければ、その事と心得て、「我が涙をば玉に拔かむ」とうち誦し給へる伊勢の御も、かうこそばありけめとをかしう聞ゆるも、內の人は聞き知り顏に、さしいらへ給はむも謹ましうて、「ものとはなしに」とか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけゝむをなど、實に故事ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを、思ひ出て給ふ。

これは源氏の總角の卷の一節で、薫が宇治八宮との死別を悲しんでゐる所である。經驗する事盡にかく伊勢や貫之の古歌が聯想されるのは尋常のことであつた。後拾遺集中の詞書によれば、女房相模に對し「暮れゆくばかり」など言つて謎を掛ける色好みが居る。これは、拾遺集の「現にも夢にも人に夜しあへば、暮れゆくばかり嬉しきはなし」といふ歌の意味を暗示せしめたのである。かくてこの時代から所謂、本歌取と稱する詠振の一體が激增して來た。何れも、貴族趣味的機巧の好尙からである。枕草子の作者の第一特色が、かゝる好尙を代表してゐることは、縷述することを要しない。當代の一條帝が、まづ、機智諧謔にたけていらせ給うた。中宮の彰子が、御懷胎のため、とかく夜間お寢

覺めがちであるのを、「いみじき宿直人と見え給へるに云々」などゝ宣うたことは榮花物語（はつ花の卷）に見えてゐる。道長ならびにその子十二人（中宮彰子もその内）の性格がすべて機敏であつた事は、大鏡に詳しいが、これは、かれらが、卽興的にキットを發する貴族趣味を持ち合はしたことを主として指したものらしい。

なほ、當代の主要文學が閨秀作家の手になり、戀愛を主題としてゐることも、皆人の認めてゐるところである。後宮は、后妃女御更衣相互の競爭場裡と化してゐた。かつ入内した后妃の方々には、それ〴〵才媛の奉仕するがあつて、それらの間にも各〻材俊の程を競ふものがあつた。一條帝の皇后定子少納言等を寵愛し給うたに對し、道長がわが子の中宮彰子に紫式部等を扈從せしめた如きはその著し子の方が清い例にすぎない。

かゝる後宮の實情は、女性がおのれの才幹を發舒するに、それを無二の機會たらしめた。才媛の綺羅充滿して堂上花の如しとでもいふべきかゝる情況は、史上空前絶後のことに屬する。しかも、これに伴は國文（當時の口語文）が、かれら女性の領界に歸せしめらた影響が絶大であつた。漢文をわが學とした男子は、かへつて、自由におのが思想感情を表出するを得ず、全く女性に一歩先んじられたのであつた。

五、最後に、上述の宮び的（非里び的）諸現象に、共通した貴族のもつ一思想に氣付かれる。すなはち「今めく」ことの尊重である。「古代めく」ことを蔑視する新精神の意識である。いかなる時代にあつても、新流行新樣式といふものは存するであらうが、その顯著に現はれる時代と然らざる時代とがある。紫式部の時代はその新時代意識の最も著しい時世であつた。源氏物語を研べて見るに、今めかしいといふ形容が人々の一般的態度に對して用ひられてゐる點はいふ迄もなく（帚木卷、賢木卷等）話し振（空蟬卷）物腰（若紫卷）等巨細な點にわたつて用ひられ、その他、書體（若紫卷）音曲（帚木卷）建築（澪標卷）和歌（玉かつら卷）等にも用ひられて、その今めいたものが歡迎された。源氏物語のみならず、榮花物語の「見はてぬ夢」や「鳥邊野」の卷などにもこの語が重用されてゐることは、新樣式がいかに時代を征伏したかを裏付けて居る。從つて、新時代に取り殘された人々は、社交を斷念し隱遁を餘義なくされねばならぬ。源氏物語の常陸宮一家が、丁度それであつた。末摘花は古風女の代表者となつてゐる。宇治十帖において宇治の大宮が、匂の宮からの便りに碌々返歌をもしかねてゐるのは、保守教育をうけたわが身を恥ぢてゐるために外ならない。ひとへにはいからな匂の宮などに、古代めいた返事をして嘲笑をうけることを恐れてゐるのである。

以上は、紫式部時代について、わたくしの氣付いた世相の大略である。わが式部は、かゝる環境の中に、いかに個性を延ばし得てゐるか。

紫式部の傳において、まづ思ひ及ぼされる點は、かの女が如何に　創作家としての天分をその血の中に持つて生ひ出でたかである。

かの女の家系は、ほゞこれを詳かにすることが出來る。すなはち曾祖父兼輔、祖父の弟清正、叔父爲頼などは、父爲時と共に歌人であり、また詩人であつた。父爲時はもと、菅三品文時の弟子で、同僚の藤原孝道や源爲憲の中に、殊に才藻秀でゝゐたゝめ早く文章生にあげられ、式部丞や藏人辨にも登用されてゐた。かれが、越前の國守になつたことについては、今昔物語、古事談、十訓抄、今鏡等に逸話として載せられてある。すなはちその官を源國盛と相爭ひ、すでに國盛に任命をさへ見たのであつたが、爲時は悲しみにたへず、申文を女房につけて一條天皇に奉つた。その詞に「苦學冬夜紅涙盈」巾除目春朝蒼天在」眼」とあつたのに帝は甚だ御感激遊ばされて、道長に計り國盛を改めて爲時となされたといふことである。爲時はその後、越後守ともなつた。長子惟規が父に從つて下つたこと、同じく十訓抄中の逸話に見える。爲時の詠歌は、後拾遺集に三首、新古今集に一首傳はつてゐるのみであるが、何れも平懐の作で質實な態度を忍ばしめるものがある。傳によれば、かれは長和五年園城寺において出家を遂げた。

紫式部の母の出はこれを明らかになしがたい。常陸介藤原爲信女ともいふが、今一説の爲時姨雅

（清？）正女といふ説によれば爲時と同族といふことになる。

爲時には、紫式部の外、惟規、惟通、定暹の三子があつた。長兄惟規は歌人として後拾遺、金葉、千載、玉葉、風雅等勅撰集に自詠を傳へてゐる。かれの歌は、父の作に比すると幾分才氣が豐である。この惟規がいかに風流人であつたかは、「何となく花や紅葉を見る程に春と秋とを幾めぐりしつ」（風雅集）といふ如き遺詠でも知られるが、十訓抄の記す逸話は面白い。それは、かれが父に從つて越後に下る途中、重病に罹つて今は限りと見えたので、ある僧侶が、死後中有の旅で曠野をひとりゆく覺束なさをいひ、たゞちに淨土に參るべきことを語ると、惟規は「その野にも紅葉があり尾花がもとに虫が鳴くやうだつたら、かへつて、ゆつくら、歩いて見たいものだ」と返事したので、その法師は面喰つて逃げ去つたといふ。いかにも紫式部の兄弟の一人として非凡な性格を示してゐるではないか。

しからば、わが紫式部の天賦は如何。まづ、かの女の天性の、他の女房たちと類を異にしてゐた點を考へて見たい。それは、何よりかれが單に、和泉式部の如く歌人型の作家でなく、さりとて清少納言の如く才人型の作家でもなくて、かの女が終始、觀照的態度の作家であつたといふことではあるまいか。それを、わたくしは、父爲時の持つ學者的稟賦に原據をおきたいのである。爲時が、自分の男子たちに漢學を敎へてゐると、幼ない紫式部は傍でそれを聽きとりながら、大抵それを覺えてしまつた。

強記の點においもて、しば〳〵兄をもしのいだ。爲時は、この獨り娘の式部を寵愛すると共に、式部の男に生れ出なかつたことを殊に惜しんだといふことも父としてありさうに思はれる。（紫式部日記）

また、式部は日本紀をよみ得たゝめに、同僚の女房たちから日本記局と仇名せられたことは、かの女の一般を説明してあまりあるが、道長が、式部を拔擢した主眼も、式部がかく博覽宏才の點にあつたものしらい。それで、式部は出仕中も、女房の中にあつて特別の扱をうけてゐる。宮中の局で、ひとり眞字文をよんでゐるやうな時もあつた。

女房集りて「お前はかくおはすれば御幸は少きなり、何條、女が眞字書を讀む、昔は、經讀むをだに人は制しき」と惡言いふ。（紫式部日記）

かくて式部は、女房の嫉視の中心になつたのである。中宮に文集の第三第四を御敎へ奉つたのも、他の同輩には隱れてゞあつた。「知りたらばいかに誹り侍らんものと、すべて世の中ことわざ繁く憂きものに侍りけり」と五月蠅い世評を嘆いてゐる。式部は、漢籍の中、史記を最も愛讀してゐたらしい。例の藺相如傳の「若膠柱而鼓瑟」の膠柱といふ如き故言、秦始皇本紀の趙高の故事等を自在に、日記中や源氏物語中に挿入してゐるのは、そのためだと思はれる。しかし、式部が漢學から獲た所は、かゝる文字的のものでなく、むしろ漢學のもつ鑑照的、批判的精神であつたことが考へられる。これは、かの女の素質と相俟つて、かの女を和泉式部や赤染衞門、相模等の如く歌人たらしめなかつた最

大理由ではあるまいか。

さうとて、かれ紫式部に、詩人的才能が無かつたとするのではない。かの女が、性來、箏曲に卓越して居つて、しば〳〵音樂に沒頭していつたことは、紫式部家集によつても立證しうる。なほ、源氏物語中、音曲に關する精細な叙述、時處を得た巧な描寫は、かの女が如何に深く、音樂に理解を持つてゐたかを語つてくれる。つぎの一節は、宇治八宮に對する薫の言葉として挾まれたものであるが、立派に式部の音樂觀の一部を代表してゐるものである。

すべて誠にしか思う給へすてたるけにや侍らむ。自らの事にては、いかにも〳〵深う思ひ知る方の侍らぬを、實には、かなき事なれど、聲にめづる心こそ背き難きことに侍りけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればや、立ちて舞ひ侍りけむ。

つぎは、式部の歌才である。人の言ふ如く式部の家集は、かれの源氏物語に比較されると、全くその見窄らしさを隱すことは出來まい。しかしこれは、物語を目安においてゐるからであつて、他の女流歌人に伍してこれを比較するならば、それが特に劣つてゐるといふことは言へないであらう。小說の中の假作とはいへ、源氏中の詠歌だけで、式部を第一流歌人となすべき資格はこれを十分認めてよい。當時、歌壇は多士濟々だと言つて、歌聖としてわれ〳〵は果して誰を推擧することが出來るだらうか。順、元輔、能宣等すでに卒して居ない、われ〳〵の腦裏に行成、齊信、輔信、公任等の名が浮び

出るであらうが、われ〳〵はかれらを才者乃至學究と呼ぶことが出來ても、文聖歌聖を以てかれらを許すのはいさゝか僭越に感ぜられる。紫式部の如く才藻富贍の歌人もかく擧げ來ると、その數は十指にも充たないかも知れない。

つぎに、當時の小說壇を一覆して、紫式部の創作の心理に論及して行かう。

當時、學問と言ふと、それは必ず漢文學のことであり漢字學のことであつた。大寶令がことゝ〳〵く唐制の摸倣であつたやうに、男子は專ら、外來の學問を研讃しなければいけなかつた。故に、和歌を作らない人は、一生、假名文字を書かずとも用を足し得たかも知れなかつた程である。然るに、漢學尊重に對する反動思想、國粹趣味が程なく到來せずには置かなかつた。それは、後宮や貴族生活において女流の力の容認される風潮と提携して、假名文學の流行を將來したためであつた。すなはち、和歌文學は、歌物語を生み、歌物語は神秘傳說的小說を生み。神秘傳說的小說は人情小說を生むといふ經路を以て、平安朝後半期には多數の假名小說を見ることが出來た。時間的餘裕と生活の安定を得てゐる當時の人には、次々へと新作を轉寫して、かなり紫式部時代には、物語物(ものがたりもの)の普及もされてゐたらしい。紫式部日記には、中宮彰子が內裏に御還啓遊ばされる前に、新調の多くの冊子に物語書を添へ書き寫すべき人々の許へ配布されたことが出てゐる。式部も一冊御言付(いひつけ)をうけて轉寫したのであるがそのさまは思ひやられる。風葉集に見える古代物語の名で、散逸して傳はらないもの〻數、百七十五

種に及んでゐるのを想像しても、流布した物語の概數は分るであらう。されば源氏物語は突然に現はれた小說といふわけにはゆかない。なほ、紫式部が源氏以外に著述のあつたことさへも、日記中の口吻で推察することが出來るのである。

また小說一部の量の問題において、源氏物語以前の著として宇津保物語や落窪物語の如き大部のものがあつた。これらは、必ずしも源氏以上の長篇ではないけれど、その結構において些の遜色もない。宇津保物語なども、その適當な場面の描寫を、もつと細かくやつたら、たゞちに五十四帖には達し得るであらう。

なほ筋の運び方——これらについても、宇津保や落窪それ〳〵妙味を持つてゐる。それは、わが國人の漢作文力では到底及びもつかない所であつた。表現が何れも些の束縛をうけず、極めて自由に進んでゐることを知る。落窪の簡結で要を得た叙事法には、特に洒脫な味をさへこれを加味されてある。

しかもこれら諸作の中に、源氏物語を見出だすのは、恰も足柄箱根等群峯の間に巍然として聳ゆる富士を望見するに異らない。ここに想ひをはせしめると、誰しも紫式部の持つ豐かな天分を信ぜざるを得ないであらう。それはかの女の創作家、小說家としての偉大な天分である。かの女は、物語の中に人生を描き出した、かの女の眞面目な觀照の結果を表象した。源氏は、すでに傳奇的興味を超越して、鄙賞的作品の域に入つてゐるのである。

さて源氏物語製作の年代は如何。まづ寛弘五年より同六年までのかの女の日記中に、源氏物語に關する項が三ヶ所出てゐる。しかしこれをもつて、直ちにかの女の卅四五歳の時代までに、この物語が完成されてゐたものと即斷するのはやゝ不用意である。むしろ、若菜の手前位までとか、宇治十帖の前位までとか、ともかくその大部分が出來上つてゐたことを認める方が穩當であらう。

夫宣孝の遠逝した時、かの女の膝下には隆光と、今ひとり賢子（後の大貳三位辨局、狹衣物語の作者と云）といふ二人の遺子があつた。廿五六歳の身空で、この二人の遺子を養育する行末を想ふと、かの女にとつて夫との永別が限りもなく悲しいものに感ぜられたことは當然である。

見し人の烟となりし夕より名も睦じき鹽釜の浦

無常の波は遠慮なく多感な一女性の胸を浸していつたのであつた。それは、物語によく出てくるあはれな女の運命にも似た筋ではあるが、それにしては、あまりに痛々しい體驗であつた。

しかしこのショックが、やがてこの大創作着筆の近因をなしたのである。かりに式部が、宮仕へした年を、眞淵の推斷の如く、寛弘二年とするならば、それまで宣孝歿後五ヶ年の餘裕があつた。そしてその間に、源氏物語の前半が公にされて、それが道長の耳にも入り、かくて式部の存在も關白に認められたものではあるまいか。かつ、式部の父爲時は、道長に招かれてしば〳〵詩會に列してゐた關

係を想へば式部が道長の招致をうけることは、極めて自然の事である。

當時、新作物語が歡迎されて、それが相ついで現はれた。この時、創作的天分ある紫式部がどうして默してのみゐられよう。たゞこゝに、われ〳〵をして、紫式部が男子として生れ出たときを假想せしめ（父爲時の希望の如く）また、夫宣孝の頽齡までの生存を假定せしめるならば、あるひは源氏物語ほどの大作を豫想することは難事であるかもしれない。ある傳者は、式部が長恨歌を愛誦してその感激の結果着筆したのであると推定し、ある傳者は、村上帝皇女大齋院が上東門院（彰子）に新作物語を望まれた際、門院の命をうけて式部が源氏に筆をつけたと述べてゐる。また、ある評家は、源氏物語は左傳を模して勸善懲惡を旨として書いたものと論じ、ある評家は、史記の筆意を學んで虛誕を旨として描いたものと議してゐる。紫式部が源氏を創作する動機竝びに態度の中に、かゝる片々とした事が幾分かの關係を持つてゐることは否定出來まい。しかし、長恨歌、門院の命令、左傳、史記なくとも、式部はやはり大作を完成したであらう。それは、抑へがたい創作本能が式部を蕩かして源氏を創らしめた――かうした信念を、われ〳〵は源氏からうけとり得るからである。大きい構想の中に、事件は巧妙に展開してゆき、何等の障碍なしに、作者が主觀をぐん〳〵盛つてゆく手際は、到底、文集や史記の及び得るところではない。

しかし創作本能と一概に言つても、その根柢をなすものは　作者により様々である。紫式部のもつ最も顯著な創作家的素質は、やはり、鋭い感覺力と眞面目な省察とであつた。この二つの素質が、かの女の經驗をして深化せしめ、體驗化せしめて、鮮やかな表現性を獲得せしめたものである。

五官の内、まづ第一にかの女の視覺力である。その確實さは源氏に描かれた色感を聯想しただけで充分であらう。作者が女流だからでもあるが、衣服の色目に關する纖細な描寫は、全く古今稀れである。かの紫式部日記が服飾錄の感があるによつても、平常、式部が如何に、服色の調和といふことに微細な注意を拂つてゐたかゞ推察される。源氏物語の解釋に當つて服色のことがとかく疎んぜられがちであるのはいかにも殘念である。玉鬘の卷に、源氏の君と紫の上とが、贈物の衣裳類を適宜に、他の方々へ分配する所がある。全く、色の選擇によつてその人の性格は現はされるが、まして、その身に似合つた模樣、調和を得た色のとりあはせ如何に依つて、各人の才幹のほどを定めることが出來る。いつも、人物と衣裳との關係について敏感であつた式部の用意には敬伏するより外ない。

なほ、かの女は、繪畫に對しても相當の鑑賞眼を持つてゐたが、それは、また鋭敏な視力を傍證するものである。日記の中にも、「唐繪を、をかしげに書きたるやうなり　とか「女繪のをかしきにいとよう似て云々」といふやうに、繪のことを引合に出してゐるが、源氏物語の帚木卷には立派な畫論がある。また源氏の君は立派な畫家に作られてゐるし、繪に關する繪合の卷といふ卷も物語の中にとら

れてある。

その他物語中の自然描寫はどれとして式部の視覺の敏感さを傍證しないものはない。實に巧いものである。

つぎに、式部の洗練された聽覺について考へるなら、まづ前說の音曲のことも參考にならう。つぎは紫式部日記の最初の一節である。

秋の氣配の立つまゝに、土御門殿の有樣、言はん方なくをかし。池の邊の梢ども、遣水の畔の草村、おのがじし色付きわたりつゝ、大方の空も艶なるに、持て映やされて、不斷の御讀經の聲々、あはれ優りけり。やう〳〵涼しき風の氣色にも、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞き紛はさる。何といふデリケートな感受だらう。かの女は、初秋の感じと共に、御讀經の音感の推移してゆくのを聽き知つた。そして、終夜、靜かな音をしてさら〳〵流れ下る遣水の奏でが、ともすれば、母屋の方から梢をぬけて聞こえてくる讀經の聲とも、つれ〳〵になつて區別の立たなくなるのに、耳を傾けてゐたのである。

源氏物語中に、かゝる微妙な描寫のつかはれてゐるのは決して珍しくない。橋姫卷で、薫大將が宇治の里から歸京しようとする曙、聞えてくるかの鐘聲の點景は、いかにも老練な技巧である。それは常々、かの女が、曙の鐘聲に對し如何に鋭い感じを抱いてゐたかを十分語つてくれてゐる。

第三に、嗅覺である。これは紫式部においてのみではないが、當時における香に對する感受力は甚だ敏感なものであつた。嗅覺は美感を成立せしめ難いと美學者は言つてゐるが、源氏物語に描かれた移り香だけは、たしかに一藝術を成してゐると言つてよい。後世、嗅覺も漸次劣へ、香合の遊戯なども名ばかりになつたのは、いかにも遺憾である。

源氏物語によれば、源氏の君など名香を用ひたゝめに、遙か遠方から源氏のゐることが人々に感知され、その移り香はしばらくの間、消えなかつた。正裝乃至戯人を尋ねてゆく時の衣服には、定めのやうに香を燻染めたことは源氏物語に見えてゐるとほりであるが、この物語からかゝる香に關する描寫を假に取り除いたとしたら、あとはどんなに物寂しいものとなるであらうか。

第四に、觸覺に關しては、巧妙な肉體美の描寫を見ることが出來る。元來、容貌の描寫についてはいかなる筆も惜まず、例へば薫の美を叙して「御さまかたちの仄かに見奉りしにさも命延ぶる心地し侍りしかな」(東屋の巻)とまで佳賞してゐるのであるから、軒端荻、空蟬、朧月夜内侍等一人として描寫の巧妙でないものはないが、胡蝶巻において、源氏の君が、玉鬘に對する愛欲感にひかれてゆく場面は、殊更、自然味に富んでゐる。そこには「つぶ〳〵」とか「こまやか」とかいふ形容詞が多い。

なほ、源氏物語中の女性描寫では、肉體描寫が性格をも表象してゐるものが少なくない。その用意の周到であることは、宇都保や落窪の到底伍しにくい點である。

これを總括するに、八百年前の作としてその官能描寫の優れてゐること、ともかく世界的に佳賞すべきであらう。

つぎに、紫式部の眞面目な省察力といふことについては、さらに驚嘆すべきものが多い。この省察批判の精神力が、鋭い官能力と相俟つてかの女の創作家としての資格を完成しえたのである。紫式部日記は、さながら一冊の批判錄の體裁をなしてゐる。かの女が、つねに喧噪な界を嫌つて孤獨を愛したのも、一つは靜思と沈默とを求めたからである。橋姫巻に、宇治の宮が宇治川の鳴瀨の響のために冥想に耽りがたいことを悲しんでゐるが、それはそのまゝかの女の心であつたであらう。

日記の中に、かの女の漢籍を繙讀するのを女房たちが惡口言ふところがある。それを耳にしたかの女はむつとして辯解しようかともしたのであるが、その時も「ことはたさもあり、よろづの事、人によりて異々なり」といふ冷靜な反省によつて、そのまゝ口を噤んでしまふ。

また、日記の中に、齋院に仕へてゐる中將の君が、中宮彰子方に仕へてゐる女房たちの批難をすることをかいてゐる。式部はこれを更に批評して、人間は誰も一得一失があるものだから、濫りに短所を指的することは注意すべきことだと言ふ。しかも、その筆の下から、かの女自ら、和泉式部、匡衡衛門、清少納言、左衛門の内侍等を俎上にのせて批評を加へてゐるのである。かの女の透徹した觀察の

前には、人々の本性が餘りにはつきり、恰も鏡に物の映るやうに展げられたのであつた。かの女自身、己が批判の態度を出過ぎたものとして氣付きつゝも、その鋭い眼識は、それを默過することを許さなかつたのである。(日記參照)かくて式部の積極的態度は、時に「などか必ずしも面にくゝ引入りたらんが賢こからむ」とそれをも肯定する語調に出てくるのであつた。

なほ、式部の觀察や經驗についてゞあるが、當時の婦人生活は極めて室内的であつたがために、その範圍は、はなはだ狹いものと考へられる。しかるに、かの女が、作中にかく迄廣く題材を消化して描寫しえた理由は、やはり、その觀察や經驗がそれまで批判の網を潜つてゐたからであらう。旅行とても、父に從つて北陸に行つたことの外、住吉詣や初瀬詣を一二度宛した位のものにすぎまい。しかるに、到るところの光景を、あだかもその地の者のやうに描き出して、しかも正鵠を得てゐるわけは、記錄や實話から得た智識を完全に整理するだけの批判性があつたからである。式部日記を見よ。土御門殿(道長邸)が、皇子御誕生のため、ごつた返ししてゐる中に、式部が、いかにひとり何といふ冷靜さを保つて、萬事に纖細な觀察を加へてゐることであらう。書中に、「目を止めつれば」云々といふ言葉が見えるが、まことに紙背に徹するやうな眼光で、かの女は些細なことにも研究的態度を失はずにゐたのである。男性同志間の事、宮庭生活のある部分など、經驗のない式部に、なみ〳〵の努力では分り得る筈がない。しかも、父や夫の語る片言や、在來の物語に敍べられた節々によつて、よ

く全般を窺ひ、わが物として物語中に描出したところが、式部の偉大な點である。一例を桐壺巻から求めるなら、かの命婦が勅命をうけて逝くなつた更衣の母親の佗住居を尋ねてゆく項は、何と言つても名文であるが、おそらく式部には未見の場面であつたらう。しかもかゝる場面を躍如として描き上げた手腕は、すべてかゝるかの女の素質を以て解釋するより外に方法はあるまい。つぎに、纖細優美な女性の描寫にしても、いかに綿密な表現をなし得たかは次の一例でも分るであらう。薫の見てゐる宇治の大宮と中宮との姿である。

まづ一人立ち出でゝ、几帳より差しのぞきて、この御供の人々の兎角行きちがひ、涼みあへるを見給ふなりけり。濃き鈍色の單衣に、萱草の袴のもてはやしたる、中々樣變りて花やかなりと見ゆるは著なし給へる人柄なンめり。帶、はかなげにしなして、珠數ひき隱して持給へり。いとそびやかに樣體をかしげなる人の髮往に少し足らぬ程ならむと見えて、末まで塵の迷ひなく、艶々とこちたう美しげなり。傍目など、あならうたげと見えて、匂ひやかに柔かにおほどきたる氣配、女一宮もかうざまにぞおはすべきと、ほの見奉りしも思ひ比べられてうち歎かる。又、ねざり出でて、「かの障子はあらはにもこそあれ」と、見おこせ給へる用意、うち解けたらぬ樣して、由あらむと覺ゆ。頭つきかんざしの程、今少し貴になまめかしき樣なり。「彼方に屏風も添へて立てて侍りつ。急ぎてしも、のぞき給はじ」と、若き人々何心なく言ふめり。「いみじうもあるべきわざかな」とて、後め

たげにゐざり入り給ふ程、氣高う心にくき氣配添ひて見ゆ。黒き袷一襲、同じやうなる色合を著給へれど、これは懐しうなまめきて、あはれげに心苦しう覺ゆ。髪さばらかなる程に落ちたるなるべし。末少し細りて、色なりとかいふめる。翡翠だちていとをかしげに、絲をよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ち給へる手つき、かれよりも細さ優りて、痩せ〳〵なるべし。立ちたりつる君も、障子口に居て、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いと愛敬づきたり。

つぎに、われ〳〵は源氏物語の中から式部の小說論をきくことが出來る。それは螢卷に記された小斷片にすぎないが、それは樣々な問題を研究者に提供する貴重な一節である。折から主人公源氏の君の六條の院では、五月雨のつれ〴〵に、方々は繪物語などのすさびで明し暮らしてゐる。たま〳〵玉鬘の君に、源氏の君が假構物語の價値を說明すると、姫君も私見を挾むといふ場面が出てくる。そこに藝術論が生ずるので、少し長いけれど抄錄して見ると、

(源)「かゝる世の故事ならでは、げに何をか紛るゝことなき徒然を慰めまし。さてもこの僞どもの中に、『げにさもあらむ』とあはれを見せ、つき〴〵しう續けたる、はた、はかなし事と知りながら、徒らに心動き、らうたげなる姫君の物思へる見るに、かた心附くかし。又、『いとあるまじき事か

な』と、見る〳〵おどろ〳〵しくとりなしけるが、目駭きて、靜かにまた聞く度ぞ惡けれど、ふとをかしき節あらはなるなどもあるべし。この頃幼き人の女房などに、時々讀まするを立ち聞けば、物よく言ふものの世にあゝべきかな。空言をよくしなれたる口付よりぞ、言ひ出だすらむと覺ゆれど、さしもあらじや」

と宣給へば

(玉)「げに僞りなれたる人や、樣々に酌み侍らむ。たゞいと誠とこそ思ひ給へられけれ」

と硯を押しやり給へば

(源)「こちなくも聞こえ貶してけるかな。神代より世にある事を記し置きけるなンなり、日本紀などはたゞ片側ぞかし。これ等にこそみち〳〵しく詳しきことはあらめ」

とて笑ひ給ふ。

すなはち、史書よりも、かへつて小說の中に眞の人生の相が現はされ得るといふのである。實錄である筈の日本紀も結極、生の海の表面の波だけの記錄にすぎない。かたそばだけの叙事にすぎない。そこで、かへつて、假構的小說の中にこそ、讀者を動かす眞實性が含んでゐる。虛にして却て實——この眞理を式部は、十分會得してゐたのである。源氏の君の文學論はさらに續いて

(源)「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づることとそなけれ。善きも惡しきも、世に經る人の有

様の見るにも飽かず聞くにも餘ることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて言ひ置き始めたるなり。佳きさまに言ふとては、佳きことの限を選り出でて、人に隨はむとては又惡しきさまの珍しきことを取り集めたる、皆かた〳〵につけたる、この世の外のことならずかし。他國の御門の才作り樣變れる、同じ大和の國のことなれど、昔今のに變るべし。深きこと淺きことの差別こそあらめ。ひたぶるに空言と言ひはてむも、ことの心違ひてなむありける。佛のいと美はしき心にて說き置き給へる御法も、方便といふことありて、悟りなき者はこゝかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ、方等經の中に多かれど、言ひもて行けば一つ胸に當りて、菩提と煩惱との隔たりなむこの人の善き惡しき許りのことは變りける。よく言へばすべて何事も空しからずなりぬや」

と、物語をいとわざとの事に宣給ひなしつ。

こゝに描寫上の態度論と、文學の目的論が生ずる。「善きも惡しきも、世に經る人の有樣の云々」は、作者の體驗を指してゐる、道德的批判に捕はれない作者の人生における直接經驗である。「後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて云々」は、かゝる直觀を、作者は表現せずには堪へられないとの意であらう。それはクローチエの直觀卽表現の境地である。實に、創作におけるかの女の確乎たる態度がその中に窺ひ得られるではないか。

なほ、こゝに寫實、非寫實の問題がある。これは、最初の、「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づ

ることとこそなけれ」といふ一節と、中間の「佳きさまに言ふとては、佳きことの限を選り出でて云々」といふ一節とで、かの女の態度がよく知られると思ふ。かの女がつねに現實の上に立脚し、架空を排除したことは、「この世の外のことならずかし」といふ結論でも分る。しかし、現實的といふことは、必ずしも寫實といふ意味ではなかつた。かの女は、この意味に唯美的耽美的傾向を示してゐる。かの女にとつて、創作の目的はある宇宙の美を表現することであつた。その手近い例は、かの女の日記中の用語の中にもある。すなはち、辨の宰相の美はしさを「物語の女の心地」と形容し、道長の態度の美を「物語に譽めたる男の心地」と說明してゐる。これは、物語（文學）をもつて美を巧妙に表はしたものであるとした考から出たものでなくて何であらう。全く、かの女は、源氏物語の中に樣々な美を表はした、しかも、かの女は現實の世界を行脚しつゝそこからそのすべてを拾ひ集めて來たのである。

これはたゞちに源氏物語のモデル論を想起さすであらう。しかし、わたしは、「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づることとこそなけれ」の言葉通り、源氏物語にはモデルといふモデルは無いと言ひたい。西宮左大臣（源融）菅丞相（道眞）御堂關白（道長）等の事蹟は、部分的に主人公源氏の君の經歷、性格等を思はしめる點はあるけれど、何れもモデルとまではなつてゐないといひたい。わたくしはモデルといふ上は、そのモデルを「ありのまゝ」に寫して、主觀が先きに立つべきではないと考へる。強ひ

て言へば、初音卷あたりの源氏の君の描寫が、御堂關白をモデルにしたと位は言つていゝかも知れない。式部は、どこまでもこの大作を、かの女の頭で拵へてゐる。しかし如何なる作家といつても、三四十人の人物をかき分けるに、周圍の家族知人の性格に對する聯想なしに、それをやりおほすことは出來まい。その意味においては、源氏物語中の人物にはすべてモデルがあり、それは寫實であるといふに憚らない。

つぎに、文學の目的論に關するかの女の意見は如何。これは、地の文で總評して「いとわざとの事に宣給ひなしつ」と言つてるやうに、やゝ四角張りすぎてゐるが、文學を宗教に比較してゐる。さうして、創作を倫理宗教の方便と解釋してゐるが、それは、その時代の思想としての拒み難い結論ではあるまいか。源氏物語細流抄の著者や、源氏奥旨の論者の如く、勸善懲惡や、諷刺教戒を以て創作の動起と解釋するものは、實にこの一節の上に據つてゐる。しかし、これは源氏物語中に表はされた作者の人生觀、社會觀を以て、はつきりと源氏物語自らには、適應されてゐないことを知り得よう。すなはち、作者は道德や佛教を主眼とし、その方便のためにこの大作を完成したのではないことが諒解される。これらについては、さらに項を改めて研究することにしよう。

第一、紫式部の戀愛觀——

まづ、かうした問題から入つてゆくことにする。當時の貴族社會において、いかに戀愛が重んぜられたか、又、大體戀愛の特色はいかやうであつたかといふことは、すでに述べておいた。しかるに、紫式部は、初音の卷の終末に、かう述べてゐるのである。

——古への人は、まことに、賢き方や優れたることも多かりけん。情立つ筋は、この頃の人にえしも優らざりけんかし。

これを以てかの女の思想と解釋するなら、かの女はその時代の特色として、情立つ點を認めてゐることになる。しからば、この情立つといふ内容は如何に。大鏡に、道長が、幼時から他の兄弟と異なつてゐたことなど評した終りに、作者は、

入道殿は、あくまで情おはします御本性にて、必ず人の然思ふらむことをば、おしかへし懷しくもてなさせ給ふなり。

と、記してゐる。まづこれで、情あるといふことは、同情乃至、愛のある意味であることは分るが、愛の爭鬪である戀愛における當時の特色とでもいふものを式部は認めて居るであらうか。戀愛生活において、この點が殊に情立つてゐると指定して居るであらうか。遺憾ながら、この點については、日記にも物語にも觸れられてゐないのである。しかし、かの女の戀愛の理想的態度ともいふべきものは、自ら、物語の中に描き出されてゐる。つぎにそれを研究して見よう。

「世の中」といへば、多くの場合、男女情愛の世界をのみ指したほど、當時戀愛は重んぜられながら、しかもそれが男女相互の理解から出發してゐないことは、まづ悲しむべきことであつた。そこで、光源氏にしろ匂宮にしろ薫にしろ、その嫡妻は家柄、身分的には申分ないが、それが理解のない結婚であつたがために、かれらはその嫡妻に滿足し得ない。源氏の通うた女性の主なるものは、空蟬、軒端萩、六條御息所、夕顔、紫上、藤壺、末摘花、源内侍、朧月夜内侍、花散里、明石上、玉鬘、女三宮、中納言の君などであつた。作者は、源氏のかゝる好色癖について、無論「すゞろごとおぼしいらるゝのみなん罪深かりける」と、その點だけは源氏の惡癖と見なしてゐる。しかも、半面に於て女を狩り歩く男の心を恕してゐる作者の口吻が聞かれないであらうか。かの宇治の姫宮たちが、男とさへ聞けば、すぐ女を喰物にするかのやうに、怖れてゐるのは當時の實情だらうと思ふ。しかも、源氏の作者には、頭中將や匂宮などの好色をも、極めて大目に見てゐる態度が窺へるではないか。

これは前にも述べたとほり當時は、男子の貞操觀といふものが、はなはだ薄弱な時代ではあつた。こゝに式部も他の女性と等しく、これを默認してゐるやうである。そうして情愛の理想的展開は、契情以前でなく、むしろ、きぬ〴〵の別れを知つてから以後の界にありとしてゐる。從つて、男子が多くの女性と情を通ずることは餘義ないとして、その場合、たとへ如何なる醜婦老女（源氏と交情のある末摘花や源内侍の如き）と緣ある身となつても、これらに對し永久、懇に顧るのが男子の義務であ

る。榮花物語にも、かゝる意味において、花山天皇とその御性質を異にし給うた村上天皇をつぎのやうに御賞嘆申してゐる。

村上などは、十、二十の女御、御息所おはせしかど、時あるもなき時も、なのめに情ありて、けざやかならず、もてなさせ給ひしかばこそありしか云々（花山の巻）

源氏の性格も全く、この意味では、理想的に描き出されてゐるといふべきである。源氏は、自分のいつまでも變らぬ好色癖を省て、「なぞや、心づから今も昔もすゞろなる事にて、身を放らかすらむ」（明石の巻）と、自身あきれ氣味であるが、その最大原因は、眞面目過ぎた心持にあつた。帚木の巻の始めにも、源氏を「いといたく世を憚り、まめだち給ひける程に、なよびかにをかしき事は無くて、交野の少將には笑はれ給ひけんかし」と評してゐるほどで、同じく好色といつても、源氏には、交野少將的の浮氣沙汰のことはとても出來なかつた。さて、その眞面目立つ心には、およそ、三つの理由があつた。

一つは、花散里を尋ねた時、源氏は、「とり〴〵に捨て難き世かな。かゝることそなか〳〵身も苦しけれ」と私かに思つてゐるが、すなはち、如何なる異性にもそれ〴〵趣ある點を觀取して、そこにある愛着をすてえない心である。（澪標の巻）

第二は、身を自分に許してくれた女に對する同情の心である。花散里の巻に源氏の心を「いかなる

につけても御心の暇なく、年月經ても苦しげなり。なほ、かやうに見しあたりの情は、過し給はぬにしても、なか〳〵あまたの人の物思ひぐさなり」と述べてゐるが、その實例は、醜女末摘花について さへ源氏が「さりとていかがはせん、我はさりとも心長う見立ててむ」といふ、むしろ同情の態度の中に現はれてゐる。（末摘花の巻）

第三は、世評の顧慮である。源氏が須磨に下りゆく際、紫の上に「常なき世に、人にも情無き者と心置れ果てんも、痛ほしうてなん」と語り、致仕左大臣その他の人々に暇乞に歩いてゐるが、源氏が世評を氣にして溫情を衒ひがちな態度は、到る所に描き出されてある。かの住吉詣の際、他の上達部たちの遊女を弄ぶのを卑しとして、源氏が「されど、いてやをかしき事も物のあはれも人柄こそあべけれ。なゝめなる事をだに少し淡き方によりぬるは、心止むる便りもなきものを」と考へるのも、一つはかうした心からであつたらう。（澪標の巻）

いとわかやかな心の源氏は、時に、頭中將との競爭心からのみ末摘花を得ようとし、また、「さしもあるまじき事なれど、さすがにをかしう思されて」と朧月夜内侍の後を追うたのであるが、なほ、「情ならぬ程に打ちいらへて、誠には亂れ給はぬ云々」（紅葉賀の巻）と作者が源氏を辯護する理由は、以上の諸態度に基づいてゐるのである。

源氏物語中、光源氏以外に、戀愛心理の比較的著明に描かれた人物は、宇治十帖の匂宮と薫とてあ

らう。特に、薫の方は源氏物語中、個性の最も深刻に描かれた一人物であると言つてよい。かれは匂宮と對照的位置に配されてゐて、匂宮の方が、全然情熱的態度を持するに對し、薫の方は、理知的態度の人として表はされてゐる。匂宮が、薫の愛人浮舟を見初めると、はやくも、その浮舟への戀に、盲目になりきつて「我は月ごろ物思ひつるに惚れ果てにければ、人の抵牾かんも知らず、一向に思ひなりにたり」といひ、遂には「かうのみ物を思はば更にえながらふまじき身なめりと心細さを添へて嘆き給ふ」と、狂的愛情の結果、文字通り「あをみ瘠せ」て現心も無いのであつた（浮舟の巻）女は、かくも切ない胸中をづん〳〵言つてくれる匂宮の殉情的態度にいつか、心をひかされてゆく。しかし、一面にはやはり、薫の生眞面目な情愛を忘れることは出來ない。匂宮の氣持は生一本であるだけ、例へば、それ迄卻けてゐた六の宮に對しても、左大臣と母后の斷つての勸めをうけると、また、その方にも全然靡いてゆくといふ輕薄さがあるのである。しかるに、薫が、宇治へ尋ねて來た時の樣子といへばかうである。

この人、はた、いと氣配殊に深く、なまめかしき樣して、久しかりつる程の怠りなど宜給ふも、言多からず。「戀し」「悲し」とおりたゝねど、常に相見ぬ戀の苦しさを、樣宜き程にうち宜給へる、いみじく言ふには勝りて、いとあはれと人の思ひぬべき樣をしめ給へる人柄なり。艶なる方はさる物にて、行末長く、人の頼みぬべき心配など、こよなく優り給へり。（中略）此の人に憂しと思はれ

て、忘れ給ひなん心細さは、いと深うしみぬべければ、思ひ亂れたる氣色を、「月頃に、こよなう物の心知り、ねび優りにけり。つれ〳〵の住家の程に、思ひのこすことはあらじかし」と見給ふも、心苦しければ、常よりも心止めて語らひ給ふ。（浮舟の巻）

かれは、浮舟を信じてさらに疑はない。つねに、無常の念を胸深くしめて、おのれの行爲の他を傷けることをのみ怖れてゐる。その消極的性格は、薫の現實生活をとゝすれば崩壞し去る。しかし、作者式部の氣持が、薫の中にぴつたり現はれ出てゐることは、讀者のたゞちに諾ふところであらう。式部は、源氏の場合と同じく、薫を決して理想化して描いてはゐない。しかし、この二人物を通じて、式部が、男子に何を求めてゐたかを推察することは、必ずしも不可能ではない。

さて、胡蝶の卷に、源氏が玉鬘に、戀をしかけた男子にいかに應ずべきか、その態度を悟し敎へてゐる處がある。玉鬘は、柏木などから戀歌を送られるけれど、いまだ何とも返歌をしないのである。そこで源氏が

右近（玉鬘の侍女――註）召し出でて、かように訪れ聞えん人をば、人選りして答などはせさせよ。好々しう、あざれがましき、今様の事の便ないこと仕出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。我にて思ひしに、あな情無、怨めしうもと、その折にこそ無心なるにや、若しは目覺ましかるべき際は、けやけうなども覺えけれ、わざと深からで、花蝶につけたる便りごとは、心ねたう持てないたる、中〳〵心立つやうにもあり。又、さて忘れぬには、何の咎かはあらん、物の便り許りのなをざりごとに、口疾う心得たるも、さらで有りぬべかりける。後の難とありぬべきわざなり。

などゝ父親らしい戒めをなし、なほ、實例として玉鬘を戀してゐる兵部卿宮や鬚黑には、如何に應接すべきかその方法を敎へる。この言葉は、まづ、この場合紫式部の思想と見て差支あるまい。こゝにおいて、いよ〳〵前說を確證せしめる點は、人情本位の觀察である。醜女に對してさへ我を曲げて情をつゞけた點に、源氏の特色があつた。右近の姉を奪ひ合つた筑紫の二人の男は、野暮にも互に切りあつた。しかるに自分の戀人を次から次へと匂宮に奪はれながら、なほ、相手を傷けることを恐れ、沈默をつゞけた點に、薫の特色があつた。薫の外に、止むない過失から匂宮に身を穢されたために、宇治河に身まで投げすてた點に、浮舟の特色がある。

その詳論に亘つては、次項の紫式部の女性觀の中に、今少し深く立ち入つて檢べることにして、こゝではそれを避けておく。

第二、紫式部の女性觀――

式部は、個性のことを本性と呼んでゐる。主人公源氏の本性の描寫は、多少漠とした嫌ひがあるが、これに比して、やはり婦人の方の表現は一般にうまくいつてゐる。各個性がよく描き分けられてある。

その上、總括的女性觀にも中々面白い觀察がある。

この方から先きに見てゆけば、源氏が、やはり、かの玉鬘がつれ〴〵のまゝに、物語や繪書（何れも、戀愛に關したもの）を寫し弄ばれるのを見て、語る言葉ではあるが、

あなむつかし。女こそ物うるさからず、人に欺かれんと生れたるものなれ。こゝら（小説類を指す――註）の中に、眞はいと少なからんを、かつ知る〳〵かゝる虚事に心を移し計られ給ひて、あつかはしき五月雨がみの亂るゝも知らで書き給ふよ。（螢の巻）

女性特有の幻想的、浪漫的性格をちやんと明瞭に指的してゐるではないか。男性に欺かれるために生れた――とは、作者が源氏の口を借つて皮肉を言つたまでゞあらうが、そこに自ら、かの女の女性觀が窺はれるではないか。また、宇治八宮の、薫に思出の話を語る言葉の中には

此の頃の世は如何なりにたらん。宮中などにてかやうなる秋の月に、御前の御遊の折に候ひあひたる中に、物の上手と覺しき限り、とり〳〵に打ち合はせたる拍子などこと〳〵しきよりも、由有りと覺えある女御更衣の御局々の、おのがじしは挑ましく思ふ。うはべの情をかはすべかゝめるを、夜深きほどの人の氣濕りぬるに、心やましく掻い調べ、仄かに綻ろび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな。何事にも女は弄びのつまにしつべく物はかなきものから、人の心を動かす種になむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を亂

さずやあらむ。女は限りありて、言ふ甲斐なき方に思ひ捨つべきにも、猶ほいと心苦しかるべき。（椎本の巻）

この言葉は、正しく徒然草中の兼好の女性觀を聯想せしめる。これは、女性の感傷味が、男性に對し如何に大きい蠱惑であるか、また、女性の罪障は如何に深いものであるかといふことを、多少、佛説的に解釋したものである。かくて、式部にとつて、女性は、溺いものに運命づけられたものとしてのみ考へられてゐる。女性は、男性に對抗しうるだけの力を持たないものとして考へられてゐる。そこに、自ら女性なる式部には、どうにも出來ない空洞のやうな哀痛が纏つて來るのであつた。

そこに、かの女の描いた女が、いかに男性に對して弱々しいものとなつてゐるか。桐壺の更衣、空蟬、藤壺、花散里、宇治の大宮、宇治の中宮――すべてさうではないか。男性の暴力に對して、しひての反抗もなし得ず。朧月夜なども「情なくこは〳〵しうは見えじ」と源氏に身を許した結果は、罪の意識に苦しめられるだけである。槿院は、ついに源氏の戀情をうけいれず、貞節を通した唯一人の女性になつてゐるが、かの女自ら、「實に人の程のをかしきにも、哀れにも思し知らぬにはあらねど」とさへ告白してゐることを知る。そこにやはり弱味が潜在してゐる。浮舟のか弱く、あたかも影のやうに描き出されてゐるのも、式部の殊更、筆端を吟味した結果であらう。浮舟は、薫の眞實さを痛はしく思ひながら、わが身を告白する果斷を持たない。匂宮の「恨み給ひしさま、宣給ひしことども、

面かげにつと添ひて」と、たゞ戰いてゐる。すべてを「たゞ夢のやうにあきれて」ゐるのである。しかも作者は、その餘りに女らしい弱々しさに、無上の美を夢見てはゐないか。意志のない影の中に、特殊の趣を味つてゐるのではないか。

浮舟と相並んで可憐に描出された女に、源氏の思ひもの夕顔がある。しかし、夕顔にはなほ多少の意志があつた。玉鬘の卷にも、「親なりし人（夕顔のこと――註）は、心なん有りがたきまでよかりし」と、夕顔の性格を賞してゐるが、作者は、浮舟と違つて、夕顔については殊にある個性を印象せしめようとしてゐる。さて帚木の卷に、頭中將が述懷的に述べた夕顔と、夕顔の卷に源氏の感懷した夕顔とを綜合して見るに、溫順（帚木卷――頼むにつけては怨めしと思ふ事もあらんと心ながら覺ゆる折ゝも侍りしを、見知らぬ樣にて、久しき途絶えをも斯う稀かなる人とも思ひたらず）含羞（帚木卷――涙を漏らし落しても、いと恥しく恭ましげに紛らはして）纖弱（夕顔卷――花やかならぬ姿、いとらうたげにあゑかなる心地して、そこと取り立てゝ勝れたる事なけれど、細やかにたを〳〵として物打ち言ひたる氣配、あな心苦しと唯いとらうたく見ゆ）等が夕顔のもつ氣持であり、しかもそれが技巧的に現はれず、どこまでも自然のまゝに出てゐる點が特色をなしてゐる。すなはち、粗末な夕顔の住居では、その寢間にまで賤しい隣家の高い話聲がきこえてくる、一般の婦人であつたら、それを源氏に聞かすことをどんなに恥入るであらうか。しかも童心無邪氣の夕顔は、それをも知らず顔でゐ

るほどなのである。

長閑に、辛きも憂きも片腹痛きことも、思ひ入れたる樣ならで、我がもてなし有樣はいとあてはかに子めかしくて、又なくらうがはしき隣の用意なきを、如何なる事とも聞き知りたる樣ならねば、なか〳〵恥ぢかゞやかんよりは、罪許されてぞ見えける。（夕顔卷）

いはゞ世事に疎く、おひらか、のどやかで弱々しいのである。夕顔の卷に、源氏が夕顔の女房右近に、自分の好みの性質を語つてゐる。それも、次のやうに夕顔の性格そのまゝである。

はかなびたるこそ女はらうたけれ。賢しく人に靡かぬいと心づきなきわざなり。自ら、はか〳〵しくすくよかならぬ心ならひに、女は唯、柔らかにて、とり外しては人に欺かれぬべきが、さすがに物包みし、見ん人の心にて從はさんあはれにて、我が心のまゝに、とり直して見んに懷かしく覺ゆべき。

どこ迄も、强くない本性である。男の切なるほだしに對して默し得ない優美さを持つ女である。

しかし、紫式部の描いた女性には、他の半面に、空蟬があり、藤壺があり、宇治の大宮の如きがあり、また、紫の上、明石の上、明石女御、女三の宮などの如きがある。古來、空蟬は式部自らをモデルにしたものであるといはれ、紫の上は、かの女の理想的女性と稱されてゐる。空蟬や藤壺や大宮な

どは、夕顔などの可憐な草花らしい感じあるに對し、美はしい常盤木でも見るやうな感じをおこさしてくれる。これに對し若菜の卷を見るに、紫の上を櫻の花、明石の上を五月待つ花橘、明石女御を咲きこぼれ出た藤花、女三宮は二月中程の青柳といふやうに、それ〴〵花柳に比較してゐるのも面白い。そこですぐ感ぜられることは、これらの人々が、桐壺の更衣、夕顔、浮舟などに比して、春や夏の花に比較せられたほど、一樣の明るみを持つてゐる點であり、さらに、かれらの行ひに多少なりとも意志によつて、運命を開拓した跡の見える點である。夕顔、浮舟等に對しては、作者の、嘆美的、夢幻的、浪漫的好尙が現はれてゐるに對し、後者の人々においては、創造的、現實的、自我的意味における女性が出てゐる。さうして紫式部は、前者において自然的に顯現する女の美を認めたのであるが、そこにのみ住するには、かの女の批判的精神が到底これを許容しない。こゝにおいて、かの女は、すゝんで後者の如き樣々な個性を創造した。更科日記の作者（孝標女）の樣な若いロマンチストは、浮舟の一生を空想耽美すれ、それは、ついに夢幻を追ふものにすぎない。紫式部が、リヤリストの立場を本據としてゐることは、物語中の各女性の伏線として書かれた帚木の卷の女性論を一讀すればすぐ分る。かの所謂雨夜の品定めにおける結論を見よ。かの馬頭（うまのかみ）の望む婦人は、第一に、しつかりした女性であつた。男の甘言にすぐ靡くやうては駄目だと言つてゐる。「あまり情に引こめられてとりなせばあだめく」やうてはいけないといふのである。第二に、主婦的手腕を持つ女性であつた。「――狹き

家の内の主婦とすべき人一人を、思ひめぐらすに、足らはてあしかるべき大事どもなん方々多かる」やうではいけないといふのである。第三は、他に對してどこまでの優雅な態度を失はぬ女性であつた。「總て萬づの事なだらか」を持つてゐてほしい。第四に、學才と趣味性を持つてゐる女性であつた。「餘りの故由（ゆへよし）、心ばせ打添へたらんをば喜びに」するのである。源氏が乙女の卷で大宮に、やつぱり「女は、たゞ心ばせよりこそ世に用ゐらるゝものに侍りけれ」と、信念を語るが、それも正しく帚木の卷を裏書きするものである。式部が自分をモデルとしたといはれる空蟬は、全く、以上の意味で立派な女と言はなければならぬ。空蟬の容貌は、人並以下といつてよいかも知れぬ、また、良家の出でもなかつた。しかも終生、源氏の愛をつないだ理由は、何よりかの女の立派な心ばせであつた。また、醜女末摘花と同じやうに（末摘花の卷）、つねにきちんとしたかの女の身裝ひであつた。さうして、夫ある身で止むない係はりから、源氏と一夜の契を結んだけれど、その後は頑として源氏の要求をいれなかつた。さりとて空蟬は、源氏を怨み、憎むのでもなく、夫の歿後、薙髮してからは、源氏の六條院にひきとられて、平和な餘生を送つたのである。もちろん、そこに常盤木のやうな凛とした靜けさがある。しかし、かれの懊惱の跡には、爭はれぬ女性の弱さがある。ほんの一歩といふところで踏み止まつてゐる。それが恐ろしくなよびやかであり、いたいけである。法衣の姿となつて六條院の源氏を尋ねてゆく空蟬の態度は、かの玉鬘に語つた源氏の女性觀を實證して居るではないか。

紫の上は、十歳の時、源氏の許にひきとられて、源氏の理想通り養育された女である。そこてその性格描寫が、多少理想化されすぎた嫌ひがあるが、それも許すべきであらう。空蟬が、馬頭の理想の女の第一第二の二項目を特に滿足せしめてゐるに對し、この紫の上の特色は、第三第四の二項目をよく代表してゐる。一般に室内的であつた婦人の對人問題が、ほとんど一は夫（また戀人）、二は侍女に限られてゐたことは、物語の證するところである。さうして當時男性の多妻的情態にあつて、各女性間に嫉妬の情が交され、果ては、罵詈となり宿怨となり爭鬪となつて大問題を卷きおこしてゐることは、しば〳〵物語の主題をさへ構成してゐる。桐壺更衣と弘徽殿の女御の齟齬、源氏の愛をうけた六條御息所の怨靈などは、すべてこの點から生じた悲劇である。雨夜の品定の時、馬頭は、嫉妬心の强かつた指喰女の述懐などして、「怨ずべき事をば、見知れる樣にほのめかし、恨むべからん節をも、憎からずかすめなさば、それにつけてあはれも勝りぬべし」と、要量を得た嫉妬のなほ、意味あることを述べてゐる。かの紫の上は、全くこの伏線によつて描出された理想的妬心のある女であつた。

いと、おほどかに美しうたをやぎ給へるものから、さすがに執ねき所つきて、物怨じし給へるが、なか〳〵愛敬つきて腹立ちなし給ふを、をかしう見所ありと思す。（澪標）

そこて源氏は、新しい戀人を得た時、それを必ずしも紫の上には隱し立てしておかない。自白すると、紫の上は腹を立てゝ、一時後向さなどして嫉むのてあるが、かの女には源氏に對する理解があつた。

むしろ、男性に對する諒解と、女性についての自覺が伴つてゐた。結局、「らう〳〵しくおほどかなるものから、おもりかにして用意ふかき」（藤原爲章の紫の上の評語）本性が現はれて、夫のすべてを許すのてある。

紫の上に依つて聯想される女性は、源氏の正妻となつたが、源氏の愛顧をうけず六條御息所の怨靈にとりつかれて、憂死した葵上てある。葵の上の重態のさま「いとをかしげなる人の痛う弱りそこなはれて、有るか無きかの氣色にて臥し給へる樣、いとらうたげに苦しげなり。御髪の亂れたる筋もなく、はら〳〵と掛れる枕の程」を、源氏は、「有難きまで見て、年頃何事を飽かぬ事ありて、思ひつらむと、怪しき迄打ち守られ給ふ」（葵の卷）のてあるが、かく葵の上の容姿が端麗てありながら、なほ源氏が愛し得なかつた理由は唯一つある。それは葵の上が、紫の上と違つて、餘りに嚴肅端正で、嫉妬をさへ表はさなかつた點てあつた。源氏が、雨夜の品定をおへて、葵にあひに行つた際も、「大方のけしきの氣配も、けざやかに氣高く亂れたる所交らず」といふのが葵の上の態度なのてある。（帚木の卷）換言すれば、女性の意味を自覺しない、女らしさがないといふのが、葵の上の最大短所てあつた。紫の上は、源氏の愛する他の同性とも、かの女の優雅な氣性から、交際をもつゞけてゐる。葵の上には、さうした讓歩の跡は寸分もなかつた。葵の上と六條御息所との關係てあるが、作者はこれを叙述して「（葵の上は）物に情おくれて、すく〳〵しき所つき給へる餘りに、かゝる仲合は情交すべきもの

とも思いたらぬ御心掟」を持たれたと言つてゐる。

つぎに第二の侍女や從者に對する態度であるが、紫の上の博大な愛情は、この上にも表はされてゐる。たゞ一例のみ擧げると、源氏がいよ〳〵罪をえて須磨に下つてゆく時である。源氏に仕へてきた女房たちは、わが主の紫の上の心の中に哀痛の情をよせ、つね〳〵より女主人の「懷かしうをかしき御有樣、忠實なる御心配も、思ひやり深き」方であるから、どうして仕を辭して去つて行かう。「退かで散るもなし」で、いつまでもとその許に仕へようとしたのであつた。

式部は、また、傲慢で侮蔑的の態度を持つ人を、甚だ惡いとしてゐる。式部日記中の右衞門の內侍とか、中將の君とかいふ女房はそれで、「すべて人をもどく方は安く、我が心を用ひんことは難かんべいわざを、さは思はで、先づ我賢しに人を無きになし、世を、空なる程に心のきはのみこそ見え現はるめれ」といふ樣に、ついには內心の卑劣さを見せるのである。かの帚木の卷にもまた、「わが心得たる事ばかりを各がじし心をやりて、人をば落しめ、かたはら痛きこと多かり」と、かゝる女について伏線をひいてゐるが、紫の上はこの點にまた、理想化されてゐることが分る。

さて第三項の條件については、この程度に端折つて、第四項の學才と趣味性の要求の意味を少し考へて見よう。こゝにいふ學才といふのは、むしろ、趣味會得の準備的のものであるから、女性と趣味性といふ問題を考へるだけで充分であらう。さうして馬頭の如き男性の、女性に趣味性を望む所以は、

夫の趣味生活に對する理解を期待するからに外ならない。品定めの宵、やはり、馬頭の述べた言葉の中に

「斜なるまじき人の後見の方は、物の哀れ知り過ごし果敢なき序での情あり、をかしき方に進める方無くて宜かるべし――と見えたるに、又、まめ〳〵しき筋を立てて、耳挿みがちに、美相なき家刀自の一方に打ち解けたる後見ばかりをして、朝夕の出入につけても、公私の人のたたずまひ、善き惡しき事の、目にも耳にも留まる有樣を、疎き人にわざと打ち眞似ばんやは。近くて見ん人の、聞き分き知るべからんに語りも合はせばやと、打ちも笑まれ、涙も差含み、若しは、あやなき公腹立たしく、心一つに思あまる事など多かるを、『何にかは聞かせん』と思へば、打ち背かれて、人知れぬ思出笑ひもせられ、『あはれ』とも、打ち獨言たるに、『何事ぞ』など、あわつかに、差し仰ぎ居たらんは、いかがは口惜しからぬ。云々。

かうした家庭的悲劇は、現代にあつても珍らしくあるまい。こゝに到つて、相互の理解といふことが結婚の第一條件となる。物のあはれを感じる心、趣味を鑑賞するだけの豐かな性格――それは、いくら數人の子供の母となつた女にも、肝要である。身嗜みの心は、寸分持たず油切れた髮をぐる〳〵まきにして、夫が、美くしい眺めや、面白い小說の話をしても知らぬ顏をしてゐるやうな妻は、夫として全くやりきれない。

あはれを知る心――さう言つても、いたづらに、感情的であればいいといふ意味ではない。趣味を鑑賞するだけの才――さう言つても、かど〳〵しく才振るのがいゝといふ意味ではない。「様よう、すべて人は、おいらかに少し心淀てのどやかに、おちゐぬるを元としてこそ、ゆゑもよしもをかしく後ろやすけれ」である。すなはち、感情と理性との適度の調和が第一要件となる。

當時、様々の新流行の行はれたことは、詳しく前説したとほりであるが、その「今めく」ものの大部は、無意味に「古代めく」ことを嗤ひ、ひたすら通人ぶる、風流ぶるに過ぎなかつた。紫式部は、當代では新進婦人の一人に相違なかつたけれど、さうした「今めく」態度を、はなはだ嫌つた。紫式部日記の中では、中宮彰子のもとに仕へる女房と、齋院方の女房との對照比較のかきぶりにも、それがよく現はれてゐる。すなはち、諸女房の批評の中「齋院に、中將の君といふ人侍るなり」云々といふ項目のところで、中宮の方の引込みがちなるに對し、齋院方の方が出しやばり氣味である。そこで、中宮方の女房は、とかく、「うもれたり」「用意なし」「子めきたり」「物づつみす」或は「をかしきこととなし」といふやうに惡評されるが、式部は、むしろ、反對な思想を抱いてゐる、齋院方の女房こそ「ざれ」すぎ、「まめだち」「物はぢせず」「かたは」であると式部は惡く思つてゐるのであつた。

清少納言は、よく紫式部と對照されるやうに、その性格もまことに裏腹である。式部日記の批評のとばしりは、この清少納言の上にも掛つて行つた。「清少納言こそ、したり顔に、いみじう侍りける人、

さばかり賢しだち、眞字書きちらして侍る程も、よく見れば、まだいと堪へぬこと多かり。かく人に異ならんと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば」云々と、その粹めく才幹に一矢を酬いてゐる。

紫式部が、一代の大閨秀作家となつたため、かの女を直接知らぬ女たちは、始め「いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、側々しき様して、物語好み、由めき、歌勝ちに、人を人とも思はず、ねたげに見落」すやうな傲慢な性質だらうと憎んだりした。しかし、面會して見ると「あやしき迄おいらかに、異人かと」思はれる程だつたことも、式部自ら日記中に、他人の話として記してゐる。この事實は、清少納言との趣味の相違を、もつとも雄辯に語つてゐるではないか。式部が、「好む風」すなはち藝術家ぶるといふやうな態度を、特に卑しとした叙述は、その他諸處にある。獨りで、月の美はしさに見とれることをさへ怖れてゐる心持は、却て、餘り卑屈ではないかといふ感じをさへ起さしめる。

かやうな式部の好尚は、源氏物語に散見するかの女の描畫論、作歌論の中にさへ、明確に現はれてゐる。式部は、小説において、おどろ〳〵しき描寫、すなはち、アトラクチーブなものを第二にしてゐる。（玉鬘の巻）繪畫においても同轍で、眞價ある畫題とは、とかく、蓬萊山とか虎とか獅子といふやうな未見のものにある如く考へられがちであるが、それは誤謬である。眞に價あり、畫家の手腕の流露するものは眼前に見る山野の風景畫に越したものはない。書にあつても同様であるが、奇癖が見

え氣どつた筆法は暫し愛玩されるけれど、その美には悠久性が無い、際物的要素が多い、珍らしい——といふ感じは、到底、永續し得ないものである。地味であつても着實といふことが、最も肝要である。美の本質は、その中にのみ宿り得る。

作歌にあつても、理屈はこれと同じである。上の句に、巧みに故事を詠み入れて、さざに歌つたものがあるが、これとて最初目には、「達者だ、才氣がある」と賞美もしようが、長つゞきがしない。また、世の中には、返歌を書く暇もなく、大層忙しい節會か何かの日、殊更、頓智めいた歌を相手に贈つて、困らすやうな人がゐる。何もその日に限つたこともないのに、まあ一寸風流めいてかうした仕振をするのだらうが、それは、眞の風雅を理解しない人間と言ふべきだ。（帚木の巻）

すべて、かうした論法である。深く考察すれば、畫題論は、韓非子に依據があるらしく、すべてが式部の新説といふわけのものではないが、かうした點を、むしろ、紫式部の諸々の性格と統一的有機的のものとして考へて見たい。源氏物語の文章のもつリズムの特色も、この點に關係を持つてゐる。アストンは、多分 Ornate とかいふ形容を以て、豐かな詞遣ひ、細かな形容ある纒綿とした源氏の修辭を佳賞してゐたが、特に、かれが紫式部式と認めた點に氣付かれるものがある。源氏の文致は、大體、當時一般の口語であらう、しかも、かの殊更、迂餘曲折して、雅味纒綿としてゐる點は、紫式部のもつ個性的リズムの發露でなくて何であらう。これは、枕草紙の文致と比較すれば、さらに明らか

てある。上述のやうな描畫論や作歌論に現れてゐる式部獨特の世界の韻律的表現こそ、やはり、源氏の特色ある文致でなければならない。

第三、紫式部の厭世觀——

藤原氏時代の最盛期と稱せられて來た一條、三條、後一條天皇の御代——それは、むしろ、貴族政治の爛熟時代と言つた方がよい、老いの心も忘れられると庶民から仰がれた豪奢の裏には、頽廢の氣配が横溢しつくしてゐた。天延二年、正暦四年、長德四年等における流行病、天元二年の内裏燒亡、大風、大地震（榮花物語）は餘義ない天災として考へての外におくとしても、當時すでに無力の貴族に對し、武力がどんなに隱れた脅威であつたかは、當時の日記が立派に證明してゐる。式部の出生時代から三四十年間を鳥瞰しても、天元五年及び正暦三年兩度海賊蜂起して調庸の路を閉塞したこと、永觀二年、永延元年、永延二年、三度に亘つて、私かに兵仗を帶びる徒に對し發せられた禁令、永祚元年、長保二年における延暦寺と興福寺僧徒の濫行禁止、さては長德二年の高麗犯入事件等數件をその間に數へることが出來る。

然らば、藤原一門の團結は果して充分であり得たか。これは前説したやうに、兄弟が、攝關や氏の長者を爭つて止まないといふ風で、人心は、ために寧日もあり得なかつた。式部の生誕の當時は、恰

も兼通兼家の兄弟の爭ひ、最も甚しかつた時であつたが、程なく弟の兼家はついに外戚の權をかち得ることが出來た。貞元二年兼通薨去により、遺子遺族の痛嘆する樣はまことに哀れで、榮花物語（花山の卷）に悉しいが、それは、丁度源氏物語中、右大臣の勢力が左大臣側を壓迫して、源氏の君が須磨に貶謫を受けて、出立する場面と一致してゐる。此れまで源氏に對し諂諛やまなかつた人々さへ今は右大臣の眼を怖れて、別離の挨拶にだにやつて來ない。「世の中は、味氣無きものかな」と、源氏は、わが身の變化を嘆くけれど、これを見た心ある人は、誰として倏忽變轉とした世の無常を觀ぜずには居られなかつたであらう。兼家の後には、その三子、道隆、道兼、道長に同樣な內爭がくりかへされた。かの道隆薨後、その子の伊周、隆家の貶謫は、また、源氏のそれを彷彿せしめてゐる。かくて末子、道長はよく隱忍自重して、權力を總收し、最後の勝利を得て、「この世をばわが世とぞ思ふ」とさへ歌つたけれど、卓見あるものは、遠からず崩壞しゆく運命をどうして洞察せずに居よう。わが式部の如きも、終生その豫感の悲しみを胸底ふかく含めてゐた一人であつたであらう。

かの女の厭世觀――といつても、われ〳〵は、まとまつたものを、何處にも求めることは出來ない。しかし、かの女の日記のすべての頁、物語のすべての卷にわたつて、かの女の內觀から滲み出る孤寥の姿を、われ〳〵は認めずには居られないのである。あらゆる場合に洩れ出るかの女の感傷味を見逃すことは出來ないのである。

北へ行く雁の翅に言傳（ことづて）よ雲のうはがき掻きたえずして
これは、かの女が父に伴して越前に下る時、友との別れにたへず、詠んで贈つたものである。

若竹の生ひゆく末を祈るかな此の世を憂しと思ふものから
これは、愛兒の病に惱まされた時の詠歌である。

見し人の煙となりし夕より名も睦じき鹽竈の浦

無常の世は、遠慮なく知るべの人々を現實から奪ひ去つていつた。夫との死別は、それにしてもあまりに意外であり、式部の心を震蕩せしめた。眼前には父なき二人の遺子を見た。かの女は、遺子のあはれな運命を思へば思ふほど、子供に對する愛情の高まるのを覺えた。われわれは、源氏物語の至る所に、母性愛の深刻な描寫を見る。桐壺更衣の老母、紫上の祖母老尼、浮舟の母の描寫はその典型的のもの、かの明石入道の、わが娘明石上に對する切實な心持――むろんそれは母性愛には入らないが、「望み叶はねば海に入りて死にね」といふところは、紫式部のわが娘に抱いた感じを、そのまゝ寫し出したのではあるまいかと思はれる。

しかし、「人生はことゞ〳〵く悲哀である」といふ心持が、かの女にも諒解されて來た。その會得はかの女にどんなにか大きい慰めを齎してくれたらう。式部は、痛ましく、庶民の生活を想像した。源氏物語の夕顏の卷には、市民が世の不景氣を託つてゐるところがあるが、それは、搾取されるために生

れた庶民の永遠的怨恨でなければならない。須磨の巻には、源氏が佗住居のつれ〴〵に、漁夫と生活苦について相語るところがある。「浦に年經る樣など問はせ給ふに、樣々安げなき身の憂へを申す。そこはかと無く囀るも、『心の行方は同じことなるかな』と、あはれに見給ふ」とある。かれら庶民階級に比較すれば、式部の宿業は、なほ、慰めるべきところが多かつた。かくて、かれは物語を著述したことから端なくも、道長に認められて宮仕へする身となつたのである。時に、式部はすでに卅歳前後の中年の身であつた。出仕の事實は、式部の生涯にあつて大きい變化であつたことは言ふまでもない。源氏物語の完成、現在紫式部日記の成立は、全くその結果なのである。

しかし、式部自身にとつて、この公仕がたゞちに悔恨の種とならうと、誰が豫想しえたらう。出仕の日の歌はすでに、次のやうであつた。

身の憂さは心の中に慕ひ來て今日九重に思ひ亂るる

わたくしには、それがむしろ式部の過度の内氣、消極性に因るとのみ考へられるけれど、式部のこれまで歩んで來た家庭の室内的生活と、新しく經驗する宮庭の女房生活とが、はなはだ懸隔のあるものであつたがためであることは爭はれまい。これまで異性には漸く几帳越しに應待する身であつたものが、舞臺上のやうな女房生活に出るには、少からぬ鐵面皮と勇氣とが必要だつた。不幸に、式部はこの場合それを持ち合はさなかつた。

かう迄立ち出でんとは、思ひかけきやは。されど、目に見ずあさましきものは、人の心なりければ、今より後の面無さは、只慣れに慣れすぎ、ひた面にならんも、事易しかしと、身の有樣の夢の樣に思ひ續けられて、有るまじき事にさへ、思ひかゝりて、ゆゝしく覺ゆれば、目止まることも、例のなかりけり

と、日記の中に出仕當時の自らを述懷してゐる。

師走の二十九日に參る。始めて參りしも、今宵の事ぞかし。いみじくも夢路に惑はれしかなと、思ひ出づれば、こよなく立ち慣れにけるも、疎ましの身の程やと覺ゆ

これは、寛弘五年の暮、最初出仕した日を追想し、わが態度がいかに出仕當時と變化したかに駭いた心持である。式部は、心と身との對立を考へた。精神と境遇との關係を考へた。さうして、自分の心持の段々大膽になり、態度の粗大となることを知る時、

數ならぬ心に身をば任せねど身に從ふは心なりけり

心だに如何なる身にか叶ふらん思ひしれども思ひしられず

と、やはり述懷せざるを得なかつた。

しかし、はては道長自身が、かの女に迫つて來た。それが、なほ、五節の時、物うく引込んでゐると、道長が來て「いざもろともに」とかの女を伴れ出したり、几帳の上から一枝の女郎花を持つてさしのぞ

いてくる程度の時はよかつた、やがて、「すき者と名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ」と、弱いかの女を籠絡しようと出て來た時、式部は、何より「すき者」など、囁せられる身を嘆かずには居られなかつた。ある夜も、式部が渡殿に寢てゐると、夜ふかく道長が來てその戸を叩いたのであるが、式部はついにその誘惑をも卻けることが出來た。かれに言ひ寄らうとする者は、道長のみではなかつた。ある月夜も、中宮大夫齊信が「格子のもと、とりさけよ」と、式部の局の前で責めあかしたといふやうに、戀を漁る誘拐の手は、しば〳〵かの女を捕へようとしたのである。かくてかの女は、いよ〳〵内氣になり、とかく里がちだつたのでもあらう。

これは、寛弘五年十一月、二三日暇をとつて里の家に歸つてゐた日の記述である。

見所も無き古里の木立を見るにも、物むつかしう思ひ亂れて、年比、徒然に眺め明かし暮らしつゝ、花鳥の色をも音をも、春秋に行交ふ空の氣色、月の影、霜雪を見て、その時來にけりと許り、思ひ分きつつ「如何にや如何に」と許り、行末の心細さは、遣方なきものから、果敢無き物語などに付けて、打ち語らふ人、同じ心なるは、あはれに書き交はし、少し氣遠き便りどもを、尋ねても言ひけるを、只此れを樣々にあへしらひ、そゞろごとに、徒然をば慰めつゝ、世にあるべき人數とは思はず乍ら、差し當りて「恥かし、甚じ」と思ひ知る方ばかり、逃れたりしを、さも殘せることなく、思ひ知る身の憂さかな。試みに、物語を取りて見れども、見し樣にも覺えず、あさましく、あはれ

なりし人の、語らひしあたりも、我れを如何に面なく心淺き者と、思ひ貶すらんと、押し計るに、それさへ、いと恥しくて、え訪れやらず。心にくからんと、思ひたる人は、大空にては文や散らすらんなど、疑はるべかめれば、いかでかは、我が心の内ある樣をも、深う押し計らんと、理りにていとあいなければ、中絶ゆとなけれど、自ら、書き絶ゆもあり、またすみ定まらずなりにたりとも、思ひやりつゝ、音なひくる人も、難うなどしつゝ、すべて、果敢なき事に觸れても、あらぬ世に來たる心地ぞ、こゝにてしも打ち優り物あはれなりける。

何といふ痛ましい寂寥に住む心であらう。それは、身を公のものにするものの、味はふ悲しみてなければならぬ。出仕前には、あれほど迄友愛を契つた人々の、わが仕振に原づくとはいへ一人去り二人去るその淋しさを味ははねばならぬ。身は心を征伏する、しかし、世を厭ふ心の中にも、なほすべてを許しあふほどの深い愛情を要求する心のみはすてることが出來なかつた。かの女は、久し振、わが家に歸りながら、去つた友のことを考ると、空洞のやうなわが心をのみそこに見出だした。

改めて今日しも物の戀しさは身の憂さや又樣變りぬる。

もちろん、宮仕への同僚にも、自ら親しい友は出來た。「うきねせし水の上のみ戀しくて、鴨の上毛にさえぞ劣らぬ」と寢覺物語に歌をおくつた大納言の局は、その一人である。しかし、式部が衆目嫉視の中にあつたことは、「御前はかく（眞字よみて）おはすれば、御幸は少きなり」と後言いふ類の女

のあつたことで分る。そして五節にも、「物うくて」出ないやうに、多數の人々の中にあつて、式部の心はいよ〳〵、沈默の底に沈んでいつた。

人の中に交りては、言はまほしき事も侍れど、いてやと思ほえ、心得まじき人には、言ひて益なかるべし、物もどきうちし、我はと思へる人の前にては、五月蠅ければ、物言ふことも物憂く侍る

その時、式部はすでにひたすら、孤獨を愛するといふやうな病的な氣持になり到つて、中宮御產の騷ぎにさへ、「その頃は、しめやかなることなし」と、それを厭ふべきこととしてゐる。

しかり。源氏物語は、いかに「物うき」心の人によつて滿たされてゐるだらう。寂寥をあるじとし、寂寥に住む人の心持が、物語全體に大きい陰影を投げかけてゐることであらう。それは、かならず式部自らの心の反映でなければならぬ。宇治十帖は、この點において、前四十四帖に匹敵しうる重味が存してゐる譯である。

宇治の大宮、二宮の青空のやうな淋しみは、薫の理念の桎に縛された性格的悲劇を、そのまゝ映したものである。薫には、その上、表面源氏の子ながら、實はさうでない事實を感知してからの運命的悲劇が纏はつてきてゐる（匂宮の卷）。この二つのものは糾はつて、かれの現世生活を、一歩々々と闇の底にひきずつてゆくのである。まづ、總角の卷における薫が大君に對する愛熱と、異性をおそれ世を果敢なむ心から、これを受納れ得ない大君の惱みを見る。大君の性格は椎本の卷にも述べられたやうに「けざやかに、いと物遠くすみたる樣には見え給はねど、今樣の若人達の樣に、艶氣にも、なてなさで、いと目安く長閑ならん心ばえならむとぞ、推し量られ給ふ人の御氣配」なのである、それは到底、戀の出來ない性格である、ここに、兩者が相互に、性愛を求めず、悲哀を求めてゐるのに氣付かれないだらうか。薫の戀については、「やう〳〵聖になりし心を、一節遂へ初めて、樣々なる物思ふ人ともなるかな」（蜻蛉の卷）と、作者が注釋してゐるやうに、かれは、暗い星の下に生れた身を意識すると共に、これまですでに幾度か出家得道しようと志した人であつた（橋姫の卷、椎本の卷）。その厭世觀が、不思議な共鳴を見出だしたのが、この大君との戀ではなかつたか。しかし、まだ若い薫はその眞相を酌みとり得ないで、大君をのみ、いつ迄もつらい人にしてゐるのである。

つぎに、薫が見出だした愛の對象は、中君であつたが、中君はすでに、戀敵匂宮のものとなつてゐた。元來薫の內氣で生眞面目さは、同輩の物笑ひになる程で、帝さへも、かれに對しもつと打ちとけた態度を望まれるほどであつた。中君は、かつてより薫を信じ、現在の匂宮の多情な心を思ふについても、薫をいとしく思つてゐる。しかし、むしろかれの餘り理知的な性格を見て、戀の出來ない男との み思ふのであつた。寄生の卷に、薫が忍んで中君を尋ねてくる。「さて又の日の夕つ方ぞ渡り給へる。人知れず、思ふ心添ひたれば、あいなく心使ひ痛うせられて、なよやかなる御衣どもを、いとゞにほはし添へ給へるは、餘りおどろ〳〵しき迄あるに、丁子染めの扇の、持て鳴らし給へる移り香などさ

へ、譬へん方なく目出度し」といふ扮装てある。此れに對し、おそれながら中君も遠くから應待する。

そこで

薫「いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ、受け給はらまほしき世の物語も侍るものを」と宣給へば、げにと覺して、少し身じろき寄り給ふ氣配を聞き給ふにも、ふと胸打ちつぶるれど、然りげなくいとゞしつめたる樣して、宮の御心配思はずに淺うおはしけりと覺しく、且つは言ひもうとめ、又慰めも旁々に靜々と聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御怨めしさなどは、打ち出て語らひ聞こえ給ふべき事にもあらねば、只、世やは憂きなどの樣に思はせて、言少なに紛らはしつゝ、山里にあからさまに渡し給へと覺しく、いと懇ろに思ひて宣給ふ。

かく中君は、信ずる薫に、宇治への同伴をさへ、ほのめかし頼んで來る。この場合、薫は潔く承諾してしまへばいゝのであつた。しかし、薫の理念は、その一刹那例の冷たい光をさらけ出して來た。「少しも違ひめありて、心輕くもなど覺しものせんに、いと惡しう侍りなん」云々と言つて、匂宮の誤解を怖れるところに、中君とかれとの絆は、あはや斷たれてしまふ。

しかるに、相手の匂宮は、薫の漸くにしてわが者にした浮舟をさへ、無理非人に奪ひとる男ではなかつたか。薫は、早く浮舟を京の家に伴ひ來たなら、すべての悲劇は、未然に防がれたらう。「覺し立ちぬる限りは、あるまじき里迄も、尋ねさせ給ふ御樣よからぬ御本性」の匂宮の裏をかいて、浮舟の

母にも滿足を與へ得たらう。しかし徒らな躊躇をしたのも、かれの冷たい理性の指し金のためであつた。

――わが爲めにも他人のもどき有るまじく、斜にてこそあらめ。俄かに、何人ぞ、何時よりなど聞き咎められんも、物騒しく、始めの心に違ふべし。又、宮の御敵の聞き覺さんことも、元の心をきはゝしうゐて離れ、昔を忘れ顔ならんも、いと本意なし、など覺し召し沈むるも、例のいとのどけさ過ぎたる心柄なるべし。（浮舟の卷）

「始めの心に違ふべし」といふのは、薫が宇治に行き初めた事の、道心を求めるためであつたからの意である。かくて、この「のどけさ」すなはち躊躇逡巡の態度が、薫の戀のすべてを、闇の底にぶち投げてしまつた。

この薫の心持を、そのまゝ紫式部に押しあてゝ見るのは、決して不當ではあるまい。わたくしは、宇治十帖を讀むごとに、この點に、日記よりも家集よりも、紫式部の厭世觀と、その意味とをそのまゝ觀取し得るやうに思ふのである。しかし、わたくしは、ペンを、式部の宗教觀に移してゆかなければならぬ。

第四、紫式部の宗教觀――

華嚴經に「舉ゝ果知ゝ因、譬如ゝ蓮花方ゝ其吐ゝ花而果具ゝ藥中」と見える。まことに、因果の理はそのもと深く、小乘、權大乘、實大乘の三乘を通じて、始めて明らかになるものである。それを四種に分ち、順現受業・順生受業・順後受業・順不定受業とする。詳述することはこゝに省くとして、台密何れとしてこれを度外視する宗派はなかつた。十界依正、六道輪廻の思想は、轉迷開悟、止惡修善を說く上に、かならず引用せられて來た。

しかし、離苦得樂の要求は、宗派により時代により同一轍といふ譯には行かない。たとへば、世の中ともすれば、いと騷しう人死になどす。さるは御門の御心も、いと美はしくおはしまし、殿の御政も惡しうもおはしまさねど、世の末になりぬればなゞめり。年毎に世の中心地おこりて、人もなくなり、哀なる事ども多かり。（榮花物語「はつ花」の卷）

これは寬弘三年の記事であるが、人死に云々のことは正曆年間の疫病大流行（大鏡「太政大臣道長」の條にくわし）等をさすのであらうが、この末世思想は、なほ遠因があるやうに思はれる。さうして、かうした不安さが、離苦得樂の要求を、その時代において濃厚ならしめた事實は否定し得られないだらう。といふのは、かの源信が、天台から出て往生要集を撰し、穢土厭離、淨土欣求の意味を說いたことも、末世觀念と到底無關係に考へられぬからである。（當時、式部は十歲前後であつた）

紫式部の厭世觀については、前項に概說したとほりである。かの女の兄は、定暹といひ阿闍梨になつたほどの天台の高僧であるが、その他の意味からもかの女が佛敎に結びつけられることは自然の事であらう。さうして、源氏物語を繙讀するに及んで、もつとも明確に印象される點は、徹底した因果論（「さだめられしこと」）の表示である。生死流轉、三世因果の理を信じ、立派な依報正報をうけようと望む。天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道は、いまだ六凡の境界で、その中、苦樂相半ばしてゐるのがわれら人間の人間としてうけた果報である。しかし、同じく人間の中にも、その依報の程度は千差萬別であらう。

源氏物語に描かれた百數十人の人物、もちろん、一人としてこの宿命、この運命に對抗し得たものはなかつた。まづ男女の關係は、こと〳〵く「前の世にも御契や深かりけむ」（桐壺の卷）であつて、例へば、葵の上の危篤にあつても、源氏は、「大臣、宮なども深き契ある中は、巡りて絕えざんなれば、相見る程ありなむと覺せ」（葵の卷）と、相慰めてゐるのである。また、匂宮が浮舟を戀し初めたのは、ふと風のために靡つた簾の隙から見初めたことにあつたけれど、これをも「逃れざりける宿世」と觀じてゐる（浮舟の卷）同じく、美貌も前世の因にあるとしてゐることは、源氏や薫や浮舟の形容において述べられてある。「人の眼を驚かし、心を歡ばせ給ふ、昔の世床しげなり」とは、紅葉賀において、恐ろしいほどまで美しく輝いた源氏の姿を賞した筆である。

なほ、因果の中には、現世の因が現世で果を生む所謂、順現受業といふものがある。源氏と藤壺の

道ならぬ關係が、源氏の情人女三宮と中納言の關係に依て現世の中に報ぜられ、源氏を貶謫したまうた朱雀院が、現世において御不幸にましました如き、物語中、顯著なその適例とすることが出來る。これらが式部の意識的構想であつたことは爭はれない。また、宿曜をみるといふ例の人相見のことが二三件出てくるが、それは、その人の享くべき依報を前以て透察する術の意味にすぎない。藤壺がまさに病逝しようとすると「空にも例に違へる月日星の光見え」(薄雲の巻)てとあつて、天命は如何ともすることが出來ないことを語つてゐる。源氏も須磨貶謫の惱みを「とある事も、かゝる事も、前の世の報いにこそ侍るなれば、言ひもて行けば、唯自らの、怠りになん侍る」(須磨の巻)と、最後のあきらめに到達してゐる。この、あきらめは、そのまゝ式部の心持ではなかつたらうか。少くとも、さうした慰安は式部が求めてゐた心持であつたと言へよう。

しかし、現在の果を信ずることは、現在の因が、たゞちに未來の果を生みつゝあることを認めることになる。われ〳〵は、懺悔によつて惡業を消滅しうるけれど、日本佛敎はなほだ現實的傾向を持ち來つて、轉迷開悟の要求より、まづ立願祈禱によつて離苦得樂することを大切とした。これは、佛敎渡來の時、百濟王の佛敎の功德を說明してゐる言葉で分る如く、渡來佛敎の特色でもあつたので、奈良に五宗、平安に新二派があつたが、何れもこの點には、一致してゐると言つてよい。所謂、祈禱佛敎である。天台宗の如き智論を以て指南としてゐるものであるが、

四種相承(圓、密、禪、戒)といふやうな妥協的包攝的態度に出たゝめ、ついに台密とさへ稱せられるほど、平安朝中期以後は、加持祈禱の道場となり終つた。「女院(註——圓融院女御、道長の妹)には、年頃、法華經の御讀經あるに、又、始めさせ給ひて讀ませ給ふ。世の中の騷しさをいと怖ろしきものに思したり」(榮花物語「見はてぬ夢」の巻)といふ風に、現世利益のために、法華八講、何々講といふやうに、諸方の寺院に絕間ないほど、讀經が行はれて來たのである。

讀經については、精進祈禱が重んぜられた。伊周が筑紫へ流罪となつた時、木幡の父の墓から北野天神へと參詣していつたのは、無事歸還を精進祈禱するためだつたのである。道長が、御嶽精進を志し金峰山まで登つたのは、わが子彰子の安產を祈るためであつたのである。(榮花物語「はつ花」)祈禱の利益の顯著なことを信じてゐたことは、源氏物語中の挿話を以て察せられる。玉かつら及び浮舟に對する初瀨觀音の利益(玉かつらの巻と東屋の巻)や、明石上に對する住吉の神の利益(明石の巻)は、構想の上に離されがたい關係を持つてゐる。源氏が、頭中將の子の玉かつらを隱しておいたのを、表はしたのは、春日の神の冥罰を怖れたからであつた。(行幸の巻)

一般の病氣は、多く僧侶の加持によつて快癒された。世と共に迷信の增してゆく時、式部が、かゝる信仰を抱くことも自然としなければなるまい。源氏物語の中には、その他、陰陽五行說、夢合せ、物怪生靈の信仰などが筋の中に挾まれてゐる。頭中將は、玉かつらの行衞を夢で知り(螢の巻)、浮舟

の入水は、やはり老母により夢で悟られた（浮舟の巻）。物怪生靈のことは源氏物語の大筋に變化を與へてゐること、こゝに述べるを要すまいが、かゝる迷信の行はれたことの事實であつたことは、史實の證するところで、榮花物語を開いても、冷泉女御超子の薨去は物怪のためでありとし（花山の巻）兼家は、女三宮の物怪に惱まされた（さま〳〵のよろこびの巻）また、正暦四年特に菅原道眞に對し太政大臣の贈位があつたのは、憂死した道眞の物怪を靜めるためだつたのである。

現世利益を求める第三目に出家といふ方法がある。この當時の出家には、流行的傾向さへ見える。一族の死にあつて出家するといふのは、そこに充分意味がある。しかし、延壽の爲出家する源氏物語中の左大臣の如き例が、甚だ多かつた（繪合の巻）婦人の尼になるも、物語中の空蟬、藤壺、宇治大君、浮舟の如きについては、同感される點が十分あるが、一時の失意失戀から遁世するものも少くなかつた。雨夜の品定め中に、馬の頭が、かうした輕卒な態度を批難してゐるが、これはやはり紫式部自身の思想であらう。

第四にあぐべき、かれらのとつた手段は、爛煥たる寺堂を建立し、莊嚴な法會を營むことであつた。藤原氏はその氏寺として、すでに、奈良に興福寺を持つてゐたけれど、資財あるものは爭つて私寺を建立し、あるひは、邸宅の一部を伽藍となした。基經の極樂寺、忠平の法性寺、師輔の楞嚴院、兼家の法興院、爲光の法住寺、道隆の積善寺、殊に道長の法成寺の如き、七堂伽藍金銀瑠璃を羅織して、

その中では華美を極めた佛事供養が營まれ、ゆるやかな轉讀の諧調のひまひまには管絃の響、蝶鳥の舞歌がたゞよひ出た。さうして、現世得樂を重んじたかれ等は、かうした佛事によつて正報を得られるものと信じてゐたほど、いつか寺院の境内に淨土を夢想し、供養行事に極樂を幻覺するのであつた。大鏡に、庶民が、法成寺の善美、目を駭かす有樣に、極樂が世に現はれたと佳賞することが出てゐるが、源氏物語には、源氏が故院のために催した八講を、禪師が「いとかしこう生ける淨土の飾りに劣らず。嚴しう面白き事どもの限をなむし給ひつる。佛菩薩の變化の身にこそものし給ふめれ。五つの濁り深き世に、などて生れ給ひけむ」（蓬生の巻）と激賞するところがあり、また、かの六條院の莊嚴さを「生ける佛の御國と覺ゆ」（初音の巻）とさへ形容してゐる巻もある。全く、後世は、法興院が東三條殿の中にあり、法成寺が京極殿の中にあるといふ風で、私宅と寺院の境界さへ撤廢され、また仁和寺や嵯峨寺なども寺院ながら、花の名所として、遊樂の界と化して來たのであつた。そこに人々は、紫雲は見なかつたけれど、心から現實淨土の法悅に陶醉し得たのである。源氏物語中の明石入道は、灯影のもとに源氏の君の琴をひいてゐる姿の艶美さに「後の世に願ひ侍る所の有樣も思ふ給へらるゝ夜の樣かなと、泣く〳〵めて」（明石の巻）てゐるが、むしろ法成寺の萬燈會などは、すゝんで現實の中に淨土を建設しようとしたものであつた。この事實は、法成寺の扉繪、鳳凰堂の九品淨土圖などに依つても傍證され得るであらう。

以上は、藤原時代の佛教が如何に現世利益をその目的としてゐたかを、四項目に分けて概說したにすぎない。さうして、わたくしは、わが紫式部が、源氏物語に遺憾なく當代の佛教の情況を描いてゐることを見て來た。作中に描寫してる點を以て、それを、たゞちに式部の宗教觀と推定することの誤謬多いことは論ずるまでもない。しかし、式部が確かに、祈禱的信仰や生靈的迷信（もつとも、こと〳〵く迷信といふ譯にゆかないが）を抱いてゐた事實に、式部の宗教觀も、かなり時代的のものであつたことを斷定するのは、誤つてはゐなからう。

しかし、その以上、式部の懷抱してゐたものに、彌陀の信仰の存してゐたことを、わたくしはこゝに認める。すなはち、金堂供養の如き現世淨土の有樣も、ついに、式部をしてその厭世觀を捨てしめ得なかつたのである。かの女は、梵唄の音の中にさへ、いよ〳〵現實の悲哀を感じた。絕美なものゝ中に、ます〳〵哀愁の宿るのを味はつた。そこにかの女は、現世の生活を捧げて、死後の得樂を思つたのである。それは、恐らく前說の往生要集の感化であつたらうと思ふ。傳說によれば、往生要集が一度公にされると、上下萬民、源信の德を慕ひ、圓融院皇后詮子は、源信をしてその主旨を圖解して奉らしめられたといふ事である。その說く所、聖道門（自力）の難行道をすて、專ら、淨土門（他力）の易行道により、彌陀の本願を信じ、その名號に歸依してその淨土に入らうといふのである。かれが、彌勒淨土、忉利天を捨てゝ、特に彌陀の淨土を選んだ所以は、そこに、聖衆來迎、蓮花初花等の十の

福樂を認めたからであつた。

さて源氏物語に描かれた出家する人々の心を見るに、それが必ずしも病災平癒、長壽延命のためばかりでないことに氣付かれよう。つぎには、源氏の君の出家するまでの道程を辿つていつて見ると、その厭世觀の最初に見えた卷は、葵である。すなはち、頭中將との物語がふと、しめりがちになつて「はて〳〵は哀れなる世を言ひ〳〵て打ち泣きなどし給へり」とある。つぎに、出家の望みを仄めかしたのは、正室葵上の死に遭つた時で、「憂しと思ひしみにし世も、すべて厭はしくなり給ひて、かゝる絆しだに添はざらましかば、願はしき樣にもなりなましと思す」云々と、稚ない紫上に對する愛着のために、その志が鈍らされてゐる。賢木の卷の、父帝御崩御の際も、結極「樣々の御ほだし多かり」で全うせられなかつた。源氏が雲林院に詣で天台の六十卷をよましめられた條には、來世往生の望みが、殊に、はつきり描かれてゐる。

おし明け方の月影に、法師ばらの閼伽奉るとて、から〳〵と鳴らしつゝ、菊の花、濃き薄き紅葉など折り散らしたるも果敢なけれど、この方の營みは、この世も徒然ならず。後の世、はた、賴母しげなり。さて味氣なき身をもて惱むかな、など思し續け給ふ。（賢木の卷）

しかし、源氏が眞に、現實の哀苦を感じたのは、須磨の生活であつただけ、須磨の生活において始めて、「こまやかなる御直衣、帶しどけなく打ち亂れ給へる御樣にて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆる

〻かに讀み給へる、又世に知らず聞こゆ」とまことい道心者のやうな氣持になれ得てゐる。殊に、暴風雨の難は、源氏自ら、京の紫上に「世を思ひ離るゝ心のみ勝り侍」ると音訪れをしたほどに、それによつて大きい動搖を心にうけてゐる。かくて明らかに出家の意向を洩らしたのは、若菜(下)の卷においてゞあるが、その時はなほ帝の御許しが出なかつた。その後、鈴虫の卷あたりて、その期待がいよ〳〵濃厚になりゆくところに、かれは、突然紫上の遠逝のうき目にあふ。それは「御法」の卷になつてゐるが、こゝにおいて、いよ〳〵彌陀の名號を稱へて出家する。源氏の淨土門信仰の態度がはつきりとそこに明示されてゐる。

さて、源氏の君が出家しようとしてかくたゆたふ心は、式部が、宮仕への身ながら出家しようとしてためらふ心持であつたものらしい。紫式部日記の一節に、

行幸近くなりぬとて、殿の内を、愈々みがかせ給ふ。世にも面白き菊の根を尋ねつゝ堀りて參る。色々移ろひたるも、黄なるが見所あるも、様々に植ゑ立てたるを朝霧の絶間に見渡したるは、げに老いも卻きぬべき心地するに、なぞやまして思ふ事の少しも、斜なる身ならましかば、好き〳〵しくもてなし、若やぎて、常なき世をも過してまし。目出度き事、面白き事も、見聞くにつけても、只思ひかけたりし心の、引く方のみ強くて物憂く、思はずに嘆かしき事の優るぞ、いと苦しき。(寛弘五年十一月の條)

寛弘五年といへば、式部は、いまだ卅四五歳である。かの女の厭世觀は、何故、かの女を出家道心の希望にまで引き入れたのであらうか。現世得樂のため、順現受業のための出家の多かつたことは、既に言つた。式部が、皆人のやうに現世的幸福を望んでゐないのは、いふまでもない。その翌年一月の日記の一節は、又、その希望がその頃ます〳〵熱して來たことを語つてゐる。

如何に今は、事忌みし侍らじ。人は兎言ふとも角言ふとも、只阿彌陀佛にたゆみなく經を習ひ侍らん。世の厭はしき事は、凡て露許り心も止らずなりにて侍れば、聖にならんに、懈怠すべうも侍らず。唯ひた道に反きても、雲に上らぬ程のたゆたふべき様なん侍るべかんなる。其れに休らひ侍るなり。年、はた宜き程になりもてまかる。痛う此れより老いぼれて、はた珍らにぞ經讀まず、心もいとゞたゆさ優り侍らんものを。心深き人眞似の様に侍れど、今は只かゝる方の事をぞ思ひ給ふる。それ罪深き人は、又必ずしも叶ひ侍らじ。前の世知らるゝ事のみ多く侍れば、萬づにつけてぞ悲しう侍る。(この項、式部の娘どへ宛てた消息の紛れて日記中に入つたものか)

未だ卅五六歳の年齒、しかも一世の才媛として宮仕へをし、殊に關白道長の寵愛を被つてゐる身で、年はた宜き程と言ひ、自らを「罪深き人」と嘆き、「前の世知らるゝ事のみ多く」と愁ふるは、はなはだ、不可解である。かくて果して式部は、全然、現世を超越し死生の界を解脱し得たであらうか。傳說によれば、かの女は檀那院僧正の允可により、天台の一心三觀の血脈を傳へ得たとも言はれてゐる。

出家の年代についても様々な憶測が下されてゐる。長元四年五十七歳で寂したといふ傳へを正しいとすれば、なほ、その後廿餘年生殘してゐた譯である。その間の消息の杳として知られ得ないで、式部を見なければならないことは、わたくしにとつて何といふ遺憾なことであるか。

しかし、こゝに敢て、わたくしの批判を許して戴けるなら――こゝにわたくしは、再び、橋媛の卷から源氏物語を遡つて行つて見たいのである。

宇治十帖において、式部の筆がいよ〳〵圓熟し、薫の描寫等の中に、最もよく作者の呼吸の聞かれることは、すでに論じておいた。さうして、薫の性格の基調が厭世的、宗教的であることも言つたとほりであるが、かれの求めた信仰は如何なる性質のものであつたか。これを朧ろながら、わたくしは、橋姫の卷に、薫が宇治の宮を慕ふ氣持に知り得るのである。

聖だつ人、才ある法師などは、世に多かれども、あまり強々しう、氣遠げたる宿德の僧都、僧正の際は、世に暇なく生直にて、物の心を問ひあらはさむも、こと〳〵しく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の忌むことを、保つ許りの尊さはあれど、氣配卑しく言葉だみて、骨氣無げに物慣れたる、いと物しくて、晝は公事に暇無くなどしつつ、しめやかなる宵の程、氣近き御枕上などに召し

入れ、語らひ給ふにも、いと流石に物むづかしくなどいみあるを、いとあてに心苦しき樣して、宜給ひ出づる言の葉も、同じ佛の御敎をも、耳近き譬ひに引きまぜ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人は物の心を得給ふ方の、いとことに物し給うければ、漸う見馴れ奉り給ふ度毎に、常に見奉らまほしうて、暇無くなどして程經る時は、戀しう覺え給ふ。

薫が、師として大僧正よりも宇治の宮をと慕つた心持には、少くとも二つの理由があるやうである。一つは、かれが學究的信者でないこと、いま一つは、佛敎に詩を求めてゐること。これは、宇治十帖に描かれた薫の一擧一動が、立派に實證してゐると言つてもよい。かれは幾度か出家を期しながら、やはりそのまゝ道心しうる人間ではなかつた。かれは理性の鏡にうつる現實界に、合法的調和的のある物を認めえてゐる。加ふるに、かれは詩心を持つてゐた。それは、かれを粘り強い情愛の人としたのみならず、大自然の中にひそむ幽玄な美を感得せしめた。穢土――その言葉は、現世を呼ぶに餘りに不適當である、かれの人生の行程は、まことに失敗の反覆であつたに係らず、かれの涙には甘味がある。かうまで薫の性格を結論することは、多少言ひすぎの嫌ひがあるかも知れないが、薫は浮舟と共に、紫式部の最も愛した人物の一人であることは言つてよい。薫は、かくて性格的破產をうけたが、しかも敗北の下で勝利を謳つてゐるではないか。（孝標女が、浮舟の生涯に憧憬を抱いた心もそこにある。）

つぎに、源氏君薨去のすぐ前を叙した幻の巻を再讀して見よう。哀愁に沈む源氏の君が、いよ〳〵その美はしさを見せてくれるやうに、悲哀を敍述するに及び、式部の筆がます〳〵冴え出てゐることは、一種の驚異である。紫の上の逝つた翌年の早春のことである。源氏は、紫の上の追憶に、全くうつゝなしの有様であつた。

入道の宮の渡り始め給へりし程、其の折はしも色には、更に出だし給はざりしかど、事に觸れつゝ、味氣なの業やと、思ひ給へりし氣色の哀れなりし中にも、雪降りたりし曉に立ち休らひて、我が身も冷え入る様に覺えて、空の氣色激しかりしに、いと懷かしうおいらかなるものから、袖の痛う泣き濡し給へりけるを、引き隱して、迫めて紛はし給へりし程の用意などを、夜もすがら、夢にも、又は如何ならむ世にかと思し續けらる。曙にしも曹司に下るゝ女房なるべし、「甚じうも積もりにける雪哉」と言ふを、聞きつけ給へる、只其の折の心地するに、御傍の寂しさも言ふ方無く悲し。

浮世には雪消えなむと思ひつゝ思ひの外に猶ぞ程經る

例の紛はしには、御手水召して行ひ給ふ。埋みたる火起し出でて、御火桶まゐらす。中納言の君、中將の君など、御前近く御物語聞こゆ。云々

堪へない寂しさの中にも、月日は過ぎて、また、葵祭の時節になつたが、何の慰めもない。

中將の君、東面に假寢したるを、歩みおはして見給へれば、いとさゝやかにをかしき様して、起き

上りたる面付花やかに匂ひたる顏もて隱して、少しふくだみたる髪の掛りなど、いとをかしげなり。紅の黄ばみたる氣添ひたる袴、萱草色の單衣、いと濃き鈍色に黑きなど、うるはしからず重りて、裳唐衣も脱ぎすべらしたりけるを、兎角引き掛けなどするに、葵を傍に置きたりけるを採り給ひて、

「如何にとかや、此の名こそ忘れにけれ」と宣へば

さもこそはよるべの水にみ草ゐめ今日のかざしよ名さへ忘るる

と恥らひて聞こゆ、げに、いとほしくて、

大方は思ひ捨てゝし世なれども葵は猶ほや罪をかすべき

など一人許りは、思し果てぬ氣色なり。

五月雨の時節は、またなく淋しい。

五月雨は、いとゞ詠め暮らし給ふより外の事なく、さう〳〵しきに、十餘日の月、花やかに差出てたる雲間の珍しきに、大將の君御前に侍ひ給ふ。花橘の月影に、いと際やかに見ゆる薫も、追風懷かしければ、千世を鳴らせる聲もせなむと、待たるゝ程に、俄かに立出づる村雲の景色、いと生憎にておどろ〳〵しう降り來る雨に添ひて、ざと吹く風に燈籠も吹き惑はして、空暗き心地するに、窓を打つ聲など珍らしからぬ故事を、打ち誦じ給へる折からにや、妹が垣根におとなはせまほしき御聲なり。云々

如何に、人々の心持を表はすに、それは巧みに自然を拉し來り、點景してゐることであらうか。哀愁の描寫の巧妙な節々は、言ひ續くれば限りはないが、式部は、しば〳〵蕭條たる秋景を、手際よく配してゐる。源氏は「風、野分だちて吹く夕暮に」逝くなつた紫の上を忍び、(御法の巻)夕霧は、「峰の葛葉も心慌しう爭ひ散る紛れに、尊き讀經の聲かすかに、念佛などの聲ばかりして、人の氣配いと少な」い小野の里に悲しき戀を遂げんとし(夕霧の巻)眞木柱が、鬚黒と破鏡の歎を抱いて去り行からとすれば、「御乳母ども差集ひて宣ひ歎く、日も暮れ、雪降りぬべき空の景色も、心細う見ゆる夕なり」(眞木柱の巻)と叙し、また、藤壺の死にあつた時、源氏は「秋の雨いと靜かに降りて、御前の前栽の色々亂れたる露の繁さに、古への事どもかき續け思し出でられて、御袖もぬれつゝ」日を送るのであつた(薄雲の巻)その他、秋の描寫は、源氏の貶謫された須磨に音訪れた秋風、桐壺更衣の老母の隱れ家を照らす秋の月——何れとして、哀調の高鳴りを覺えしめないものはない。すべてが「秋の頃ほひなれば、物のあはれ、とり重ねたる心地」(松風の巻)である。それから式部は、故意からか、夕顏、紫の上の祖母、葵の上等主要な人物の死を、すべて秋季のことゝしてゐる。もちろん、全編の中には新綠を背景にして哀愁を寫し出したものが二三無いではないが、それらの出來ばえは立派だとは言へない。

悲哀美——わたくしは、それを、式部の胸裏にはつきり意識するものである。さらに見よ。式部は、

病患に窶れた人々を如何に美はしく描いてゐるか。源氏は、喪服を着て美を增し、罪を惱んで一層美を加へ(花散里の巻)病んでゐます〳〵美はしかつた(須磨の巻)藤壺も懷胎のため窶れて、常より美はしく(若紫の巻)紫の上も祖母を失つて、悲しんで一層可憐に見えた(若紫の巻)源氏の戀人、空蟬はついに源氏をすてゝ、夫と共に、任地に下る。源氏は思ひ亂れた心で、やつと書を認めて空蟬に送る。その書の「御手も、うちわなゝかるゝに亂れ書き給へる、いとゞ美しげなり」と、亂筆の中にも美を認める點は、上述の悲哀美と相共鳴する點であらう。シェリーが、雲雀の歌の中で「美しき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠るとぞ知れ」と、詠んだのは必ずしも、悲哀の價値を述べたのではないが、この場合、思ひ合はされる句である。さらに、「悲哀の背後には、常に悲哀がある。快樂と違つて、苦惱は、何等の假面をも冠つてゐない」と、藝術における悲哀美を高調して論じたワイルドがある。かれの、ド・プロフアンダを見ると、「悲哀には、深刻强烈な現實性がある」とも、「藝術における眞とは、一事物それ自身の融和であり、文は、そのまゝ、思想の表現されたものであり、靈は肉の化身、又、肉は靈の化身でなければならぬ。この意味に、世に悲哀に優る眞實は無い」とも、書かれてある。かくて、ワイルドは、宗教を一藝術と見做し、キリストを大藝術家と推賞した。

こゝに、ワイルドの思想の當否を論ずる暇はない。しかし、紫式部にとつても、釋迦牟尼佛は、美の權化と考へられなかつたらうか。少くとも、源氏物語に描かれた佛、法、僧の諸相は、宗教を說くた

めてなく、美を深めるために取材されたものではなかつたらうか。「巻々に、佛の道の事を多くかけるも、その理をしらしめむとにはあらず、たゞそのすぢにつきての、あはれを見せたるものなり。もし此佛の道の道理をしらさむためならば、かならず、源氏の君の、老の世のおとろへのさまをもかき、終りをもかくべきわざなるに、此君の事は、衰へのさまをも、終りをもかゝず、たゞよき事のかぎりにてやみぬる、これをもて、盛者必衰などいふ理をしらせたるにはあらざることをしるべし」と、斷定を下したのは、本居宣長である。まことに、式部が多少でも説法の心を抱いてゐたなら、幻の巻の後に、源氏の出家後を描き、宗教説話位、挾むのが必然であつたらう。

否、かゝる宗教の美化的態度のみならず、進んで、わたくしは、式部の戀愛美論の口吻をも、聽き知るのである。これは、源氏が、わが子夕霧の美貌を見て、落葉の宮との戀を認めるといふ場面てあつて

かの事（註――夕霧と宮との關係）は、聞こしめしたれど、何かは聞き顔にもと覺いて、唯打ちまもり給へるに、いと目出度く清らに、此の頃こそ、ねびまさり給へる御盛りなめれ。さる樣の好事し給ふとも、人のもどくべき樣もし給はず、鬼神も罪許しつべく、鮮かに、物清げに、若う盛りに、匂ひを散らし給へり。物思ひ知らぬ若人の程に、はた、おはせず。片端なる所無う、ねび整のほり給へる、理ぞかし。女にて、などか賞でざらむ。鏡を見ても、などか傲らざらむと、我が子ながら

も思す。（夕霧の巻）

青春美、戀愛美が、道德宗教を乘りこえて、ぐんぐん映發せしめられてゐるではないか。若人の戀するのは、青春における特權であるといふ感じを與へられる。われ〳〵は、もつと端的な例を、柏木に對する讃美の語で證することが出來る。柏木とは、源氏の室、女三の宮と情を通じた、さきの薫の實父なのである。作者は、各人の口を借つて、柏木の巻、横笛の巻、鈴虫の巻に柏木の愛情を追憶せしめてゐるが、その一つには、「高きも下れるも、惜しみあたらしがらぬは無きも、うべ〳〵しき方はさるものにて、怪しう情を立てたる人にて、物し給ひければ、さしもあるまじき、公人、女房などの、年古めきたるどもさへ、戀ひ悲しび聞ゆる」（柏木の巻）とまであるが、われ〳〵は、「情あるものは戀をする」といふ結論をそこに見出だし得る。柏木の性格の大基模に理想的にされたもの、すなはち、主人公の光源氏に外あるまい。式部は、光源氏の性格に、大きい美を創造したのである。戀愛美を創造したのである。

――その人（末摘花――註）は、未だ、世にやおはすらむとばかり思し出づる折もあれど、尋ね給ふべき御志も急がでありふるに、年かはりぬ。四月許りに、花散里を思ひ出で聞え給ひて、忍びて對の上（紫の上――註）に御暇聞えて出で給ふ。日頃降りつる名殘の雨少し濺ぎてをかしき程に、月射し出でたり。昔の御歩行思し出でられて、艶なる程の夕月夜に、道の程、萬づの事思し出でて

おはするに、形も無く荒れたる家の木立茂く、森の様なるを過ぎ給ふ。大きなる松に藤の咲き掛りて月影に靡きたる、風につきてさと匂ふが懐しく、そこはかと無き薫りなり。橘に代りてをかしければ、さし出で給へるに、柳も痛うしだりて、築土も障らねば亂れ伏したり。見し心地する本立かなと思すは、早う此の宮なりけり。いと哀れにて押し止めさせ給ふ。（蓬生の巻）

醜女ではあるが、なほ、源氏が見すて得ないで、この末摘花を音訪れる心地も、さこそと描寫されてゐるではないか。

雨の打ち降りたる名殘の、いと物しめやかなる夕つ方、御前の若楓、柏木などの、青やかに繁り合ひたるが、何となく心地よげなる空を見出だし給ひて、和して又清しと誦じ給ひて、先づ此の姫君（玉鬘――註）の御様の、匂ひやかげさを、思し出でられて、例の忍びやかに渡り給へり。手習などして、打ち解け給へりけるを、起き上り給ひて、恥らひ給へる、顔の色合ひ、いとをかし。柔和なる氣配の、ふと昔（玉鬘の母夕顔のこと――註）思し出でらるゝにも忍び難くて、「見初め奉りしは、いとかうしも覺え給はずと思ひしを、怪しう只それかと思ひ紛へらるゝ折々こそあれ（云々）」とて、涙ぐみ給へり。（胡蝶の巻）

源氏が、玉鬘によつて、思ひ出の夕顔を忍び、玉鬘に對して、たゞならぬ愛着を深めて行く心持が、こゝにも巧みに描かれてゐるではないか。

（落葉の宮の――註）障子を押さへ給へるは、いと物はかなきためなれど、（夕霧は――註）引きも開けず。「かばかりのけじめをと、強ひて思さるらむこそあはれなれ」と打笑ひて、うたて心の儘なる様にもあらず。人の御有様の、懐しうあてに艶い給へること、さは言へど特に見ゆ。世と共に物を思ひ給ふけにや、瘠せ〳〵にあえかなる心地して、打ち解け給へる儘の御袖のあたりもなよびかに、氣近うしみたる匂など、取り集めてらうたげに柔かなる心地し給へり。風いと心細う更けゆく夜の氣色、虫の音鹿の鳴く音も、瀧の音も一つに亂れて、艶なる程なれば、唯ありのあはつけ人だに、寢覺しぬべき空の氣色を、格子もさながら、入り方の月の山の端近き程、止めがたう物あはれなり。（夕霧の巻）

これは、わが子ながら源氏の嘆賞したかの夕霧に、漸く芽生え出た青春の惱みを寫したものである。一般に、全篇を通じて、女の心持を說きふせる男の態度が、いつも纖細微妙な筆致で描かれてゐるやうである。

（亡き父の喪に服せる宇治の中の君は――註）濃き鈍色の單衣に、萱草の袴の持てはやしたる、中々様變りて、花やかなりと見ゆるは、著なし給へる人柄なゝめり。帶はかなげにしなして、珠數引き隱して持給へり。いとそびやかに様體をかしげなる人の髪、袿に少し足らぬ程ならむと見えて、末迄塵の迷ひ無く、艶々とこちたう美しげなり。傍目などあならうたげに見えて、匂ひやかに柔かに、

おほどきたる氣配、女一宮もかう様にぞおはすべきと、仄見奉りしも思ひ較べられてうち歎かる。

又、ゐざり出でて、「かの障子はあらはにこそあれ」と、見おこせ給へる用意、打ち解けたらぬ様して、由あらむと覺ゆ。頭つき髪ざしの程、今少しあてになまめかしき様なり。（椎本の巻）

これは、薫が、中宮を隙間見した時の、中宮の描寫である。この時、中宮は匂宮に參ることに定まり、薫は大宮のみならず、中宮をもわがものとすることが出來ず、かゝる美しい姿を見るにも、いよ〳〵物思ひを慕らすばかりであつた。ともかく、「花やか」「はかなげ」「そびやか」「らうたげ」「匂ひやか」「柔か」「おほどき」「打ちとけたらぬ」「由あらむ」「あて」「なまめかしき」など、修飾語の用ひ方を見よ。薫は、たま〳〵宇治に出かけたある機會に、大宮の休んでゐる場所に近づいた。しかし、大宮の拒絶に對して、薫の理性は、その以上望みを遂げしめない。

秋の夜の氣配は、かゝらぬ所だに、自らあはれ多かるを、まして峯の嵐も離の蟲も、心細げにのみ聞きわたさる。常無き世の御物語に、時々さし答へ給へる様、いと見所多く目安し。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと氣色とりて皆入りぬ。宮、宣給ひし様など思し出づるに、實に長らへば、心の外にかくあるまじき事も、見るべき業こそはと、物のみ悲しうて、水の音に流れそふ心地し給ふ。はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて、聲作り、馬どもの嘶ゆるをも、旅の宿のあるやうなど、人の語る思しやられて、をかしう覺さる。光見えつる方の障子を押し開け給ひて、

空のあはれなるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出て給へるに、程もなき軒の近きなれば、荵の露もやう〳〵光り見えもて行く。互に、いと艶なる様形共を「何とはなくて、唯、斯様に月をも花をも、同じ心に弄び、はかなき世の有様を聞こえ合はせてなむ、過ぐさま欲しき」と、いと懐しき様して語らひ聞こえ給へば、漸々怖しさも慰みて、「斯ういとはしたなからで、物隔てゝなど聞こえば、誠に心の隔ては更にあるまじくらむ」と答へ給ふ。明くなりゆき、群鳥の立ちさまよふ羽風近う聞こゆ、夜深き朝の鐘の音、かすかに響く。（總角の巻）

何と、幽艶な表現ではないか。一夜中まんぢりともせず、戀人と向ひ合つてゐながら、嬉しい言葉一つ與へられず、そのまゝ靜かな朝を迎へた薫の、重い心がそのまゝ窺ひ得られるではないか。しかし、そこに戀愛美のある相が、漂渺としてゐることをも見逃すことは出來ない。

こゝに、再び、前説した式部の戀愛觀と女性觀とを想起して頂きたい。わたくしは、その場合、かの女の態度を、はなはだ、不徹底なるものゝやうに結論せざるを得なかつたことを、諸君も注意されたであらう。思へば、式部は、ついに思想の人でないのである。われ〳〵は、かの女の戀愛觀や女性觀において、わづかにかの女の傾向を知り得るに過ぎないのだ。

紫式部は、情趣的の性格を持つてゐた。かの女は、生活の意義を、人間の理性や意思の中より、む

しろ、より多く、感情の中に求めた。そこに、かの女が、宗教生活、倫理生活より、より藝術生活を送り得たことも肯定することが出來る。藝術生活、すなはち、宣長の縷述した「物のあはれ」を知る生活である。純情さのためには、「鬼神も罪許し」「虎、狼だにも泣き」「空の景色さへ見知り顔」なので、實に純一無垢な境地だと、式部は、語る。「物のあはれを知らぬことの惡しき」「物のあはれ、知り顔作りて、情見せむとすることの惡しき」「物のあはれを知り過ごすことの惡しき」云々の詳細に、亘つては、すべてこれを、宣長の所論（「玉のをぐし」二の巻）に讓つておくことに對し、諸君の御諒察を乞うておく。

要するに、かれ式部は、世界的小說作家であると共に、文學生活の上に一大體系を附與した文聖として、悠久に追慕さるべき大きい光である。燃えてつきない火群である。

西

行

西行、西行法師、この法名は、いかに懐かしい氣持を、いまのわたくしの心の中に傳へてくれることであらう。否、わたくしは、その感じを、わたくし一人と言ひ切りたくない。日本民族として血をうけついだ總ての心の中に、さうした共鳴を認めうる。共感を斷じうる。西行——この短かい音感に、古來、わが民族は、恰も、青白い月光によつて一様に色づけられる夜の萬象の如く、如何に同じ聯想と、同じ心象を抱いて來たことであらうか。それほど、西行の名は民衆的に滲透してゐる。普遍化されてゐるのである。

紫式部、その名は、まづ王朝時代の才媛として記憶づけられてゐ、兼好法師、その名は、やがて南北朝時代の旋毛曲りの隱遁者として印象づけられてゐる。芭蕉——この人名において、多くの諸君は、溫雅高德の一俳聖を、ただちに聯想するだらうと思ふ。しかるに西行の名において、われ〳〵は一自然歌人を想起すると共に、何げなく「西行さん」と呼んで見たい懷かしい人、出家姿の漂泊者を思ひ

描かないだらうか。曠野のたゞ中を、菅笠傾けてとぼ〳〵とゆく頼りなげな法師姿——それは、一般の人々が觀ずる西行の相ではあるまいか。

しかし、眞の西行はどんな人間であつたか。果して、かく民衆の心に幻影化された通りの法師であつたか。そこに疑問がある。わたくしは、本章において、西行が一道心となつて、死んでゆく迄、背負つていつた人間性、それを、出來るだけあらはに、捉へて見たいのである。

紫式部が、他界してから、約九十年の歳月を經した元永元年といふ年に、わが西行は、宮廷仕官の一武人の次男として生をこの世に享けて出た。(この生年は、台記や百練抄の說に基くものであるが、異說である他の吾妻鏡、撰集抄などの記す所は、史料の價値の上から信じ難い。)俗名は、佐藤義清。(憲清とも、則清とも)

さて台記(藤原頼長の日記)に、「家富年若心無欲」扶桑隱逸傳に、「最精弓馬」と、西行の少年時代を語つてゐる點から、最初に、問題どされてくるものは、當時の武人生活の實情である。まことに、西行の人生における第一歩は、寵兒としての武人といふことであり、一面、終生を貫いての性格の基調が武の點にあつたと言つて差支無いのである。

すでに、紫式部の棲んだ世界の環境を述べた所で言つて置いた通り、延喜、天暦い善政として仰がれた時代は、やがて藤原時代の滅亡を語る前驅であつたのである。頽癈の禍根は、とほく奈良朝にも逆上られるであらうが、その禍根が慈雨を吸つて將に地上に芽出す迄に至つたのは、平安朝中期の諸政の結果であつた。藤氏の權力を倒壞せしめた勢力に二方面ある。一は、地方における武人の勢力、他は、京洛附近の寺院の勢力。この二大勢力を紓暢せしめるに至つた藤原氏の政策上の禍根を摘發して見ると、およそつぎの諸項を掲げ得るであらう。

第一は、言ふ迄も無い點であるが、皇室に對し外戚權の陋使である。大鏡が、藤原氏の榮花を描いて、文德天皇から筆を起したので知られる樣に、藤原氏の政治上專制力の整備化されたのは、清和天皇御即位と共に、良房の攝政の職についたに始まる。徒らに幼帝擁立の策を弄して、下民に專政を强ふる獨斷政治である。見よ、清和天皇は九歲にて御即位、卅一歲御讓位。陽成天皇は九歲即位、十七歲御讓位。宇多天皇は廿一歲御即位、卅一歲御讓位。醍醐天皇は十三歲御即位。四十六歲御讓位。朱雀天皇は八歲御即位、廿四歲御讓位。村上天皇は廿一歲御即位、四十二歲御崩御。冷泉天皇は十八歲御即位、廿二歲御讓位。圓融天皇は十一歲御即位、廿六歲御讓位。花山天皇は十七歲御即位、十九歲御讓位。一條天皇は七歲御即位——といふ實情であつて、醍醐天皇と村上天皇の御在位の御寶算四十歲を御越し給うた如きその中に特例をなしてゐるのである。

枕草子を讀んだものは、かならず、十餘歲にまします一條天皇と定子中宮との御仲合を、美はしく見奉るであらうが、藤氏の專擅と、互に、女子を宮廷にいれて外戚的權威を慾にしようとする醜惡な心の人々を想見せずには居られまい。さうした秕政の果てには、後三條天皇の如き御英邁な君の出で給うて、改革の第一歩を御展きになるであらうとは、容易に豫見せられ得たことではないか。

第二は、藤原氏の排他的政策である。天智天皇を御輔翼申して、改新の效を遂げた鎌足の功跡には、よく後世その子孫をして廟堂に參與せしめるだけの遺德があつた點は疑ひない。さりとて、諸他の八百萬神の子孫たる神別、皇祖皇宗の子孫たる皇別の勢力を、そこに無視することは出來ない。同じく一氏族專擅の政を執るにしても、氏長たるものは、つねに他氏族の感情を阻害することなく抱擁するだけの寬才を必要とする。もちろん、最初こそ在原業平をして暗い運命について泣かしめ、菅原道眞を巧みに太宰權帥に貶し、源高明をして出家せしめる程度の悲劇に依て、私權を固め得たらうけれど、それは永久的のものではなかつた。藤原氏一族が、道眞の怨靈の祟りを感じて、北野神社を建立した心の裏には、すでに無暴な獨斷に對しての畏怖の念が高まつてゐたのである。

第三は、同氏族內の鬪爭、特にも官位の爭奪の醜態である。血族關係に依ておのれの地位を保持しようといふ小策を弄する北家系のものは、同じく藤氏といへ、南家、式家、京家のものは、これを疎外し、また同じく北家の中でも、氏の長者の位置を得たものは、異腹の兄弟を排し、とかく不遇な地

位の者はその從兄弟に反するといふ風で、その汚らはしい内訌は當時の記錄、いな大鏡、榮花物語などにさへ書きつくされてゐるとほりである。

第四に、最も重要な點は、京師中心の政策である。すなはち、地方政治輕視の方策である。その由來を求めるなら、奈良朝の施政の中にあるであらうが、無定見の唐制模倣の精神は、無内容の形式主義をのみ執らしめた。その當時の記錄、たとへば百練抄などにも、地方の施政狀態は、ほとんど覗ふことが出來ない。官記的のものでも、國守の交代の記錄以上に、その施政如何には及んでゐない。諸物語にも見えるやうに、種々な情實、贈賄等の結果、國守に任官され赴任すると、四ヶ年の任期間に能ふ限の誅求を慾にし、退官後と雖も、十ヶ年の生活費が優に殘されたといふ有樣である。こゝに脫稅についての巧妙な手段も講ぜられ、貧困を極めた民は流浪して盜賊を働く、さらに海賊となつて沿岸を荒すことは、仁明文德諸帝の昔より史上に見えてゐる。

これも藤氏の他氏排斥の結果であるが、特に源氏平氏等皇別で賜姓の子孫は、地方官として地方に下つたまゝ、歸京せず各地に蟠居してその勢力を布植した。かれらは、自然の要求として、武力を練磨した。とくに東北方面には、先住民族の子孫で性來好戰的な武技、射御に秀でたものがあつて、その甚大な影響を被つた。かくて紊亂に紊亂を重ねてゆく地方政治の中に、つゐに最後の勝利を獲得するものは、鬪爭に當つて實力を保有するかれらであつて、驅出しの受領ではなかつた。王朝末期、す

なはち後朱雀、後冷泉天皇の御代以後、如何に、諸々の事件が地方中心に醸し出されてゐるか。御堂關白の法成寺を創立する時、あなたでは地方の豪族竝びに無賴の徒の問題が蜂起して、すでに宥收し難い有樣に立ち至つてゐたのである。

こゝに特に、地方問題をして複雜化せしめたものは、莊園制度であつた。その起原は、奈良朝時代の賜田や功田といふがごとき免租地、乃至特殊開拓地の制度に由來するけれど、その弊の增大するに至つた點は、ひたすら經濟的壓迫による自然的結果と見るべきであらう。すなはち、開墾田の增加であつて、これらの中には豪族が部下を指揮して開かしめたものが多く、所有者は不輸租田として横暴を恣まゝにした。かくて、公田をも、巧みに私田に併合して稅を免れる徒も出て來り、國庫の收入はいよ〳〵減少するのみ。かつ、不輸租田すなはち莊園地の住民は、上に豪族乃至公家を戴くために、一般住民に對し專横を極めるといふ風であり、莊園地相互の間に鬪着の絶える暇はなかつた。

第五は、寺院の勢力興起である。これも由來を尋ねると、聖武天皇の佛敎御崇拜の時代に起原を求められるであらうが、われ〳〵は、最澄・空海兩大師の方策の中に、著しい點を認めうるのである。神寺田は、もとより免租地であつたが、宗敎上の勢力を利用して、最大な墾田を持つたのも社寺であつた。かつ、寺院がいよ〳〵宮廷の信仰を獲て、加持祈禱的の迷信界に關することもその業とするに及んで、その放縱さは地方の豪族にもすぎ、勢力も、相匹敵するものがあつた。實に、藤原末期から戰

國時代に及ぶわが歴史は、公武の兩勢力以外に、寺院の勢力を度外視して說き難い程になつてゐる。すなはち、東大寺領の伊賀國員辨莊の莊界につき國使が檢察に出かけた時、莊民が國使を射落し、馬鞍を奪つたといふ如き些事は昔の夢で、無賴の徒は招かれるまゝに僧兵となつて惡事を働らき、嗷訴、濫行をなして宸襟を痛ましめるに及んだのである。

かくて、武備の必要は、漸く公家の間にも論ぜられるに及んだ。しかし、一度柔弱な間に身を沈めた公卿殿上人の輩が、どうして勇ましく兵馬倥偬の界に身を提し得よう。六衞府の名はあるが、その官人は鳴弦こそすれ、强敵に立ち向ふ膽力を有さなかつた。頭(とう)の中將と官は呼ばるれど、藏人頭が本職で、近衞中將の方は名譽丈の兼官にすぎない。大江山の鬼を平げたといふ源賴光の武譚、高麗の賊を激退せしめた鎭西武士の勇名を聞くだに、身を慄はしたかれらである。

道長の薨去した翌年平忠常が謀叛を企てた時の如き、檢非違使が討伐に出かけたけれど、眞に討伐の效を奏したのは、當時甲斐守の源賴信（賴光の弟）であつた。かくて天喜四五年の交、陸奥の安倍賴時、安倍貞任の反亂を企てた際も、朝廷は、源賴義（賴信の子）をして追討せしめるより外なかつた。かくて賴義が、陸奥守としての任を果し、康平七年凱旋した際、いかに驚異と讃嘆の目を以て公家がかれを迎へたかは、想像するに餘りがある。

その後、延久元年における大和の山賊致親の追捕、承曆三年の美濃の亂の討平、永保元年の園城寺凶徒の捕縛、寛治元年の淸原武衡の討伐、寛治七年の出羽の賊平諸妙の處罰、康和三年對馬守源義親の鎭西を刼掠したに對しての征討、天仁二年の、源義明父子が近江において叛逆した折の追討等、何れとして、源平兩氏の武將の手によらないのはなかつた。源氏では、義家、爲義の英傑あり、平家にも正盛、忠盛等があつて、檢非違使の官は、專らこれら武將の當る所となつたのである。藤原一門の者が百官諸司の役についた昔日の俤は既になく、堀河天皇御卽位と共に、白河上皇の、院中において なほ、御在位の時に變らず御親政なるに及び、藤氏專擅の政も一蹴されてしまつた。宮中に、瀧口の武士のあつた如く、院中には北面の武士が設けられた。武術は、いよ〳〵時代に必須のものとなり、藤氏の末胤の中にも、射御の術を極める者さへ漸う出て來つた。ことにも、京師の中に群盜が橫行し、あるは皇居に放火し（康平二年）あるは奪略を恣にする（永久二年）時世相において、武衞の兵の袖手傍觀が許されようぞ。また、度重なる僧徒の嗷訴——興福寺、熊野寺、延曆寺等——に對しても、京師の地は武裝を要求したのである。

顧れば、道長が法成寺の工を起してから、わづか、數十年の年月を經(へ)たのみ。甘夢をのみ貪るかれに、この僅かな年月の間にこの變化衰頽の來ようなどと、どうして豫想され得たであらうか。頂上に登る時間は長く要するであらうが、下りゆく時間は短かい。波動を構成し、リズムを作つて世相は

移動するといふけれど、その言に違誤はない。さうして、わが西行は、かゝる轉向時代の渦中において、生の第一歩を踏み出さなければならなかつたのであつた。そこに、まづ、かれが經した數奇の運命の第一歩がある。

西行、すなはち佐藤義清の家系は、藤原氏の出であつた。尊卑分脈によるに、鎌足から十六世の子孫になつてゐるが、義清の九世の先祖は、かの有名な俵藤太秀郷である。秀郷の父、村雄はもと〳〵下野權大掾で東國武士の間に武を練つた者であつたが、秀郷も下野掾押領使に命ぜられたほど、武將としての聞えが高かつた。かれが、平貞盛と共に平將門を誅しえたこと、近江において百足退治の傳說を殘したのも故あることとて、その子孫は、藤原氏ながらも衞府の官人として任官して來た。義清の曾祖父から佐藤氏を名乘つたのであるが、祖父の季清、父の康清、共に衞門大夫であり、兄の仲清は內舍人で攝政の隨身であつた。上述のやうに、武勇の重視せられる時代において、佐藤一門の幸運は想ひやることが出來る。藤原賴長が、佐藤氏を「家富」と言つた消息も自ら諒解されるであらう。一般に、武家は富有でありえたやうである。かつ、傳記は不詳であるが、義清の母は、監物源清經女だといふ事であるから、母系からも武人の血をうけてゐることが知られる。父康清が、武人の女を娶つた事實に徵しても、義清が如何なる環境の中に養育されたかゞ想像されるであらう。「年若心無欲」と、賴

長の記したことも、一々當然だと肯かれる。かれの理想は、祖先の秀郷の武や、源の賴光の勇であつたであらう。

義清の六歳の年の七月（保安四年）の事である。延曆寺の僧兵が、例の日吉の神輿を奉じて大擧入京し、平忠盛を訴へて來た。當時京師における武將の花形は、この忠盛と源爲義とであつた。しかし、忠盛には隱岐の流人源義親を討伐する外、功名もあつたけれど、かれは寧ろ才幹に長けた人物で、巧みに白河法皇及び鳥羽天皇の寵を一身に集めてゐた。かうした點から、僧徒の嗷訴問題も惹起したのではあつたが、かれは爲義と力を併せて、これを卻け得たのである。六歳の義清の眼にも、かゝる京洛の騷擾が何等かの意味を以て映じ出されたであらう。かゝる寺院は寺院相互に鬪爭をつゞけ、延曆寺の僧徒の如き再度も、園城寺に攻め入つてこれを燒き拂つてゐる。興福寺と、延曆寺は言ふ迄もなく、反目を繰更してゐた。

かゝる間に、平忠盛は巧みに立廻り、大治四年三月（義清十二歳の年）及び保延元年四月（義清十八歳）の兩度において、山陽南海西海の海賊を追捕して功名を立て、長承元年三月（義清十三歳）には、卅三間堂を鳥羽上皇のために創建し奉つて居る。白河法皇の御信任を如何に博したかは、かれが法皇護衞の任を命ぜられ法皇の寵姫祇園女御を賜はつた一事で推斷することが出來る。ともかく、かれ忠盛は、刑部卿に昇進し、遂に武家の出で昇殿をも許される榮達を見たので、源爲義の到底、進ん

て角逐し得る相手ではなかつた。

少年の義清の心にも、忠盛は色々の意味をもつて寫つたに相違ない。殊にも義清は、下北面の一武士として鳥羽院に仕候しうる身となつたのだから。撰集抄に、この時代のかれを、「人に萬優れて露ばかりも思ひおとされじと思ひ侍りしかば、九夏三伏の暑きにも汗をのごひて、ひねもすに庭中にかしこまるを事とし云々」と記してゐるが、生眞面目なかれは、當時いかにもその通りだつたらうと思ふ。眞實さと熱意――この二つは、武士的精神の基調をなしてゐたのである。(撰集抄は假託の書である)

十訓抄の第八、可堪忍于諸事の中にまた、つぎの樣な逸話が加へられてある。

西行法師、男なりける時、かなしうしけるむすめの、三つ四つ計りなりけるが、重くわづらひて、限りなりける比、院の北面の者ども、弓射て遊びあへりけるに、いざなはれて、心ならずのゝしりくらしけるに、郎等男の走り來て、耳に物をさゝやきければ、心しらぬ人は、何とも思ひいれず。西住法師未だ男にて、源次兵衛尉とてありけるに、目を見合はせて「此の事こそ既に」と打ちいひて、人にも知らせず、さりげなくて、聊かの氣色もかはらでゐたりし、ありがたき心なりとぞ、西住後に人に語りける。

十訓抄中の記事もそのまゝ信ぜられないことは、殘念な事であるが、わたくしは、廿歳前後の義清の性格の中に、かうした一面をはつきり認めるのである。上皇は、もう四十歳を越してゐた平忠盛の敏

才と武勇とを賞美された。同時に、まだ廿歳になるかならない佐藤義清を、特に寵愛された。これは、法勝寺八講などに上皇が護衛として義清を召し行かれたといふ如き傳說の外に、西行が上皇に奉つてゐる歌などで實證されうると思ふ。かれが、ありたけの熱心を籠めて、今や射術の練技中である、そこに召使の者が來て、愛子の重患の報知を耳に呟く。しかし義清は、「さりげなくて、聊かの氣色もかはらで」衆中に、射術をつゞけた。いふ迄もなく、胸中は不安の念に燃えたぎつてゐたに相違ない。しかし、かれの強い意志はよくこれを抑へ込んで顏色にすら現はさない――そこに己が子の戰死するのを見て、頻笑む武士の精神と共鳴するものがある。その場合、自抑の心なく、「そりや大變だ」と、いそ〳〵召使と共に病兒の家に歸つてゆく者あれば、それは惰に脆い人間である。恰も法顯三藏の如き大德者さへ、印度に渡つた時、故國を思つて泣いたといふ話のやうに、さうした情の弱々しさにもわれ〳〵は美はしさを認める。しかし秋霜の如き強志の中に、われ〳〵は美を感得されないだらうか。如何なるものにも、盲目となりそれを溺愛することの出來なかつたのが、義清の性格のやうである。かれは、歌道に熱中した、また自然に對する愛着もこれをすて得なかつた。しかし、かれは多くの新古今集的歌人の如く詩心に惑溺もしなかつたし、また、いかに月花の美を觀じたとてその官能美に沈潛はしなかつた。

わたくしは、こゝで一先づ黐て、當時の院中仙洞の模様を概見したい。

三代の天皇に亘り、四十餘年間院中に政を聽き給うた白河法皇の御崩御になつたのは、義清十二歳の時、すなはち大治四年七月の事に屬してゐる。時恰も、崇德天皇御在位中であつたが、御父君鳥羽上皇が、院政を繼がれることとなつた。藤原忠通は、同年關白となつてゐるが、政治上の權力においては、昔日の關白の俤すら現はし得無かつたことは説明を要しない。

そも〳〵院政の意義を考へるのに、その由來は後三條天皇の藤原氏の横暴を抑制するために、形式的に帝位を白河天皇に御讓りあつて、院中において自由に實力を御發揮なさらうとし給うたに始まる。いはゞ、舊來の攝政權の新たな形に推移しただけのものである。もつとも内裏の外に仙洞が獨立したゝめに、すべてが二重になるのは止むを得なかつた。詔勅に對して院宣あり、内の殿上に對し院の殿上あり、瀧口の武士に對し北面の武士があるといふ樣に。かつ、天下の大事はすべて院宣を以て處決されたので、宮廷は閑暇多く、わづかに改元、節會、叙任等行はれるのみに過ぎなかつた。特に鳥羽上皇の如き百般につき豪奢にわたらせ給うた院政にあつては、官人すら内裏に仕へるより院に奉公することを譽れとする傾きがあつた。義清は、かゝる時代北面の武士として仕官してゐたのである。鳥羽上皇は、まづ長承元年に新制十四樣を定められた。同三年に京師の條路を改修し給ひ、更に鳥羽殿修築の工事を起し給ひ、外に法勝寺、得長壽院等創建された寺院も少なくない。かつ、上皇は學問藝

術方面の御造詣も深かつた。天下は、兵燹四方におこり劍戟の衢に化しようする前兆の中に、上皇は、華美に院政をつづけ給はれた。かの堅く紙を張つた塗烏帽子や、錦の直垂など用ひられる樣になつたのもこの時代に由來するので、これには源有仁等の言を容れられた上皇の御好尚があつた譯である。（もちろん、武士が一般富有であつたにもよるが）上皇は、また、自ら催馬樂を歌ひ給ひ、笛を吹き給うた。御製和歌の勅撰集中に傳へられるもの八首

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日よませ給ひける

春霞たちかへるべき空ぞなき花の匂にこゝろとまりて（金葉集）

わづらはせ給うける時鳥羽殿にて時鳥の鳴きけるをきかせ給うてよませ給うける

常よりもむつまじきかな時鳥しでの山路のともと思へば（千載集）

五十の御賀過ぎて又のとしの春鳥羽殿の櫻のさかりに御前の花を御らんじてよませ給うける

心あらば匂を添へよ櫻ばな後の春をばたれか見るべき（同）

人に遣はしける

いかばかり嬉しからまし諸共にこひらるゝ身を苦しかりせば（新古今集）

鳥羽殿にて花のちりがたなるを御覽じて後三條内大臣に
給はせける

惜めども常ならぬ世の花なれば今のこのみを西に求めむ(同)

これら四五首の中にも、幾分か鳥羽殿における優雅な御暮らしが忍ばれ得ようと思ふ。結構莊大な鳥羽殿では、當時益〻燗んになつて來た歌合的の歌會も試みられたであらう。例の西行物語などにある鳥羽殿の障子の畫讃歌を奉つて功名を博し、上皇から名劍朝日丸をうけたなど、全然後人の僞傳であるけれど、それら詩歌管絃の逸遊の間に、歌才豐かな義清がしば〳〵召し出されたことだけは、疑ふことの出來ない事實であらう。

歌人としての西行——それは、ある場合西行のすべてを語る事も出來る。それほど、國文學史における西行の位置は高い、功績は著しい。後世の追慕を集め、當代の異彩だと賞讃されてゐる。まことに、かれの歌才は本質的の如く觀ぜられる。

こゝに、わたくしは、かれの父祖と、かれの周圍を考へて見よう。しかるに、歌人としての天賦者を、かれの一族中に見出だす史料の存しないのは、この場合いかにも遺憾である。紫式部の父は學者としての名を傳へ、兼好の兄も佛學に通達した人として名を殘してゐる。しかるに、義清の一族には、前にも後にも才學の人は無く、かれは恰も彗星の如く輝いてゐるのである。當代の歌壇が、衰微の時

期にあつたことは、義清の十歳の年（大治二年）撰進された金葉和歌集、廿七歳の年（天養元年）撰進された詞花和歌集が、八代集中でも、最も貧弱である點で概觀される。義清がその當時、特に師事したとか影響を被つた樣な歌人は、ひとりも無いのであつた。

ともかく、武人としての義清の生立ちの半面には、また歌人として多才で幸福な方向の存したこと、及びそれをかれ自身が意識してゐたであらう、といふ事を斷言するに憚からない。

かつ、かれには家に愛する妻子があつた。

しかも、上皇にかくも寵遇の深かつたこの一北面武士、佐藤義清は、年僅かに廿三歳にして、不意に出家したのであつた。青道心になつたのであつた。かれは、

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身をすてゝこそ身をも助けめ(玉葉集)

と、上皇に御暇を申し、妻子を家にすておいて、東山の知人の坊で出家得道したのであつた。

出家、出家、

迷ひを主じとする俗界の人にとつて、この義清の場合の如き出家程、如何やうにも勝手に解釋されるものはない。

「外見幸福に見える一青年の遁世、しかし身の幸福などゝいふ事が、血氣な當人にどうして會得され

得よう。かれは、たゞ若氣の至りて出家したまてだ。例へば、傳說通りに同族で氣のあつた友の憲康（憲保とも）が、頓死したゝめ、突然人生の無常を觀じて前後の考へもなく世を捨てたまてだ。後には、今更還俗も出來ず、さりとて山住みも出來ないで京洛の畔をうろつき周つてゐたのみである」と、かう評し去つて仕舞つても、そこに多少とも肯かれる點が無いでもない。

また、「かれの出家は、あらぬ戀愛の結果らしい。上皇の后に待賢門院といふ方があつたが、そこに出入した義清はそこの女房堀川と相思の中になつた。堀川は、才媛て堀川集にも

黑髮の別れを惜しみ蛬虫枕の下に亂れ鳴く哉

湧き返り岩間の水のいはゞやと思ふ心をいかで洩らさむ

よそふべき方も知られぬ戀なればいかにいひてか漏しそむべき

長からん心も知らず黑髮の亂れて今朝は物をこそ思へ

などゝいふ樣な妖婉な自作を遺してゐる女房であるが、妻子ある義清は自責の念の爲めその戀を遂げることが出來なかつた。熱情で、生一本のかれは、煩悶に煩悶を重ねた末出家したのである。結極、かれの捨身は、若い心の戀に由來したものにすぎない。『何事につけてか世をばいとふべき憂かりし人ぞ今日は嬉しき』といふのもその述懷である」。さう批判を下す人があるとしても、或はさうでもあつたかと同意されるであらう。

また、人あつて、「西行の出離遁世などしかく大きい問題ではない。見よ、御堂關白すら晩年入道となつて讀經に日を暮らしてゐたてはないか。晩かれ早かれ、當時の人が出家することは當然視されてゐた。叡山の如きは、市中より却て俗流紛々で、出家者は俗人以上に名利を爭奪し、享樂をなしえてゐる。歌人には、俊成定家に見るやうに、殊に出家する者が多かつた。撰集抄を見れば

妻子をふり捨てゝ面白き處々をも拜み、山々寺々をも修行し侍るは、中々に賴母しくぞ侍るべき、

もとより世になれば、望もなし、望なければ恨もなし云々

とある樣に、かれも極く氣輕い動機から出家したまてゞある。俗界と出家界とを雲泥の差ある別界視したのは、他の時代の事で、當時はさうでなかつた。」と、かう反說をあげるならば、その言葉にも多少の意味を認めざるを得まい。

さて、他に充分の史料を持たないわたくしはこの場合、ひたすらに、かれの歌集に賴つて、そこにかれの眞實意をうけとるより外に道を知らない。しかし、さりとて、わたくしは必ずしも悲觀しないのである。たゞに記錄的な史料の端くれより、いかに、冊一文字のかれの歌が有意義であるかを思ふ。そこには、僞らうとしても僞り得ない作者の本然の相そのまゝが浮び上つてゐるではないか。

淡い灰色の霧に取りかこまれたやうな憂鬱、頭の中に重い鉛を詰めこめられたやうな壓迫——さう

した居たたまれない周圍から、多少でも、煩悶者を救つてくれる道にどんな世界があるであらうか。積極的でなく、消極的にでも逃れ去るにどんな世界があるであらうか。すなはち、

第一　氣分陶醉
第二　官能陶醉
第三　捨身遁世
第四　欣求淨土

これらが、その主要な方向だとわたくしには思はれる。この四方面は、各個人の氣質に基いて、各々が獨立する場合もあるし、錯綜する場合もあらう。いふ迄もなく、第一第二は藝術、古典（古書研究や、有職故實趣味等）自然、戀愛等に陶醉を求めてゆく者、第三第四は宗教へ逃避する人々を指したものである。さうして、われ〳〵は、それら全部を彩る世紀末的氣分をそこに感得せしめられる。

こゝで平安朝末期の大體の色調もその例に洩れてゐないと言ひたいのである。しかしわたくしは、たゞちにわが義清をこの公式に當てはむべきか、否かを速斷したくない。それまでに、もつとわたくしは豫備的材料を吟味すべき務めがあるから。

第一は、氣分陶醉を求めて、現世苦を忘却の淵に潜めようとする人々、それは炳として、この時代

から顯著になつたことが知られる。それが貴族階級において著しいことは言ふ迄もないことであるが、遊戯氣分、尙古氣分、唯美氣分等を、その特色としてあげることが出來る。

亂世における遊戯耽溺――これを以て、公家を無暴とのみ嘲弄したくない。かうした事實は、すべて世紀末現象の一つであつて、それは、現世苦を餘り強く味はされた人の餘義ない逃げ場なのだ、貧乏人の自暴酒なのだ。公家階級の斷末魔における自棄的態度なのだ。京洛の地は屢〻山賊の横行する時代となつたのみか、ある盜賊は、宮中に放火迄した末世となつたのである。僧徒は嗷訴を繰更へすのみか、上皇をさへ呪詛しようする亂世なのである。如何に無神經な公家ありとするも、娯樂のために公事を假裝行列と化せしめ、晏如たり得るであらうか。かれらは、どこまでも己れの地位名譽に執着を持つ。しかし執着を抱けば抱く程、己れたちの階級の末路は近づいて來てゐるのである。かれらは、平忠盛の殿上したことを嫉み、平清盛を高平太など〻嘲笑してのみ居られなくなつてゐた。その間にも、かれらは、なほ年中行事をいよ〳〵遊戯化せしめ（辨内侍日記や增鏡參照）管絃や蹴鞠にのみ浮身を窶してゐた。（梁塵秘抄、實躬卿記參照）かうした遊戯は、公家が武家に對して盾突く最後の器なのだ。庶民が棧敷を造り、樹に登り、公家の遊戯に見惚れる時、公家は、わづかに空洞に向つたやうな心の惱みを忘却することが出來たのである。この傾向が鎌倉時代に及んでいよ〳〵濃厚になつたことは、史實の明らかに實證する處である。

次に、尙古氣分においても同樣である。それは、將に崩壞せようとする貴族文化に對する無量の愛着に原因する。かれらは、明日來らうとする世界と、遠い延喜天曆の治政とを比較して、徒に過去の幻影を描いて、それに住しようとする。當來の方角から己が眼を避けしめて、過去の夢の中に惑溺しようとする。そこには、整つた法令がある、美しい文學がある、優雅な日常生活がある、しかもそれらの幻覺は、容易にかれらの亂された心を奪つてくれる。有職學、古書研究、秘傳的和歌、題詠和歌等の諸現象は、それを證する確實な材料となつてゐる。

かの大江匡房の江家次第廿一卷は縉紳の取りて模階とする處であり、園槐記、春玉鈔の著者なる源有仁については、これまた前說した通りである。古書研究は、古歌解釋（現存中、もつとも古い隆源口傳）古語解釋（綺語抄、和歌童蒙抄）萬葉研究（藤原通俊、大江匡房、大江佐國、源國信等）歌學（俊賴口傳、奧儀抄、袋草子等）書目研究（和歌現在書目錄等）解題（萬葉集目錄、古今集目錄等）など、いろ〳〵の方向をとつて、その色彩が現はれてゐる。源氏物語さへ、すでに歌人に依つて研究的によまれてゐたことは、俊成の正治奏狀によつて認めることが出來る。すべてこれらの現象は當時において、勃然として熾んになつたところのものであつた。

和歌祕傳や歌學口授の傾向も、かの有職趣味に類してゐる。萬葉集時代の人麿赤人ならぬ延喜時代の歌人をさへ神聖視するに及ぶ、「一卷（かんまき）に千々の黃金（こがね）をこめたれば人こそなけれ聲は殘れり」とは、惠

慶法師の貫之集を讀へて詠んだものであるが、和歌に關する古人の辭は、金玉の響の如く後人を痲痺せしめた。解釋法、詠歌法の上に、自ら祕傳が作られて、その傳授を得ることに無上の誇りと、自足を感じたことも推察されよう。こゝに、歌學といふ如き詩歌に關する修辭學が生じ、一層かゝる趨勢を紓暢せしめて居る。

次に、唯美的氣分を歌の世界と自然愛の世界との二方面に分けて考へて見よう。

歌の生命とするところがわれ〳〵の直觀て得た所をそのまゝ表はした點にあること說明を要しない。しかし、それは氣分藝術的偏向を現はす時、著しい變體を示してくるのである。それは、一種耽美的唯美的傾向を現はすと共に非現實美の尊重を來らしめる。わが和歌史において、この色彩の最も豊かに示されたのは、いはずもがな、新古今集においてゞあるが、その前驅ともいふべきものを、早く金葉、詞花、千載諸集の時代に認めることが出來るのである。すべてが、外向的から內向的へ移つてゐる。藤原顯季が、自宅に源俊賴等を招いて人麿影供をなした如きは、他面においてよく當時の歌壇の特質を說明するものである。

一、歌合の流行――歌人を左右に分けて各自その詠歌を番（つが）ひ、その優劣を定める、それはそれ丈て遊戲と言つてよい。萬葉集時代、古今集時代にも未だ見ない事柄なのだ。それが年を追うて流行して來たが、心の隱れ家として歌人には恰好な界だつたのである。時に神社の社頭で行ひ（多氣宮歌合、

西宮歌合の如き）また、故人の作を合せて勝負を決せしめ（前十五番歌合）漢詩と歌とを合はせしめるなど（詩歌合せ）その方法にも様々ある。それが如何に流行したかは、群書類從の歌合部を見わたしただけで、誰にも納得されよう。

二、題詠、本歌取、釋教歌の流行――つぎに、この特色をあげることが出來る。題詠は、拾遺集、後拾遺集と順次に增加して來たけれど、いまだこの時代ほど甚だしくはなかつた。（なほ、定家の明月記參照）本歌取の詠歌心理も、題詠と相通ずる點がある。例へば、古今集中の歌「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」といふ一首を基として、その模倣でなくさりとて全然新奇な作でない特殊の世界を作り出して詠出する、「年つもる頭の雪は大空の光にあたる今日ぞうれしき」――これほ伊勢の詠んだものであるが、かやうに歌を仕立てるのは、ほとんど技巧といふ點に負うてゐる。釋教歌なども、ある意味で、句題和歌、結題和歌と言ひうるであらう。これらはそれ〳〵特色はあるにしても、詠歌を技巧化し遊戯化して、その氣分を弄んでゐる事實は誰にも爭はれない。

三、漢詩味の詠歌の增加――平安朝時代に文選、白氏文集、唐詩などの愛讀されたことは、今更、繰更すを要さぬが、愛玩の理由が、それらの美辭麗句であり、氣分の上にあつたことは首肯されることである。故に上述の句題和歌にせよ、詩歌合せにせよ、いよ〳〵和歌と漢詩とを接近せしめたが、その結果は、漢詩中の措辭を巧みに利用するとか、その遒勁味をとり入れてある氣分を醸出せしめる

かといふ極めて技巧的、氣分的のものたらしめた。それは一層、歌人をして歌の世界に沈潛することを要求する結果を生んだ。一例をとれば、白氏文集中の、「青黛畫眉々細長」云々を題材として

さりともとかくまゆずみの徒らに心細くも老にけるかな

と、上陽人の末路を詠む如きは、一種の詠史歌的のものであるが、そこにも頓呼法をしば〳〵用ひ、てにをはを省略し、名詞止の作を多く作るなど、漢詩味の浸潤を爭ふことは出來ない。

思ひきや雲井の月をよそに見て心の闇に惑ふべしとは――忠盛

ほとゝぎす心も空にあくがれて夜離れがちなる深山べの里――孝善

時しもあれ秋古里にさて見れば庭は野べともなりにけるかな――公任

これらには超現實的遊樂的世界の香味豐かである。「長恨歌の心を詠める」といふ樣な歌さへも詞花集に出てゐる。その他一般に詩會の行はれたことは、明月記などに載する所である。

四、纖巧な修辭の發達――古今集と新古今集、この二大歌集の比較において、すべての讀者の頭を最初にうつ所は、まづ、後者における纖巧な修辭の發達であらう。新古今集中作者の、一段と高く身を構へてこれ見よとばかり詠み出してゐるのを舞臺上の動きと見るなら、古今集中の歌は、遇然出會つて立ち話する程度のものである。金葉、詞花の撰進された時代は、まさに、新古今集の大成を見ようとする橋渡しの途中であつて、いまだ磨きを受けてはゐないが、あらゆる修辭の使用は、その間に見るこ

とが出來る。

風吹けば波の綾織る池水に糸引き添ふる岸の青柳――源雅兼

これは、艶麗な辭句を使用した一例である。

風をいたみ岩打つ波のおのれのみ碎けてものを思ふころかな――源重之

これは比喩の巧みな例とすべきか。

朝な〳〵鹿のしがらむ萩の枝の末葉の露のありがたの世や

これは四句まですべてが、五句の序をなしてゐる珍らしい詠み振である。

今日よりはたつ夏衣うすくともあつしとのみや思ひわたらむ――增基

かうした緣語と掛詞とで出來た全然技巧歌も少なくない。

忘られぬ人の中には忘れぬを待つらむ人の中に待つやは

これらは、委細な内容を巧妙に詠んだといふより、徒らに辭句を弄したものと評されても致し方はあるまい。

秋の夜の月に心のひまぞなき出づるを待つと入るを惜しむと

この下の句は、對句をなしてゐる一例である。

要するに、技巧が歌において重視されると、詠歌といふ事實は、抒情叙事といふ世界から、技藝といふ界に入つてくる。それは、遊樂、翫賞のためには幸福な傾向であらう。後冷泉天皇が、天喜四年に群臣に歌題を賜つて、歌を献ぜしめ中殿（清涼殿）で披講する例を開かれた中殿御會と稱するもの〻如き、堀河百首に始めを開いたといふ百首歌の題を豫め定めてこれを詠出し貴人に献上する如き、ある遊樂三昧を度外視して諒解出來ぬ當時特殊の現象だと思ふ。

文學愛と竝稱さるべきは自然に對する愛である。自然美は、官能的に享受さるべきを普通とするが、自然美の氣分化されたことも、この時代の大きい特色と見なすべきである。現實生活に對する倦怠者、競爭場裡における敗北者、また人生觀における運命論者に、どうして、綾織る自然の色彩、妙樂的自然の音色を、感覺的に感受する餘裕があらう。古今集に詠ぜられた自然が、萬葉集の自然に比して、はなはだ、主觀的であることは誰しも肯定することであるが、しかも、自然味は却て、萬葉集より遍滿的である。深く滲透してゐる。それは矛盾の樣で、決してさうで無い。見よ、後撰、拾遺の諸集の哀傷、戀、雜の歌などの材料が、如何に多く自然から取られてゐるか。しかも、その自然は全く無色であり、無音であつて、餘りに概念的のものである。金葉、詞花以後の諸集には、これらの集に比して、幾分感覺的自然が加味されて來たとはいへ、なほ、歌人が套習的態度をすて〻、ありのまゝに自然美を感受してゐるやうには思はれぬ。結極、自然の氣分化である。自然の與へてくれる慰安の享受

てある。恰も、文學の世界に陶醉を求めていつた樣に、かれらはまた自然の中に熟睡を貪つてしまつたのである。

第二、つぎに官能陶醉の傾向について蔑見を與へて見よう。精神的悶えを忘却するために、氣分や夢幻の世界を求めて滿足される人は、いまだ、その惱みの深からぬものが多い。苦痛が高潮して自暴自棄を生み出すと、强烈な官能的刺擊を求めて、身心をすべて耽溺して省なくなる。特に、近代文化の中には、さうした色彩がもつとも著しい。それは、むしろ病的といつてよい。酒、女、强烈な色彩——さうした官能的刺擊の中にのみ、やうやく自己の住居を求めて頽廢的生活を送る。

平安朝末期の史料からは、さうした社會相の存したことを明確に考證することは出來ない。デカダンスとなるには、なほ、現世の與へる惱みも淺かつたのであらう。また、信仰を持ちえたかれらの多數は、信の世界に逃避安住することも出來たのであらう。しかし、ただ、贅澤な生活、陋費の生活は、上述の官能的惑溺の一面であると見て差支へない。御堂關白逝いて、再び、かれに優る榮華を繰更えす清華はなかつた。しかし、莊園の亂脉は、いよ〳〵舊公家や地方豪族をして、贅澤三昧を恣にせしめた。平泉における藤原秀衡等の榮耀は、必ずしもその特例ではない。

第三に、宗教の救濟についてゞあるが、その前わたくしは、當時の宗教界の輪廓をもつと明確に述べておく必要があらう。それを基として、義淸の敏感な心に映じた一般的世相の問題に深く話を移し

て行かなければならない。

義淸の生れた一百年前の宗教狀態については、前章において、かなり詳しく述べておいた。さて鳥羽上皇の院政時代の宗教を、概括すれば、その延長であつて未だ改革の實はあげられてゐないといふ一點に歸するのであるが、なほ、多少史實を主として說明を加へておきたい點もある。

まづ當時の寺院の內情を、やゝ深く檢べて見ると、延曆寺は、創立の當初から京城皇居の鎭護保全の抱負を持續してゐる。しかるに、廣汎な寺田を私有し、僧兵を貯へ、隱然として大領主の觀を呈して、俗界に大勢力を有してゐることは、これ迄概說して來た點であつた。應和の頃、延曆寺の僧良源は、兵を遣して祇園寺を攻略し、高言して曰く、「季世澆薄なれば人々僧法を輕んず、故に兵力を藉らざれば佛法を護すべからず」と。かれ良源の徒が僧兵の始源だと言はれてゐる。學僧と相竝べて諸寺に衆徒(僧兵)を置いたことは、亂世に當つて止み難い事情だとはいへ、その辯疏は、結極曲論に終るべきである。叡山は、文字通り惡僧の集合所であり、有利な地位と富力とを以て、かれら衆徒は俗慾を滿足しえたのであつた。天台座主の地位さへ、名譽欲を滿たす目的と化してしまつた。かつて三善淸行も言つてゐる如く、天下の者半ばは僧侶となつた有樣で、俗界で意を得ない公家は出家して、法界における成功を望んだのである。これは山門に限らず、寺門においても南都においてもすべて一樣であつた。かつ、かれらは武家階級の社會化されると共に、その性來的の迷信を利用して、いよ〳〵

祈禱修法をもつて、かれら民意を籠絡してしまつた。

この時代に寺院の建立せられた數は、實に、數百に及んでゐる。しかも先きにも說いたやうに、白河法皇は、白河殿內に法勝寺阿彌陀堂を、鳥羽上皇は、鳥羽殿內に勝光明院安樂壽院を、後白河法皇は、御所法住寺內に蓮華王院、(六條殿の方には長講堂)を、建立されてゐるやうに、公家貴族は私邸を寺院にあてるものが、續々と增して來た。これには、經濟的理由をも伴つてはゐたが、やはり因果應報を畏れての結果と見てよい。遊戲に耽り、詩歌に遊び、古典趣味に醉つてゐても、それは永續的のものではない。かれらは、眼を覺まされると同時に、外に矢叫びの音、身に迫る不安の氣を感ぜずには居られなかつた。如何に、釋尊の妙經を讀誦するその口が善男を罵り、袈裟持つ手が善女を斬らうとも、佛德は佛德に變りない。かれらの最後の安住地は、宗敎界の中にあつた。

しかし、宗敎の眞實意が、長く放漫な生活を繰更して來た公家達に會得されよう筈がない。貴族の愁眉を手つ取り早く癒してくれるものは、寺を造り、佛像を彫り、經を書くことにあつた。しかも豐富な資財を投じて、一流の工人に目もあやな阿彌陀堂を建立し、卷木の料紙に金泥書きの經卷を作り上げる處に、前項で述べたある官能欲の滿足をもなしえたのである。その實例は幾らもあるであらう。

しかし、生命の宗敎を渴仰する者にとつては、かうした宗敎界に對し、己が怨嗟を發せずには居られなかつた。また自ら、比叡山や高野山にある身であるなら、天台や眞言の學的佛敎で生新な改革は

望まれないとしても、さらに單身山林深く分け入り、第二の發心を志さずには堪へられなかつた。この時代、さうした人がだん〳〵と增して來たのである。

なほ、これら名刹の中で、眞言宗の寺院だけは、幾分趣を異にしてゐた。すなはち遠くは、高野山の修禪の靈域から、近くは、本宗根本の道場と定められた東寺、宇多法皇益信の灌頂を受け給うて名ある仁和寺の諸寺である。もちろん、何れも如來自內證の秘密法門といふ宗旨の特色から、天台宗に劣らぬ加持祈禱を重んじ、蒼生の現世福利を立てたけれど、この宗派は一種貴族化して、叡山の如き俗化は、これを見なかつたのである。眞言僧には、東山や西山、乃至北山あたりに、なほよく時世の俗臭にしまずに、戒律を守りつゞけたものが多少とも居たのである。鎌倉時代の明惠上人の如き、やはりかうした人々の間にあつて、佛法再興の志を興したのでもあらう。いな、もつと手近い人をさすなら、淨土宗の開祖、源空上人の生誕は、西行十六歲の年に相當してゐるし、增譽、眞基、空觀坊、見佛、靜圓、寶日、永眼、貞範といふ如き高僧は、その時代と遠からぬ世に何れも第二の發心をかち得て互融無礙の境に入り得た人々であつたのである。

第四項として前揭した欣求淨土の望みを完うし得た人々こそ、これらの發心者であつた。この間の關係については、紫式部論でかなり詳說したから、省略するが、われ〳〵は、西行の遁世において、同じく、この道程を辿り得るのである。出家々々と口にしながら、容易にそれを遂げ得なかつた式部、

廿三歳の若齢にあつて突如として緇衣に依て身を包み得た西行、（しかも終生、法聖の名を得なかつた西行）――この對照に、われ〳〵は西行の西行たる面目を把握されはしないか。

世にあらじとおもひける比、東山にて、人々霞によせて思ひをのべけるに

空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つかな（山家集）

こゝには、出家前、世に反かうとした覺悟の芽生が覗ほれる。

おなじ心をよみける

世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせん（山家集）

果敢ない己が運命を泌み〳〵味はつてゐる。己が身心は空虛である。もし多少でも自己といふものがあれば、消極的厭世の氣持のみ。

世の中を思へばなべて散る花の我身をさてもいづちかはせむ（山家集）

世の中を夢と見る〳〵はかなくも尙ほ驚かぬわが心かな（山家集）

夢の世の中といふことを、概念として抱くことは出來よう。しかし、それを直觀して捨身することは西行にとつてもやはり容易ではなかつた。

諸共に我をも具して散りね花浮世をいとふ心ある身ぞ（異本山家集）

いつの世に長き眠りの夢さめて驚くことのあらむとすらむ（山家集）

これら、未だ斷然とした處置に出るほどのかれの決意を現はしてゐない。生ぬるい處が見える。

さらぬだに世のはかなさを思ふ身に鶺鴒きわたる明ぼのの空（異本山家集追而書加）

世の憂さに一方ならず浮かれゆく心さだめよ秋の夜の月（山家集）（續後撰集）

捨つとならば浮世をいとふしるしあらん我には曇れ秋の空の月（山家集）

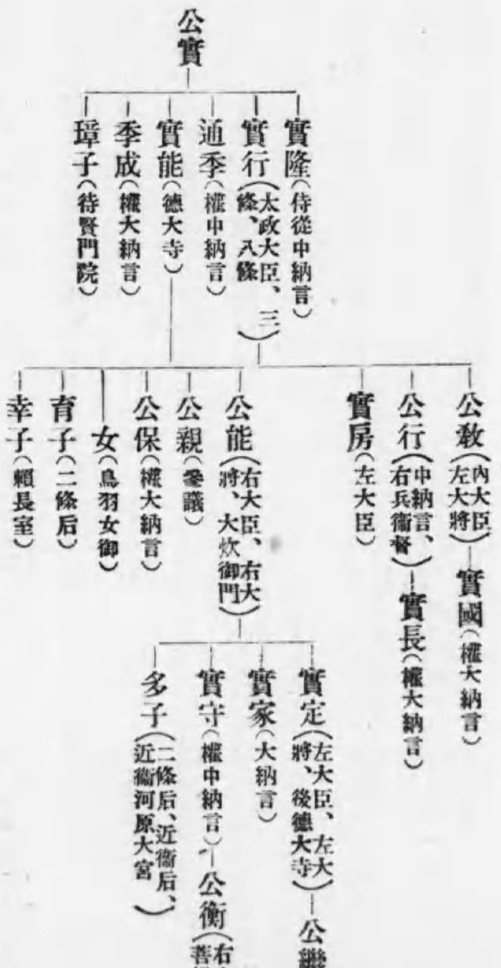
これらに、われ〳〵は、悶えに悶えを重ねて疲憊しきつたかれの聲をきいてゐるのではあるいまか。

しかし、かれの逡巡狐疑も、程なく、かれの英斷に依つて救助された。かれは、ほどなく捨身遁世の人であつた。たゞ、かれの圓頂が、そのまゝかれの心の平和、煩惱の解脱を意味しないことは、かれにとつて、餘りに痛ましいことなのであつた。

さて、かれの出家の誘因を知るに、つぎの一事項だけはあげるに憚からない。一言これを盡せば、西行の恩寵ふかい鳥羽上皇と、崇德天皇との御父子間の御暗闘である。

そも〳〵鳥羽上皇には、御寵愛を被つた數人の后や女御その他御内壁がましました。いまこれを表示すると

暗雲は、美福門院の御腹に、保延五年（西行廿二歳の年）體仁親王の御生誕があつてその年の八月その立太子式の行はれた時に起因する。重仁親王を後繼にと考へ居給うた崇德天皇の御悲嘆は想像するも餘りあるが、體仁親王の御卽位の問題は、一面、崇德天皇の御外戚である德大寺家の浮沈に係はるのであつた。しかるに、西行は、崇德天皇の御知遇をも忝うして、德大寺一家の人々とは特に昵近の關係である。西行の痛心は、思ふにもあまりあつた。翌保延六年（西行出家の年）には、趨勢、いよ〳〵危機に、迫つて來た。今、德大寺家及び周圍の系圖をあげて見ると



德大寺と呼ぶは、公實の五男實能からのことで、かれが、京都衣笠山に德大寺を建立したに由來してゐる。見る如く、この一門は、近衛天皇（體仁親王）御天年にて御崩御のため、後白川天皇御卽位となり、再び外戚として權威を持つことは出來たが、ついに、かの鳥羽上皇、崇德上皇御二方間の宿憂は、保元の大亂を勃發せしめるに至つたのである。かうした不祥事は、いかに奚直な心を持つ西行に暗翳を投げたかは想像せられ得よう。ぢり〳〵とかれの心に根ざして來る憂鬱の一部には、確かにかうした環境の力を度外視することは出來ない。

さて、一法師となり終つてからの、わが西行の生活は如何に。かれの餘生は、建久元年二月、すなはち源頼朝が天下を統一して、鎌倉に幕府を開いた年、七十三歳の高齢で寂する迄、正に五十年間の出家生活であつた。

凡そ物の心を知りしよりこの方、四十年あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ることやゝ度々になりぬ

とは、方丈記の作者の感懐であるが、西行のこの五十年間もそれと同じく、時世の大過渡期に相當してゐたので、かゝる世に生を享けた西行の奇しき運命の程を察知せずには居られない。

百錬抄によれば、保延六年十月十五日とあるがその曉、わが西行はいよ〳〵出離の志を達し得た。西行といふ法名の外、かれを圓位（圓意とも）大寶房（大本房とも）などとも呼ぶ。近侍の下部が、主を思ふあまりに、西行と同時に出家したといふ傳へは確説である。その下部の法名を西住と（西往ともある）呼び、主の行脚に際して、影の如く伴れそひ、たえず伴侶となつて、四國、西國の方を巡路した。

柴の庵（いほ）とさくは賤しき名なれども世に頼母しき住居なりけり（山家集）

この歌は、家集の言葉書きによると、東山の阿彌陀房上人の庵で詠んだ由であるが、俗傳の如くそこで得道してそのまゝの歌を詠んだものかも知れない。餘り平懐にすぎてはゐるが、それも宿意を遂げ

た後に來た反動的靜穩さのためであらう。

鳥羽院に出家のいとま申すとてよめる

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身をすてゝこそ身をも助けめ（追而書加玉葉集）

世をのがれける折、ゆかりなりける人の許へ、いひおくりける

世の中をそむき果てぬといひおかん思ひしるべき人はなくとも（異本山家集）

侍從大納言成通のもとへ後の世の事おどろかし申したりける返り事に

驚かす君によりてぞ長き夜の久しき夢はさむべかりける（山家集）

返し

おどろかぬ心なりせば世の中を夢ぞと語る甲斐なからまし（山家集）

これら何れの作に就ても、われ〳〵は、あまりに落付切つた、いはゞ凡庸にすぎた西行の姿を感知せずには居られない。青道心の胸の中は、もつと波打つて居るべきではないか。決然として宿意を果し遂げ得た當座の心理としては――さうとも考へられないではない。しかし、これには當時における出家生活と俗人生活との間に、さしたる區別の存しなかつた一面をも考ふべきである。西行も出家すると直ちに、例の管笠と錫杖の行脚姿に變つた譯ではなかつた。その一年は、靜かに東山の一坊に暮ら

したのであつて、京から音訪れて來た友と共に述懷の歌をも詠じてゐる（異本山家集詞書による）

年くれしそのいとなみは忘られてあらぬさまなる急ぎをぞする（異本山家集）

昔おもふ庭に浮木をつみおきて見し世にも似ぬ年のくれかな（山家集）

何れも、緇衣をまとふ身となつた以後、生活の上に變動をうけて暫しそれを味つてゐる氣持である。そこに熱意がない。

世をのがれて東山に侍るころ白川の花盛に人さそひければ

まかり歸りけるに昔おもひ出て

散るを見て歸る心や櫻花昔にかはるしるしなるらん（異本山家集）

閑ならんとおもひ侍けるころ花見に人々詣で來りければ

花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎にぞありける（道而加書）

これらの諸作、或ひは永治元年のものかとも思はれる。

西行五十年の生活。廿三歳の青年僧侶が卅歳時代、四十歳時代、五十歳時代と年經るにつれてその性格に推移展開のあつたことは、些の疑惑をも要しない。もし、西行研究者にとつて、その變化成長の跡が辿られるものなら、いかばかり喜こぶべきことであらう。しかるに遺憾ながら、家集以外に何物をも遺してくれなかつた西行に對して、こゝに何等の手がゝりも無い。しかも家集中の歌の配列に

は、年序的の傾向はすこしも發見されない。のみならず、流布本の家集卽ち六家集本山家集は、澤山の誤謬を傳へてゐるのであつて、その一千數百首のものにも更に吟味を加へる必要さへある。

しかも、確實な西行の歌の、歌としての價値は、永久に不變であらう。それは、人間西行そのまゝの聲である、眞情の訴へである、否、西行そのものである。われ〳〵は、たとへその作全部について、それが如何なる時、如何なる場合に詠出されたかを知り得ないかも知れぬ。廿歳時代の作と、七十歳時代の作とを一纒めにして觀賞してゐるかもしれない。戰亂の最中に詠んだ歌と、世の靜平の時に詠んだ歌とを同じ目で見てゐるかも知れない。しかしあらゆる環境を切り捨てたつて介はないのだ。佳いものは何處までも佳い、たゞそれだけなのだ。

しかし、こゝに、物語（散文）によつて我を表象した紫式部と卅一文字の短歌（韻文）によつて自己を表現した西行との比較は、人としての兩文學者の傾向を、明確に指示してくれてゐるではないか。その間に、評價の高下を限定することは不可能である。われ〳〵は、兩者の間に只、素質の方向別だけをのみ認める。次にわたくしの列擧してゆく西行の特質はこれを、式部のそれと對比することにより、諸君はいよ〳〵、散文型の文學者と詩人型の文學者との間の大きい徑庭を認めてくるであらう。

第一、意志と苦行の人、西行について先づ考へて見たい、わたくしは、本章の前篇で、西行の性格

の重要特色として武士的精神をあげておいた。もし、西行にして遁世後、一乞食坊主として京洛の巷に歌を口荒んで終つたのみであつたら、われ〳〵はかれに依て果して何物を與へられ得たらう。しかしかれは、決して一能因法師として終つた人間でなかつた。況んや、一業平(なりひら)で終るべき人でもなかつた。かれの出家は、或は、世にありふれた形を以て仕遂げられたかも知れない。かれの出家後二三年の生活は、最小生活の試練、孤獨生活の苦練の程度で終つたかも知れない。しかし、かれはさうした消極的試練の中にのみに安住し得る人間では無かつたのである。

圓位法師が詠ませける百首の歌の中に旅の歌とて詠める

岩ねふみ峰の椎柴折りしきて雪に宿かる夕暮の空

この歌は、千載集羈旅の部に見える寂蓮法師の作である。西行の知己寂蓮が、西行の苦行の様をこの中に詠み込んだものである。

人間の五濁盛り熾つて天變地妖竝び起るといふ時、人は却つて易行道につく。世を擧つて一機一緣の小事を事とし、ひたすら後世の安樂のみ願ふ。他力本願の觀念は、いよ〳〵民心に迎合される。かうした間に、歌人西行の自力的意志を見得ることは、意外のこととすべきではあるまいか。西行は、まづ進んで熊野詣や大峰入の難行を選んだのであつた。

待ちきつる屋上(やがみ)の櫻咲きにけり荒くおろすな三栖(みす)の山風(異本山家集)

と、かれは道々吟行しつゝ、まづ那智に辿りついた。

散らで待てと都の花を思はまし春歸るべき我身なりせば(山家集)

とは、詞書通りに那智觀音堂に花咲く春を籠りながら京の知人に送つた詠である。那智神社の奥に入ると一の瀧、二の瀧、三の瀧の三大瀑布がある。一の瀧の上、花山法皇御庵趾といふのは、かつて法皇が庵をこゝに結ばれて「木の下を住家とすれば自(オ)ら花見る人になりぬべき哉」とも歌を殘された處で、西行は、法皇の數奇な御運命とその櫻木を見て

木のもとに住みけん跡を見つるかな那智の高ねの花を尋ねて(追而加書)

とも古を忍び申した。わたくしは、これらの詠吟に漸く高調してゆく西行の心を思ひ知るのである。

身に積もる言葉の罪も洗はれて心澄みけり三重(かさね)の瀧(追而加書)

など〳〵三の瀧を見た時、三業の罪を瀧ぐといふ如き觀念歌も口吟された。同じ時に、また

雲消ゆる那智の高根の月たけて光をぬける瀧の白糸(追而加書)

熊野にはかくて、後年幾度も修業詣てをしたことは、夏、かれが熊野に詣てたことを載せてゐる著聞集や、「夏熊野へ參りけるに云々」などの家集の詞書でも推測出來る。

松が根の岩田の岸の夕涼み君があれなと思ほゆるかな(異本山家集)

等、自詠も殘つてゐる。

大峰入の冒險も、古今著聞集等に從へば再度までこれを試みたやうてある。實に大和から紀伊に連る深山幽谷を跋渉することは文字通り冒險てあつて常人の到底なし能はぬ修業てある。そも〳〵岩木の間に起臥して難行を積むは役小角を開祖とする修驗道の執る所て、僧、聖寶大峰を拓くに及び、修驗者のこゝに入り來る者が多かつた。始めもつぱら眞言修驗ては吉野金峰山から入山したのてあるが、後、天台修驗の興されると共に、熊野から入山する一派をも生じた。さて、西行も、最初は熊野入山の道をとつたのてあつた。

立昇る月のあたりに雲消えて光り重ぬる七越の峰（山家集）

七越の峰は熊野本宮附近の峠てあつて、そこから吉野に出る迄の路程にあたつてゐる古屋、千種が岳、東屋岳、轉法輪山、小池、神仙、行者歸り、稚兒淵、笙の岩屋、伯母が峰、小笹、蟻の門渡等の名、山家集中に散見する所てある。

月すめば谷こそ雲は沈むめれ嶺ふき拂ふ風に敷かれて（山家集）

深き山に住みける月を見ざりせば思ひ出もなきわが身ならまし（異本山家集）

折しも十月て、神仙宿の月の眺めは、殊更かれの心を捕へた。大峰入中の遺詠は、ほとんど幽谷中の月を詠じたものと言つていゝが、かゝる境地における月の印象は特に深いものがあつたらしい。行者歸りといふ地名は、稚兒を伴つた行者の別け入る途中、稚兒の命絶えたためにむなしく行者獨り引返

したといふ逸話に因るのださうて、その邊りの險岨さも思ひ知られよう。

屏風にや心を立てゝ思ひけん行者は歸り稚兒は止まりぬ（追而加書）

と、西行は詠嘆してゐるが、その歌中の屏風といふも屏風立と云ふ難所を指したものてある。また、行尊が千日籠の願を立てながら、「草の庵など露けしと思ひけん洩らぬ岩屋も袖はぬれけり」と苦行を訴へてゐる笙の岩屋も、その北方に當つてゐる。

著聞集によれば、西行の峰入は宗南坊行宗の案内によつたものて、西行は、宿意を行宗の結緣て果し得たのてあつた。しかるに行宗は、西行を修驗道の行法通り嚴格に責めたゝめに、さすがの西行も艱苦の程を泣いて訴へた所、行宗に悟される所あつてその苦行を耐へ忍び、一度ならず再度も大峰入を決行したとある。西行の性向の上から、わたくしは、その逸傳を實話として信じたいのてある。

その他、西行の行脚した大きい旅といへば、東國に一度、四國に一度、奥州に一度と三度を數へることが出來るが、何れとして忍苦の精神の籠つてゐないものはない。かれは、悔恨に泣きつゝひたすらに己が弱さを鞭打つた。靜かな庵中の暮しの方がいかばかり安易てあつたかは、いふまてもない。しかしかれの強い自己凝視は、自己の妥協的態度を見捨ておかなかつたのだ。

さてもこは如何はすべき世の中にあるにもあらずなきにしもなし（山家集）

かく、かれは遁世そのものゝ意義に疑惑を持つた。

現をも現とさらに思はねば夢をも夢と何か思はむ（山家集）

何といふ暗瞻とした生そのものの自覺であらう。しかも

捨てゝ後は紛れし方は覺えぬを心のみをば世にあらせける（山家集）

かく、現實の蠱惑はかれを強く押し捉へてしまつたのだ。

棄せて尙ほ山深く分け入らむ憂き事聞かぬ所ありやと（異本山家集）

かうした孤獨欲が、一層の深山より、又遠い旅にかれを誘ひ出して行く。現代と異なる古への旅、しかも行脚の旅が如何に、心身共に惱ましいものであるかは、現代の者の想像を許さぬ所であらう。

鈴鹿山浮世をよそに振捨てゝ如何になりゆくわが身なるらむ（異本山家集）

不安、苦痛、煩悶、しかもかれは、強い力にひきずられながら、なほ山を越え海を渉るのだつた。

嵐吹く峰の木の葉に誘はれて何ぢ浮かるゝ心なるらむ（異本山家集）

かれは旅から旅へと幻遊する自己を傍觀しながら、かく旅中から都の大納言成通へかき贈つてゐる。

波近き磯の松の根枕にてうら悲しきは今宵のみかは（山家集）

雪ふれば野路も山路も埋もれて遠近知らぬ旅の空かな（山家集）

都にて月を哀れと思ひしは數より外のすさびなりけり（異本山家集）

これらの懊惱は未だ幾分詠嘆の程度である。しかもなほ、

安藝のさる浦にとまりし時

渡の音を心にかけて明かすかな苫洩る月の影を友にて（異本山家集）

二見の浦にて月のさはやかなりけるに

思ひきや二見の浦の月を見て明け暮れ袖に浪かけんとは（追而加書）

駿河國、久能の山寺にて月を見てよみける

涙のみかきくらさるゝ旅なれや、さやかに見よと月はすめども（山家集）

旅にまかりけるに、入相を聞きて

思へたゞ暮れぬと聞きし鐘の音は都にてだに悲しきものを（山家集）

旅の心を

旅ねする嶺の嵐に傳ひきてあはれなりける鐘の音かな（山家集）

かくも、悲しき月影にぬれ、哀れな鐘聲をも耳にしなければならなかつたのであつた。

さて西行の旅中における逸話の樣々は、多くの書に散見してゐる。しかし何れも眞僞の疑はしいものである。その中、最も妙味深い物語は、天龍渡の事と、賴朝接見の事との二つだらうと思ふ。後者は、東鑑に明記された話でまづ疑を挾む餘地がないが、前者の物語をもわたくしは實說として認めたい。西行寂滅後八十餘年、かの阿佛尼が鎌倉に下つた日記（十六夜日記）にも「廿三日天龍渡といふ。

舟に乘るに西行の昔も思ひ出てられいと心細し」と記してゐるのは、必ずこの逸話を指したに相違無いからである。まづこの方から話してゆくことにしよう。

西行はこの東國旅行にも例によつて西住を伴としてゐた。恰も、二人が渡舟で河を渡らうとする時、遲れて來た一武士が坐席のないため西行を下船せしめて自ら乘らうとしたが、渡しの習ひ、西行はこれに對し知らぬ風を裝つてゐた。と、その武士は、寄り來つて、船から西行を引きおろしたのみか、散々理不順にも毆りかゝつて來た。しかも西行は打たれるまゝに、これを忍從してゐた。その樣を見た西住、主人が未だ北面の武士として無双の勇あつたことを思ひつゝも、泣き沈むより外はない。しかるに、弟子の悲嘆を振返り見た西行は、これを慰めようとしないのみか、その女々しさを叱つた上に、「今更、昔のことをかれこれ言つても仕方がないではないか。そんな弱氣のお前との同伴を俺は御免被る」と言つて、西住をそのまゝ、京に追ひ返したといふ——逸話の筋は大略これまでである。

無暴な亂打に對して唇を嚙みしめて耐へ忍んでゐる一法師の姿、主の侮辱を己が恥と考へて怨みに泣く弟子の姿——しかも、主を思うて憂ひ悲しむ弟子の心を、却て女々しいと言つて我武者らに都に追返してしまふ西行の一徹の心持、何といふ緊張した場面であらう。主に叱咤されてすご〳〵と心なくも歸り行く西住の後姿——それはやがて、西行の心に、悔恨に近いある閃めきを點じて來たかもしれない。また茫々たる野路を伴侶なしにゆくわが姿に、かれは潮のよせくるやうな寂寥を抱いたかも

しれない。しかし西行は、打擲をうけた傷の痛みを覺えながら、西住の不心得を戒め得た自我の强さについて、ある滿足の情をも斷ち得なかつたであらう。

行脚、かう誰しも一口にいふ。しかし、西行と芭蕉とを比較しても、その行脚は全然別樣のものであつたことが知られる。芭蕉の旅は、一には俳心修行の要求もあつたが、他に蕉風弘布の目的があつた。弟子の家から弟子の家へと辿りゆきつゝ、かれらの暖かい親昵の中に到る所、所謂風流の日々を過ごしえたのだ。天龍と程遠からぬ富士川畔で捨子を見た時も袂から食ひ物投げて、「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」と呟きつゝ過ぎ去るかれなのであつた。しかるに、富士を仰いだ西行は、

風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひかな（山家集）

と、苦行の中にさへなほ薄志な自己をかへりみて詠嘆する痛ましさを持つてゐた。

東國修行の時ある山寺に暫らく侍りて

山高み岩ねを占むる柴の戸に暫しもさらば世を逃ればや（追而加書）

と、旅途にさへなほ人無き山を求めてやまないかれなのであつた。

第二の逸話は、東鑑の文治二年の項目に見えてゐる。時、西行はすでに六十九歳の高齡であつたが、東大寺再建勸進（この寺は治承四年平中將重衡の兵のため一炬の煙となり終つた）のため奥州にある同族藤原秀衡の喜捨を受ける依囑をうけ、東路を下つたのであつた。小夜の中山を越えながら

年たけて復た越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（異本山家集）

と、再び、海道を下りゆく數奇なる運命を詠んだ。かれが、頼朝の引接を受けたのは、八月十五日の夜のことで、時しも義仲、義經の叛逆も水泡に歸せしめ得た頼朝の心には、光耀と滿足の情が溢れて居た。東鑑によれば、頼朝の接見は弓馬の道と歌道とに關しての疑問からであつた。「西行申云、弓馬事者、在俗之當初、慥雖傳家風、保延三年八月遁世之時、秀郷朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失、依爲罪業因、其事會以不殘留心底皆忘却了。詠哥者、對花月動感之折節、僅作卅一字許也、全不知奥旨。然者是彼無所欲報申云々。然而恩問不等閑之間於弓馬事者具以申之、卽令俊兼記置其詞給、綜被專終夜云々。」と、その夜の狀況が、書中に明らかに傳へられてゐる、西行は結極、大頼朝を前に置いて、武道の講義を速記者づきで述べた譯である。六十九歳の世捨法師、勸進のために關東に下つたこの一行脚者の口から武道の講義が出るとは、何と意外なシーンであらう。西行が、頼朝から銀作りの猫を貰つて門前の遊嬰兒に投げてやつたといふ逸話は、その翌日午時に、かれが頼朝の館を辭した折の事である。この話は、聽く者をして餘りに無理解な頼朝の態度を思はせないでもない。いかにそれが名工の珍品であらうと、行脚者の一法師に銀製の猫が何にならう。しかし一歩退いて考へるに、終夜弓馬の道を談じたといふその西行の態度そのものが、既に予盾として考へられるではないか。西行研究家は、これまで西行その者を餘りに聖淨視し、幻想化して來てゐるのではあるまいか——わ

たくしは、茲においてこの疑惑を一層深くするものである。頼朝の眼中には、當時、しば〳〵關東に下つて來た公家の遁世的歌人としてのみの西行がある。一夜快諾した紀念にもと贈つたのが、この名工の手になる銀猫ではなかつたらうか。かゝる器物に、西行の好尚のないことは言はずもがなであつた。かれが門前の子供に與へたことも、それ迄のことで、たゞ武家仲間に珍話としてそれが喧傳された迄の事であつたらう。

武人西行——西行の名に冠するわたくしのこの言葉は、こゝに、いよ〳〵根據のあるものとして首肯せられるではないか。先きに紫式部を論ずるや、わたくしは、縷々と貴族的生活と貴族的精神を說明しなければならなかつた。今や、潛勢的武人の勢力は、地上に延び出たのである。その間約一百年、何といふ時代の變轉であらう。さうして、人としての式部は、王朝時代を環境としてのみ存在しうる、人としての西行は源平時代を背景としてのみ成長しうる——こゝに、環境が人に及ぼす大きい示唆がある。しかし、一時代の相は、それ自身孤立するものでなく、前時代を下積みとしてのみ形成される。時代の人も、所詮、前時代の人と次の時代の人とを繫ぐ一連鎖にすぎない。われ〳〵は、西行の中にも、いかに多くの式部を見出し得るであらう。

第二に、わたくしは人間同志間の愛憎の情における、西行の心境を考へて見なければならない。

西行遁世の原因、それは、史料の出て來ない限り永久に不明であり、西行研究者にとつて大きい謎てなければならぬ。しかし、わたくしは、こゝにその主因を、愛欲の惱の中にあつたとしたい。それはこの場合、餘りな獨斷に過ぎて居るであらうか。つぎに、わたくしの試みる巨細な闡明に、暫らく諸君の耳を借して戴きたい。西行と德大寺との一家との關係については前述しておいた。山家集の中において、西行と和歌の贈答などに依り、昵近してゐたらしく思はれる人々の名を掲げて見ると、勝命、宮の法印（覺性法親王）西忍、淨蓮とは主として法の上の交はりであり、俊忠、俊成、定家、家隆、俊惠、慈圓、靜忍、家成、（中御門覺雅）などとは、主として歌道の上の交はりであり、侍從大納言成通、藤原爲忠、大原三寂（寂念、寂然、寂超）とはやゝ私交深く、その他に、德大寺一族及びその女房達の名を見ることが出來る。

こゝに時世の推移を概說するに、崇德天皇の不本意ながらも、美福門院出の近衞天皇に御讓位なつたのは永治元年春のことであつた。上皇の御母君待賢門院はその翌年剃髮し給うたが、更にその翌々年（久安元年、西行二十八歲）御崩御になつた。當時、朝廷では關白忠通と氏長者左大臣賴長とが兄弟ながら反目を續けてゐた。久壽二年（西行卅八歲の年）近衞天皇が實算僅かに十七歲で御崩御。御弟後白河天皇御卽位の事は、いよ〳〵崇德上皇の御憤懣を增さしめ、翌保元元年鳥羽法皇御崩御と共に、上皇は賴長を計らひ御謀叛をおこし給ふたのである。結果は、誰も知る如く、賴長の死去、上皇の讃

岐御遷御に依て落着はしたが、賴長の舅であり、待賢門院の兄なる德大寺實能はをめ〳〵その結果辭官をもせなかつたのみか、却て賴長の後を襲うて左大臣に昇官したのである。しかし程もなく德大寺一族には不祥事が續出した。翌保元二年の實能及びその室薨去、實行（實能の兄）太政大臣辭職、永曆元年（西行四十三歲の年）の公敎（實行の子）の薨去、上西門院（待賢門院の腹）の御出家、その翌應保元年の右大臣公能（實能の子）の薨去、應保二年の實行の薨去、――次々におこる悲報を、西行は、高野や京にあつて耳に入れなければならなかつた。特にも、長寬二年（西行四十七歲の年）、御愛願を忝うした崇德上皇が讃岐の土と化し給うたことを聞いた時、西行には如何ばかり感慨に堪へないものがあつたであらう。

亡き人を數ふる秋の夜もすがらしほるゝ袖や鳥部野の露（異本山家集）

かくて仁安二年（西行五十歲の年）こそ、高平太とかつて仇名された平淸盛が、太政大臣の榮職についた時で、藤氏の威力は、既にその形骸をも止めかねた哀れな狀況となつてゐた。當時、德大寺家には、公能の子に實定、實家、實守、公衡の四人があつたが漸く納言の職に齷齪してゐる有樣で、更に昔日の俤すら求め難い。硬骨な西行にとつて、舊主なる實定が淸盛の頤使に甘んじて官位に戀々としてゐるそのことが、如何に不面目なものとして感ぜられたかは言ふ迄もない。西行が、實定の父公能に、出家の程を勸めた心持も全くこの心から出たものである。

西行と實定兄弟との關係に就ては古今著聞集（宿執第二十三――卷十五）に詳しい。西行が、實定の、わが家の屋根に、鳶を止まらせぬため繩を張つてゐたのを見てから、實定の邸に出入することを止めたことは、徒然草にも引用されてある。舊主を疎んじた眞因が、そんな些細な理由のみでなくして、前述の如き實定の態度に對する不服にあつたことは勿論であらう。なほ、西行は、實定の次弟實家については、その北の方の態度に慊らずして遂に實家をも尋ねてゆかなかつた。第三男家守は天死した。四男公衡は、縹（はなだ）のしろうらの狩衣を着、織物の指貫ふみくゝんで庭の櫻に見惚れるといふ優人であつたゝめ、西行ひそかにかれを德大寺の眞の後繼者と慕つて常々尋ねてゐたが、藏人頭を成經や宗賴ふぜいの者に越されながら、恥ぢて出家する樣子もなく、官位に執着を斷たなかつたため、狷介にも、またかれは公衡と交はりを絶つた――以上は、著聞集に記す所の西行逸說の梗概である。

世を遁れ身をすてたれども、心は猶ほ昔に變らず、だて〳〵しかりけるなり

と、著聞集の作者はその文の最後に西行の性行の上に頂門の一針をさしてゐる。思へば、五十餘歲の出家者として餘りな狹量さてゐる。餘りにも伊達々々しすぎてゐる。もつと宏量であるべきではあるまいか。しかし、六十九歲の老軀を以て弓馬の道を征夷大將軍源賴朝に講じたかれを想起すれば、この伊達氣も彼にとつてあながち不自然でもない。かれの卒直な氣質は、憎惡の心持を抑へておくことを許さなかつた。愛憎を直ちに行爲に現はす子供の樣に、ともすればそれがあらはに爆發した。

西行と文覺上人との面談については、撰集抄とか、（それから探つたらしい）井蛙抄・水蛙眼目などに見えるのみて、直ちにこれを信ずることは出來ないが、文覺上人が最初西行の態度を憎んて、折あらば頭を打割つてくれるなど言つたことも、所詮、西行の奇骨が然らしめた所ではあるまいか。どこ迄も表裏のないかれの純直さが他人の罵りを買つたのではあるまいか。

強く他人を憎みうる人間、何處迄も憎惡に燃える人間――かゝる人々が半面において、如何ばかり熱い抱愛に飢えてゐるかは、くだ〳〵しい說明を必要としない。神祕愛、絶對愛は別として、われわれ人間の經驗する愛情は、必ず憎惡の心を伴なつてゐることを知る。これは何といふ人生の悲しい矛盾であらう。

修行して遠くまかりける折、人の思ひ隔てたる樣なることの
侍りければ

よしさらば幾重ともなく山越えてやがても人に隔てられなん（山家集）

行脚から歸京して見ると、友人が自分を疎遠にするので、それ程ならいつそその事、再び立返つて深山に籠つてしまはうといふのが、この歌の內容である。何といふ反撥性の裸出だらう。

これも高野から京に出て來た時、覺堅阿闍梨が知らぬ樣をしてゐたために、菊の花につけて

汲みてなど心通はゞ訪はざらん出でたるものをきくの下水（山家集）

と、不滿を諷刺して言ひおくつた。

かくて、かれは庵に籠りながらも、如何ばかり友なつかしい心持に惱みつくしたことであつたらう。

淋しさに絶えたる人の又もあれな庵並べん冬の山里（異本山家集）

雪しのぐ庵の妻を差し添へて跡求めて來ん人を止めん（山家集）

哀れ知りて誰か分け來ん山里の雪降り埋む庭の夕暮（山家集）

訪へな君夕暮になる夜の雪を跡なきよりは哀れならまし（山家集）

何と、人間らしい眞情がすみ〳〵まで流露して居ることか。

しかし寂寥は、必ずしも庵の冬のみではなかつた。

君來ずば霞に今日も暮れなまし花待ちかぬる物語りせよ（山家集）

香を求めん人をこそ待て山里の垣ねの梅の散らぬ限りは（山家集）

諸共に影を並ぶる人もあれや月の洩りくる笹の庵に（山家集）

霜冴ゆる庭の木の葉を踏み分けて月は見るやと問ふ人もがな（異本山家集）

自ら言はぬをも訪ふ人やあると休らふ程に年の暮れぬる（追而加書）

この中、最後の歌は、友人に贈つたものとの詞書であるが、待つ友は尋ね來らず、年の暮の早くも訪れ來た悲しみ——西行の怨みもさこそと想像されるではないか。

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ（山家集）

己れを待つてくれる友を考へるかれは、また、友を待つてゐる悲しいかれ自身でなければならぬ。かくて寂寥に徹しつゝ、素直に赤裸にそれを咏出したところに、絶えしなく懷かしい西行の俤がある。

こゝには、崇德上皇並びに成通、寂然（大原三寂の一人）との關係を大略、贈答歌に依て覗つて見ることだけに止めよう。

西行は、これ迄も縷述したやうに待賢門院系統の方々に恩顧を被つてゐたけれど、また、近衞天皇や後白河天皇に對して、新院と區別申しあげることはなかつた。かれは、近衞天皇の御陵にも詣でゝ歌を詠んでをり、二條天皇の御跡をも訪うて居り、美福門院の御骨の高野に届いた時も弔歌を詠じてゐる。まして、鳥羽法皇が保元元年御崩御の節は、偶〻高野から京に上つてゐたのではあつたが、御葬申した安樂壽院に參り御通夜申しあげた程であつた。（山家集並に著聞集に悉し）

さて保元の戰亂の結果、崇德上皇は仁和寺に御渡りなつて、恰も北院の寛遍法務の坊に入り給うた時、西行は明るい月の夜、上皇の御許を尋ねて行つて涙にくれてゐる。

かゝる世に影も變らず澄む月を見るわが身さへ恨めしきかな（山家集）

しかし西行の力を以てしては、今更何とも致し樣もない。上皇は、歌道において殊に西行寂然たちの保護者であらせられた。

言の葉の情絶へにし折節にありあふ身こそ悲しかりけれ（山家集）

とは、上皇の讃岐御遷御のことをきいて、嘆きつゝ西行の寂然に贈つた歌である。

世の中をそむく便りや無からまし憂き折節に君が合はずは（山家集）

淺ましや如何なる故の報にてかゝる事しもある世なるらん（山家集）

永らへて遂に棲むべき都かは此の世はよしやとてもかくても（山家集）

幻の夢を現に見る人は目も合はせでや夜を明かすらん（山家集）

その日より落つる涙を形見にて思ひ忘るゝ時のまぞなき（山家集）

かく様々の機會に、西行は歌を以て上皇を御慰め申してゐる。また、上皇に仕へ申してゐる女房が如何に西行を便りにしてゐたかは、つぎの西行に贈つた歌で想像され得よう。

いとゞしく憂きにつけても頼むかな契りし道のしるべたがふな（追而加書）

かゝりける涙に沈む身のうさを君ならで又誰か浮べん（山家集）

かくて上皇は、長寛二年御寳算四十六で配所に御崩御なつたため、西行は永久に拜謁の機を逸して、その後四年（仁安三年冬）その御舊跡松山をわざ〳〵尋ねてゐる。

松山の波に流れて來し舟のやがて空しくなりにけるかな（異本山家集）

松山の波の景色は變らじを形無く君はなりましにけり（山家集）

よしや君昔の玉の床とても斯からん後は何にかはせん——白峰御陵に參りて（異本山家集）

侍從大納言藤原成通は、詩歌管絃蹴鞠の各道にかけての達人であつた外、風姿特に美であつて、他の善行を聞けば眼に涙するといふ高德者であつた。西行との交りは、かれの出家以前よりで、成通が西行の出家を耳にした時も

おどろかす君によりてぞ長き夜の久しき夢は醒むべかりける

と言ひ贈つてゐる。西行の返歌は次の樣であつた。

おどろかぬ心なりせば世の中を夢とぞ語る甲斐なからまし

その他兩人の關係を示すと

秋遠く修行し侍りける道より侍從大納言成通のもとへ申しおくり侍ける

嵐吹く峰の木の葉に誘はれて何地うかるゝ心なるらん（異本山家集）

かへし

何となく落つる木の葉も吹く風に散り行く方は知られやはせぬ（異本山家集）

侍從大納言入道はかなくなりて宵曉につとめする僧各々歸りける日、申しおくりける

行き散らん今日の別を思ふにも更に歎きは添ふ心地する（山家集）

かへし

臥し沈む身には心のあらばこそ更に歎きも添ふ心地せめ（山家集）

たぐひなき昔の人のかたみには君をのみこそ頼みましけれ（山家集）

かく西行は、遁世しても、決して孤寥の人ではなかつた。

所謂大原三寂は、皇太后宮大進藤原爲忠の三子、爲業（寂念）頼業（寂然）爲隆（寂超）が、出家して大原に籠居したのを指すので、三子の母は、待賢門院の一女房であつた。かうした關係から、また、歌友として、西行は三寂に睦み大原にも往來し、ことに中の寂然を親しくした。崇德上皇の御還御のため歌道の衰へたことを、相共に嘆いたことは上述したが、寂然も上皇を御慕ひ申して讃岐を訪れてゐる。

寂然はまた高野に西行を尋ねたこともあつた。その時西行の作、

なれ來にし都もうとくなりはてゝ悲しさ添ふる秋の暮れかな（異本山家集）

寂然高野に詣で立歸りて大原より遣はしける

隔てこしその年月もあるものを名殘多かる嶺の朝霧（山家集）

かへし

したはれし名殘をこそはながめつれ立ち歸りにし嶺の朝霧（山家集）

寂然紅葉の盛りに高野に詣で出てにける又の年の花の折に申し遣はしける

紅葉見し高根の嶺の花ざかり頼めし人の待たるゝやなど（山家集）

かへし

共に見し嶺の紅葉のかひなれや花の折にも思ひ出でける（山家集）

その他西行が、高野から大原の生活を思つて送つた歌が十一首あり、兄寂念の儚なくなつた時送つた歌が五首ある外、なほ西住のみまかつた時換した贈答歌が兩人の間にある。兩人の親交の狀は、これらで充分見ることが出來よう。

訪へかしな情は人の身のためを憂き我とても心やはなき（山家集）

この歌には、詞書がないから、誰に贈つたものかは、知る限りでないが、「憂き我とても心やはなき」――その語の如く、捨身しても、西行は、到底人間的情愛を共に、失なふには堪へ得られなかつた。

西行と女性、これはまた、大きく興味深い問題である。けれど、現在迄の西行研究にては遺憾ながら思摩憶測以上に、これを出す方法が無い。あるひは恐ある御息所に、かれが戀し奉つたといひ（源平盛衰記、雨中物語、淨瑠璃十二段草紙等）あるひは待賢門院女房堀川局と關係を結んだといふ、何れも確說ではない。

待賢門院の女房には、この堀川局の他、中納言局、兵衛局（堀川局の妹）二位局（信西の室）帥の局などあつたが何れも西行と交はりがあつた。門院の御崩御と共に、堀川と中納言は尼となつて西山に棲み、兵衛局は上西門院（待賢門院の御腹）に再仕してゐる。

これらの女房の中、堀川局が最も才媛であつたらしいことは種々の方面から推斷出來る。堀川は神祇伯顯仲の女で、かつて齋院にも奉仕してゐたので前齋院六條とも呼ばれた女房である。

長からん心も知らず黑髮の亂れて今朝は物をこそ思へ

堀川の作として最も喧傳されてゐるこの詠に、いかにも多感なかの女の面影が忍ばれるではないか。

その他

黑髮の別れを惜しみきり〳〵す枕の下に亂れ鳴くかな

湧き返り岩間の水のいはゞやと思ふ心をいかで洩らさむ

よそふべき方も知られぬ戀なれば如何に言ひてか洩らしそむべき

等、堀川集中の遺詠で、これらによつて情熱的のかの女を想像することは謬まつてはゐまい。その堀川は、また源頼政とも交りのあつたことが知られる。

門院が久安元年八月に御崩御になつた後、かの女は一週忌の間、喪に服した。西行との間にその翌春歌の贈答がある。

尋ぬとも風のつてにも聞かじかし花と散りにし君が行衛を——西行（異本山家集）

吹く風の行衛知らする物ならば花と散るにも遲れざらまし——堀川局（異本山家集）

堀川局のめぐりには、たゞ悲しい運命のうめきがあるのみ。

また、かの局が仁和寺に住んでゐる頃、西行は尋ねることを約束しながら、ある月の夜も知らず顏に、寺の前を過ぎ行つたから、局はかう言ひ贈つた。

西へ行くしるべと頼む月影の空だのめこそ甲斐なかりけれ（山家集）

西行は、すなはち、返歌して

さし入らで雲間を分けし月影はまたぬ氣色（けしき）やそらに見えけん（追而加書）

その他、兩人の間にはつぎの樣な贈答もある。

此の世にて語らひおかん時鳥しての山路のしるべともなれ——堀川局（異本山家集）

ほとゝぎす鳴く〳〵こそは語らはめしての山路に君し隱らば——西行（異本山家集）

西行と兵衛局との贈答歌も二ヶ所に見えるけれど、何れも待賢門院御在世の昔を忍んで詠みかはしたものだけのものである。

これらの外、女性の名の山家集に出づるもの、院の少納言局、院の小侍從、三河内侍、二條院女房六角局等あるが、何れも西行との關係は、時にふれた歌の贈答だけのものに過ぎない。

山家集類題によれば、戀部に屬するもの、二百五十六首を數へることが出來る。なほ、雜部中にも戀歌が混じてゐるので、西行作の戀歌は、すべて〻三百首に餘るであらう。それには出家以前の作も多少見えるやうである。しかし、その中の戀歌百首（奥州下向の時、藤原秀衡の依囑で詠んだものと傳へらる）でも分るし、題詠的のものでも考へられるやうに、多くはたゞ戀歌として詠んだまでゞある。吉野を知らない歌人が、想像を以て吉野の櫻を詠出して詩の世界に適遊するやうに、戀を持たない遁世者や老人が戀歌を詠んで、その氣分に遊ぶといふ傾向は、千載集、新古今集時代に及んでいよ〳〵著しくなつた。さりながら、結極それは遊戯だけのもので、體驗の表出ではない。そこにどうして氣韻の躍動が求められ得よう、韻律の止揚を感得され得よう。後世の勅撰集の戀部が、無味乾燥なもので、型にはまり何等生命の香味を持つてゐないのは、すべてかうした理由に基いてゐる。

しかるに西行の戀歌（題詠的の物を除く）、それは何といふ生新な節奏と眞實の味に溢れてゐることであらう。そこには戯作らしい隙は寸分無い。それは張りつめた氣持そのまゝの投出である。血のにじみ出る樣な緊張さに充ちてゐる。しかし、今更わたくしはこの點を以て、出家後のかれが更に、異性に對する戀の經驗を持つたのかといふ樣な疑問を提出しようとするのではない。かれが、成道や寂然に對する熱い友情――それは思慕の點において立派に戀の心に變る所がない、異性に對すると同性に對すると、つまり、この點は同じてはないか。全くかれは、息の根の止まる迄愛欲の情を心の底か

ら捨て去ることが出來なかつたのである。かれにはいつでも他を戀し得る精力の持ち合はせがあつた。まして、出家前の戀愛の經驗が、かれの記憶の世界に、まざ〳〵と浮び上つて來るのだつた。かれはそしてつねにその追憶から解放され得なかつた。友愛の高調する際も勝手にそれがこの記憶の世界に結びついて、かれの戀歌、題詠的戀歌にも、それらの脈動がそのまゝに織込まれて來るのだつた。

ともすれば月すむ空にあくがるゝ心の果てを知るよしもがな（山家集）

數ならぬ心の咎になし果てじ知らせてこそは身をも恨みめ（異本山家集）

うち向ふその希望の面影を眞になして見るよしもがな（山家集）

何となくさすがに惜しき命かなあり經ば人や思ひしるとて（異本）

かきくらす涙の雨の足繁みさかりに物の嘆かしきかな（異本）

さはと言ひて衣返して打ち伏せど眼のあはばやは夢もみるべき（山家集）

よしさらば涙の池に身をよして心の儘に月を宿さん（異本）

さる程の契りは何にありながら行かぬ心の苦しきやなぞ（山家集）

花を見る心はよそに隔りて身につきたるは君がおもかげ（山家集）

一方に亂るともなき我戀や風定まらぬ野邊の苅萱（山家集）

知らざりき雲井のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは（異本）

戀する情は、前をと思ひ、後をと考へ、右に、左にと焦燥を重ねてゆくのみて、寸時の心の穩やかになる暇がない。

人は憂し嘆きは露も慰まずさはこは如何すべき思ぞ(異本)
會ふことの無くて止みぬるものならば今見よ世にもありやはつると(山家集)
日に添へて怨みはいとゞ大海の豐かなりける我涙かな(異本)
わりなしな袖に涙のみつまゝに命をのみといとふ心ぼ(山家集)
身を知れば人の咎とは思はぬに恨み顔にもぬるゝ袖かな(異本)
おのづからあり經ばとこそ思ひつれ頼みなくなるわが命かな(山家集)
哀れ〳〵此の世はよしやさもあらばあれ來む世もかくや苦しかるべき(異本)
我のみぞ我心をばいとほしむあはれむ人の無きにつけても(山家集)
それにしても、この失戀の惱みは何といふ痛ましさだらう。哀れ悲しき極みであらう。
待ちかねて獨りはふせどしきたえの枕並ぶるあらましぞする(山家集)
相見ては訪はれぬ憂さぞ忘れぬる嬉しきをのみ先づ思ふ間に(山家集)

後朝

今朝よりぞ人の心は辛からて明け離れゆく空を眺むる(追而加書)

かへるあしたの時雨

ことつげて今朝の別れはやすらはむ時雨をさへや袖にかくべき(異本)
會ふ迄の命もがなと思ひしは悔しかりける我が心かな(異本)
氣色をば怪めて人の咎むともうちまかせてはいはじとぞ思ふ(山家集)
さもこそは人目思はずなりはてめあな樣憎の袖の氣色や(山家集)
假寢の夢を厭ひし床の上の今朝いかばかり起きうかるらん(山家集)
君慕ふ心の内はちぢめきて涙脆にもなるわが身かな(山家集)
一度契りを結んだ後は、さても、また惱みの增しに增しゆくことよ。かれは更に詠ひつゞける。
いひ立てゝ怨みば如何に辛からん思へば憂しや人の心は(山家集)
更に又結ぼほれ行く心哉解けなばとこそ思ひしかども(山家集)
憂き身知る心にも似ぬ涙哉恨みむとしても思はぬものを(山家集)
我ればかり物思ふ人や又もあると唐までも尋ねてしがな(山家集)
物思へどかゝらぬ人もあるものを哀なりける身の契りかな(異本)
わが煩惱を傍觀するほどのおちつきを得ても、なほ全然煩惱から脫却し得ることは容易ではなかつた。
何とこは數まへられぬ身の程に人を恨むる心ありけん(山家集)

何せむにつれなかりしを恨みけん逢はずはかゝる思ひせましや（山家集）
會ふことを夢なりけりと思ひ分く心の今朝は恨めしきかな（山家集）
とにかくに厭はまほしき世なれども君が住むにも引かれぬるかな（異本山家集）
これも皆昔の事と言ひながらなど物思ふ契りなりけん（山家集）

この作の如きをも、單に空想の詠出とは、誰しも盲斷出來難いであらう。

廿三歳で斷然、俗界を離脱しようとした彼。さうして、二三年は京洛の地を去りかねて、西山や東山あたりの庵に起き臥してゐた彼。煩惱を解脱し得ぬ苦しみに修行の旅に出で立つたが京を忘れかねた彼――そのかれにしても、これらの作の如何に大膽な自己告白であるかを、一面わたくしは思ふ。さるにても、かくまでも己を告白せざるを得なかつたかれの眞面目さに思ひ至つて、更に新しい尊敬の情を感ぜざるを得ないではないか。

しかし、これらがわが西行のすべてゞないことは言ふ迄もない。かれはいつか高野の奥にも住みつき得るやうになつてゐた。さうして、不可思議な煩惱の海を、靜かに眺め味はふ餘裕を持つことが出來る人であつた。そこは、かの紫式部の素質として持つてゐた世界である。二人の文學者は、自照の地で互に握手する。融和して共に頰笑む。

第三、自然愛に於ける西行。 人間愛について、われ〳〵の愛を奪ふものは、自然美に對する愛着心であらう。大空の美しさ、起伏する丘陵の美しさ、蜿々と流れる長江の美はしさ、日の出の美はしさ、雲間ぬふ月の美はしさ、花の様々の姿したる美はしさ――思ひ盡さないのは、まことに自然の持つてゐる美の泉である。「あゝ美くしい――」かうわれ〳〵は幾度か讃美の叫びをあげてやまない。しかし、思ふに百人の者の中、幾人が眞に自然の美を體驗し得てゐるであらうか。同じ野邊に咲く一輪の花を見て賞美したとしても、色を主として愛するもの、形態を主として賞てるもの、趣を主として佳とするもの等、その主眼とする點に相違があるし、一幼兒の見る眼と詩人の觀る眼と宗教家の見る眼とは、それ〳〵異ることをも免れ得ない。

西行の自然愛、世にかれ程、自然を愛した詩人が、またとあるであらうか。かれは近代の畫家や彫刻家の様に色彩感や線感の鋭どさは持ち合はしてゐなかつた。しかしかれの熱愛は、形態を押し破つて中味に喰ひ入つてゐたのだ。自然の核心につつ込んで居たのだ。自然の形相は、月となり花となり、山となり河となつて千差萬別である。しかしその差別相を貫いた普遍的な美が、森羅萬象に含まれてゐる。西行の感じはそこを捕へてゐる。西行の歌には、月と花とを嘆美したものが最も多い、否、大分を占めてゐると言つてよい。しかもその月は月、花は花とのみあつてそれ以上でない。それを例へば、一生竹ばかり描いてゐる畫家のやうで、近代人の形相を欲求する眼には、いかにも物足らないか

も知れない。しかし、西行にとつては、櫻、梅、桃などゝ花樣々の變種を愛したのでもなければ、櫻の花瓣、蘂の形、枝の張り工合など各樣の形を愛したのでもなかつたのだ。かれはこの意味に色盲であつた。かれの欲求した所は、まづ「さくら」といふ言葉だつた。それから「さくらの咲き出す時節」といふことだつた。「櫻が咲きさうだ」といふことだつた。更に「櫻が咲き出た」といふことだつた。なほ、「櫻が散りかゝつた」といふ折の感じだつた。「もう散つてしまつた」といつて詠嘆するそのことだつた。すなはち肉眼に訴へる官能的櫻はどうてもよかつた。かれには、氣分が第一だつた。その氣分には、生命觀、宗教觀、藝術觀などが押集まつて來てある幽玄風雅な世界を拵へあげてゐた。西行はその氣分の海で、憧憬、三昧、悔恨の刹那々々を繰更えしつゝ游泳してゐた。

今更に春を忘るゝ花もあらじ思ひのどめて今日も暮さん(異本)

何と童心稚氣がそのまゝに表はされてゐる歌であらう。しかし西行にあつてはそれがそのまゝに許されてゐる。西行は、しば〳〵吉野に籠つた、それには「一筋に思ひ入りなん吉野山又あらばこそ人も誘はめ」といふ如き遁世の志からでもあつたが、「山人よ吉野の奥にしるべせよ花も尋ねん又思ひあり」て櫻花に對する止むに止まれぬ煩惱のためでもあつた。

何となく春になりぬと聞く日より心にかゝるみ吉野の里(異本)

吉野山雲をばかりに尋ね入りて心にかけし花を見るかな(異本)

吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき(異本)

吉野山花を長閑に見ましやは憂きが嬉しき我が身なりけり(山家集)

吉野山去年の枝の道かへて未だ見ぬ方の花や尋ねん(山家集)

これらの諸詠は、吉野における西行の生活を語るに充分であらう。かれが花に對する心持は、すてに賞美といふ如き對立的關係から遙かに離れてゐる。花は、愛人知己の暖かい胸と同じやうに、彷徨つてゐるかれの心の古里である。絶えしない漂泊の心の暫らくの安息所である。しかしそこは遂に一時の安息所たるにすぎない。すべては永久に流轉移動する、心の花はやがて散つてゆく。かれは、わが胸から遠ざかつてゆく戀人を追驅けるやうに、散りゆく花を半狂的な、露骨な執念を以て追ひかけるのである。

櫻咲く四方の山邊を兼ぬるまに長閑に花を見ぬ心地する(山家集)

花見ればそのいはれとは無けれども心の内ぞ苦しかりける(山家集)

何といふ偉大なる迷ひであらう。

あはれ我多くの春の花を見て染めおく心誰にゆづらむ(山家集)

思へ只花の無からむ木の下に何を蔭にて我が身すみなむ(異本)

春風の花を散らすと見る夢は醒めても胸の騷ぐなりけり(山家集)

覺束な春の心の花にのみ何れの年か浮かれ初めけむ（山家集）

何といふ執着さであらう。この心持は、年老いても、さらに變る所がなかつた。

年を經て待つも惜しむも山櫻花に心を盡すなりけり（追而加書）

花を待つ心こそ猶昔なれ春には疎くなりにしものを（山家集）

老苞に何をかせましこの春の花まちつけぬ我が身なりせば（異本）

月を詠んだ西行の歌は、花を詠んだものに優るとも劣りはしない。しかし春は一年に一度の契りである。月は秋こそよけれといふが、春の朧月、夏の涼月、またそれ〴〵の趣を持つてゐて、四時にその契が絶えない。かつ、月光の澄徹、光耀の美には、到底浮世のものとしも思ひ難い純淨味がある。

隈も無き月の光に誘はれて幾雲井迄行く心ぞも（異本）

影冴えて誠に月の明き夜は心も空に浮びてぞ住む（山家集）

行方なく月に心のすみ〴〵て果ては如何にかならんとすらん（異本）

わが身を離れて昇りたつ美を追ふ魂はこれを如何にともしようが無い。

うちつけに又來ん秋の今宵迄月故惜しくなる命かな（異本）

厭ふ世も月澄む秋になりぬれば長らへずばと思ふなるかな（異本）

來ん世にもかゝる月をし見るべくは命を惜しむ人なからまし（山家集）

かれの愛欲の情は、限なく燃え立つて、さらにその上に友情をも求めて、ゆくのであつた。

嬉しきは友にあふべき契ありて月に心の誘はれにけり

なほ、

願はくは花の本にて春死なむその二月の望月の頃

もうかうした強い執心に至つては、却て純乎として朗らかに燃える、人間本性に萠した炎としてのみすべてが輝き出る。

異性を戀ひ、友を慕うて止みない心。それと、花月を愛慕する心と、大觀すれば何れも愛欲の上に變りはない。自然は只、人のそれの如く意識を有たないため、意欲に伴なふ惱みが少ないことは考へ得られよう。しかし、西行の狂熱的態度に至つては、さらに、兩者の間に差別がない。しかも、情愛と自然愛との交錯してすゝむ心においてをやである。

西行は、散りゆく花、缺けゆく月に無限の愛着苦を感ずると共に、己が執心を反省して自責するといふ二重の苦惱を味はなければならなかつた。

花に染む心はいかで殘りけむ捨て果てゝさと思ふ我が身に（異本）

と、捨身の心に、執念くも染み來る花の相が、かれを惱ますと共に、月はまた同じ悶の種となる。

木の葉散れば月に心ぞあくがるゝ深山がくれに棲まんと思ふに（山家集）

さらぬだに浮かれて物を思ふ身に心を誘ふ秋の夜の月（山家集）

捨てゝ出でし浮世に月のすまであれなさらば心の止まざらまし（異本）

世の憂さに一方ならずうかれゆく心定めよ秋の夜の月（山家集）

しかし、煩惱卽菩提といふことが、かうした世界に觀ぜられないだらうか。歌の内容通り、自然の美は西行の生涯を通じて煩惱の種子だつたに相違ない。しかし、煩惱を抱いてその重さに蹣跚としてゐる彼、その彼の傍には菩提道が平行して走つてゐたのではあるまいか。

思ひ返す悟りや今日は無からまし花に染めおく色なかりせば（山家集）

月の色に心を清く染めましや都を出でぬ我が身なりせば（山家集）

これらの追憶の作は、必ずしも概念を竝べ立てたものではあるまいと思ふ。

「思ひ返す、悟りや今日は無からまし――」自然美に對する煩惱的愛執が、かれにとつてやがて卽菩提の道であつた、このプロセスは、再び、西行に紫式部を對比せしめる。わたくしは、取り立てゝ式部の自然觀を說かなかつたけれど、これは、式部の悶えの中に、自然美が大きい關係を持つて來ないからである。式部は自然を凝視した。しかし、自然美はかの女を蠱惑し得なかつた。式部の心は、つねに人の問題の上にのみ係はつてゐた。

しかるに、自然を切り離して西行を觀ることは出來ない。それは、當時の文人に通じた特色で、西行は、最もよく、かゝる時代の特色を表はし得たのであつた。

第四、藝術愛に於ける西行。 世に三大美がある、戀愛・自然・藝術。かうした觀じ方には、また捨てることの出來ない卓見さがある。わたくしは、これ迄前二者を中心としての西行の生活を說いて來た。西行の藝術愛、すなはち歌道に對する愛着、それは、前二者と立派に對立し得てゐるものである。

しかし、捨身修行の身にとつて、歌に執することの許されがたいことは、かれにも早く分つてゐた。それは、出家當座のことであつた。寂蓮から百首歌を詠むやうすゝめられた時、かれは、それを斷つてゐる。しかるに、かれは熊野詣の途中、不思議な夢を見た。それは夢の中に熊野の別當湛快が現はれて、荐りに俊成に、「何事も衰へゆけどこの道こそ世の末も變らぬ物はあれ云々」と、歌德を口說いて居る。西行はその夢から醒め出て、歌道の意義深いことを始めて悟り、一度斷念した百首歌を更に作り、奥に次の歌を添へて寂蓮に送つてやつた。それが山家集に出てゐる。

末の世に此の情のみ變らずと見し夢なくば他處にきかまし（追而加書）

この歌は一向映えないし夢斷判もやゝ滑稽に感ぜられるが、これにはなほ、當時の歌壇を窺つてみる必要がある。

當時の宗教界は、なるほど本質的方面の墮落はあつたといへ、何と言つても、なほそれは大きい勢力であつた。各流各派が分立してゐたゝめ、そこにローマの法王廳といふ工合に統裁力はなかつたが、すべて殆んど、朝政の干渉外に立ち得て、武力を擁し、一大學府であり、醫療から加持祈禱方面をも手に收めてゐたゝめ、政治・經濟・道德・藝術は、こと〳〵く宗教的色彩を加味してゐた。藝術は、その窺極において宗教と吻合するのとは異なつた意味で、當時の歌道が佛教のために方便視されたことも止み難い趨勢であつた。勅撰集にも釋教部がこゝに設けられて、法華經の語句などの飜案歌が麗々しく加へられ、雜部などにも何とか僧都といふやうな僧侶の無常歌が多く選入された。

しかし、短詩形の和歌は、他の文學と異なつて、さうした表現に不適であることはいふ迄も無い。大和物語系統の短話集、小說、戰記物語等が、盡く法話文學となつて行く間に、和歌のみ獨自の藝術境を開拓していつた。勿論和歌が可隣な抒情味を捨てゝいつたことは、まづ免れがたい。しかも佛教が、積極的愛の生活を稱導する基督教などゝ異なつて、信者をして不斷に、自然の默示に耳を傾かしめるやうに導いていつた。この自然たるや、渾々と湧き出る情緒の泉としてでなくて、宇宙の本體としてゞあつたのだ。その自然は官能の對象としての自然でなく、無常心の反映としての自然であつたのだ。されば自然は玲瓏として輝いてはゐたが、如何にも靜かで冷たい。歌人は、目や耳によつて色彩や音聲をそのまゝ感じようとしないで、これに對し心眼と心耳をのみ開いた。新興歌壇の中心者俊

成は、深夜燈火をかすかにして直衣烏帽子姿で桐火桶を抱いたまゝ句案に耽つた。さうしたかれの氣分の中から

又や見む交野のみ野の櫻狩花の雪散る春の曙

岩走る水の白玉數見えて清瀧川にすめる月影

夕されば野邊の秋風身に泌みて鶉鳴くなり深草の里

などゝ吉野や清瀧や深草の里の歌も詠出されたのである。かつこれらの名歌は、いかにも客觀的叙景歌の樣であるが、今少し內在律に耳を傾けるならば、そこに作爲の跡が歷然と浮び出てくるであらう。幽玄歌と稱されるものは、皆かうした巧妙を極めたモザイックなのである。しかし、そのモザイックが滅裂せずにムードを保ち得る所以は、前述の心眼心耳の基調をなしてゐる哀趣があるからである。無常觀があるからである。その趣、その觀は時に作爲の跡を消してしまふ迄にモザイックに浸潤してゐる。しかし、そこに個性的閃めきは乏しい。甲の歌と乙の歌の差別は、個性上の差別でなく、たゞ巧拙の別としてのみ考へ得られる。

西行はかうした人々の中にあつて歌を詠んだ。かれの交友としてあげた俊成・定家・家隆・俊惠・慈圓・靜忍・家成などは、ほとんど歌席においてのみの交はり丈けのやうに思はれる。さうして、人間美に對し自然美に對し人一倍の執念をすてゝなかつた西行は、歌道においてもその道に人數倍の溺愛を感じ

たのであつた。第二の愛人として自然を娶つた西行は、自作の歌を更に愛子の如く撫愛してゐた。

わが歌の勅撰和歌集に選入される光榮は、當時、歌人にとつて高位高官を與へられるにも增して名譽であつた。西行も撰集のある都度、それがためにわが心を時めかした。

しかしこゝに一つ不可解な點がある。天養元年六月に、崇德上皇の宣旨に基き第六勅撰集である詞花集が藤原顯輔によつて撰進された。時に西行はすでに廿七歳である（一說にこの集は仁平年間奏上されたともいふ、然れば西行は卅四五歳）かつ宣旨は上皇から出て居り、かた〳〵西行の作も撰入さるべきである。しかるに西行の歌が一首も採られてゐない。この集は一體にのみ偏しすぎたとの批難もあつたが、さりとて歌人西行の名が（撰集抄中の逸話の如く）高く擴がつてゐたのなら、一二首だけでも撰入されないといふ理由はあるまい。然るに、次集からは、千載に十八首、新古今に九十四首、新勅撰に十四首の割合に採擇されてゐる。こゝに、西行の傑作の大部分が三四十歳以後に詠まれたものとして推斷することは、早計であらうか。勿論、院に奉仕中すでに才幹を現はした歌は多かつたであらうが、結極それは、技巧に優れただけのものではなかつたのだらうか。例へば、「いつしかも春來にけりと津の國の難波の浦をかすみこめたり」の作などを、「難波わたりに年越に侍けるに春立つ心をよみける」といふ詞書を以て、直ちに方違ひと解し出家前の作と斷ずる如きあまりに危險ではあるまいか。

藤原俊成が次の勅撰集撰進につき院宣をうけたのは、壽永二年（西行六十六歳）で、その業の終つたのが文治三年（西行七十歳）、その間五星霜の月日がある。例の「鴫立澤」の西行の作についての採否の逸話は、この折の事で古今著聞集や今物語等に傳へられてゐる。千載集が大體出來上つたことを西行が耳にした時、西行は丁度奥羽への行脚の途中にあつた。かれは、その前、俊成から自家集を出す樣にと言はれて、「花ならぬ言の葉なれど自ら色もやあると君拾はなむ」と言ひ贈つてもあつたことを思ひだし、自分のどの作が選ばれ、また何首位入れられたかなど知りたくてたまらなかつた。特にかれの希望は、

心無き身にも哀れは知られけり鴫立澤の秋の夕暮

といふ以前、關東旅行に來て、大磯と小磯との間にあたつてゐる鴫立澤で詠んだ歌をぜひ採つて貰ひたかつた。さうしてかれはそのことを知るために態々道をひつかへして來たが、折から京から下つて來たさる歌人（井蛙抄には登蓮と見える）が、鴫立澤の詠の選入されてないことを言つてくれたので、尠からず失望した西行はそのまゝ東北への旅をつゞけたといふことである。それを耳にした刹那、例の西行が抱いた少さい不滿、少さい憤り――それが、わたくしの心にもそつくり感ぜられるやうである。六十九歳の老人の憤懣、しかしそれはぢきに消え去つて、西行は脚絆を締めかへながら海道筋をそのまゝ辿つて行つたであらう。

なほ、西行が自作に執着を持つた例として、俊成及び定家判の自作歌合に關した話がある。著聞集（第六和歌部）をそのまゝ引用すると

圓位上人、昔より自ら詠みおきて侍る歌を抄出して、卅六番につがひて、御裳濯歌合と名づけて、いろ〳〵の色紙をつぎて、慈鎮和尙に淸書を申し、俊成卿に判の詞を書かせけり。又一卷をば宮河歌合と名づけて、是も同じく番につがひて定家卿の五位侍從にて侍りける時、判ぜさせけり。諸國修業の時も笈に入れて身を離たざりけるを、家隆卿のいまだ若くて坊城侍從とて寂蓮が聟にて同宿したりけるに、尋ね行きて言ひけるは、「圓位は往生の期既に近づき侍りぬ。この歌合は愚詠を集めたれども祕藏のものなり。末代に貴殿ばかりの歌よみはあるまじきなり。思ふ所侍れば附屬し奉るなり」と言ひて、二卷の歌合を授けけり。げにゆゝしくぞ祕藏したりける云々

なほ、御裳濯歌合の表紙には

藤波を御裳濯川にせき入れて百枝の松にかゝれとぞ思ふ

藤波も御裳濯川の末なれば下枝も掛けよ松のもと葉に

といふ西行と俊成との贈答歌などが書きつけられてゐたことも同じくその著聞集に見えてゐる。

歌人としての西行、――それにしても、わたくしは、武の西行、愛の人西行を最初に說いて、この大きい問題を餘りに後廻しにしたのではなかつたらうか。また、歌聖をとくために、徒らにその環境を

說いて、委曲にすぎはしなかつたらうか。

しかし、なほ、わたくしはこれでも遠慮して來たのである。躊躇して來たのである。もしわたくしの望みが許されるならば、わたくしは、西行の歌を觀賞する前に、西行の信仰について檢べておきたい。さうして最後の舞臺の上に、歌人西行を登せたいのである。

西行の歌とて、こゝに改めていふ迄もない。これ迄しば〳〵かれの自詠として引用して來た和歌が〳〵く西行の歌なのである。しかも、この場合わたくしは、なほ立歸つて「西行の歌」と、新しく口荒まざるを得ない。何故であるか。歌は、西行の個性においてもつと根本的位置を持つてゐる。今までわたくしの語つて來たことの一つとして西行の個性を表はさないものはないが、歌の世界はもつと深く西行を表象し得てゐる。西行と歌とは全く一體なのである。その兩者の關係は、紙の表裏にも譬へられようし、もつと進んで炭と火との關係にも比べられるであらう。西行から歌をとり去つて、跡に殘る物は、もぬけの殼に過ぎまい。これは決して誇張の言葉ではない。かれの歌の中に、かれの武骨な心、情愛、信仰のこと〳〵くが泌みこんでゐるのである。

さて諸集に西行の作として傳へられたものの總計は約一千八百五十餘首に及ぶ。古來一個人の詠歌として傳へられたものではまづ多い方である。しかし出家後五十年間の全收獲としては決して多作ではない。奉納歌合にしても御裳濯歌合、宮河歌合と共に十社あつたと傳へられてゐるが、八社丈の歌

合は湮滅して傳はらないが、そんな理由からかも知れない。ともかく西行が拙作として捨てた作のあることは別として、現存の外になほ多少とも作のあつたことだけは言ひ得よう。西行は、それほど一面に輕く易々と歌を吐いてゐる。

しかしこゝに立止まつて、かれの家集を一つ一つ詠んで行けば、やはりかれの佳作と見るべき歌は、その何分の一かであることが分る。模倣的なもの、時流的のもの、秀句的純技巧的のものといふ樣に、かなりの多數が、やくざな歌である。然れば、こゝにわたくしは歌人西行といふ言葉を、潔よく取消すべきであるか。それは到底出來ない。後に芭蕉の句作を批評する場合にも持出すことであらうが、一體、和歌や俳句の如き詩形の文學の實狀において、その吟詠の盡くが、正しい直觀の表現であり、隙間がないといふことがありうるものだらうか。もと〳〵直觀といひ主觀の燃燒といひ、それは絶對的のものでなく、どこ迄も相對的比較的のものである。未熟時代の惡作、偶〻作つた技巧歌を盡く何等かの方法で抹殺してしまへば別問題であるが、さうでない限り作者の試作欲から成つた素描が後世に殘ることは免れ難い事だらう、

のみならず、作者的良心といつても、人間の心理は、もつと複雜的のものである。ことに歌會、句會といふ背景なしに考へられない當時の歌壇俳壇には、一種の道場的仕合を度外視することは出來ない、競爭的精神は明らかに不純なものである、ありのままのものではない。しかし、それが更に、眞

の直觀的表現の前提、指導となつたこともこゝに否定出來まい。人の心からは永遠に遊戯性を取り去ることが出來ないものである。短詩形の文學には、殊にさうした傾斜が認められる。西行にもあれば芭蕉にもある。萬葉集に傳へられた人麿の歌は僅かであるが、かれはその中のある歌のみならず、傳へられない多數の中に多くの凡作をもしたであらう。

そこで、わたくしの結論として言ひたい點は、つぎの二項に歸する。一、家の集中に拙作の混入することは、當然止み難い事情である（特に、それが後人の編輯の時は一層である）本居宣長が西行も歌作りといつた批難も、その拙作においては甘受しなければならない。二、西行の拙作、芭蕉の拙句、それは何處迄も拙劣に相違ないが、われ〳〵は短詩形の特質の上から、一首の歌句を獨立的に見ると共に、この場合作者を背景において有機的に考へる親切心を必要とする。換言すればトルストイの「復活」を觀賞するに、トルストイの人格や他の作品を參照する必要があらうが、それよりも西行の作を觀賞するにより多く、西行の個性、山家集を必要とすると言ひたいのである。それは、所謂唯美的、藝術至上的傾向の人々には承認されないかも知れないが、これは觀賞における實際であり、特に短詩形的のものに必須の點だと思ふ。

しかるに和歌史上の事實は甚だしくこれを裏切つてゐる。まづ萬葉集や古今集に多い歌の詞書を除いて行つた傾向がその一つ。つぎに一つの家集を以て歌を論ぜず、何百人といふ歌人から數首宛選ん

だ撰集（古今集とか新古今集とか）を、軌準として歌人を論じたこと。最後に作歌の心理といふことを全然沒却して歌を考へたこと――この點は、ひいて現歌壇の衰頽の大原因をなしてゐると言つてよい。背景環境を度外視しても佳作は佳作だとも言はれもしようが、短詩形のものを味はふに然るべき雰圍氣を要することは否定されない。山家集中の拙作、それが不思議にも多角的な西行の種々相を浮び出さしめて、より多き價値を他の作に與へてゐることをわたくしは認めざるを得ない。

しかし、こゝに極めて意外な問題がある。それは西行自身の詠まうとした理想的歌體についてゞある。こゝにまづ、かれの自讃歌十首をあげて見るに、

吉野山櫻が枝に雪散りて花遲げなる年にもあるかな

眺むとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそ悲しかりけれ

あはれ如何に草葉の露のこぼるらん秋風立ちぬ宮城野の原

月見ばと契りおきてし故里の人もや今宵袖濡らすらん

きり〳〵す夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかりゆく

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり

年たけて復た越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思ひかな

山里に浮世厭はん友もがな悔やしく過ぎし昔語らん

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん

どうしたものだらうか。これらは、所謂西行の名歌として世に喧傳されたのかも知れないが、千八百首中の指折の十首選としては餘りにあつけないてはないか。わたくしにはこの内の七八首迄は、全然二流所の作であるとしか考へられない。しかも、西行がかうした歌風を目的としてゐたらしいことは、例の俊成及び定家判の歌合でも傍證され得る。（もつともこの歌合に自信の作のみ採つたとは明言出來ないけれど）

御裳濯河歌合をまづあげて見よう。その一番と二番は、伊勢神宮に關した作だから特別として

三番　左

押しなべて花の盛りになりにけり山の端毎にかゝる白雲

右

秋は只今宵一夜の名なりけり同じ雲居に月は澄めども

四番　左

なべてならぬ四方の山邊の花は皆吉野よりこそ種はとりけめ

右

秋になれば雲居のかげのさかふるは月の桂に枝やさすらん

五番　左

思ひ返す悟りや今日は無からまし花に染めをく色なかりせば

右

身に泌みて哀しらする風よりも月にぞ秋の色は見えける

つぎに宮河歌合の例をあげて見よう。一番はおいて、

二番　左

來る春は峰に霞を先き立てゝ谷のかけひを傳ふなりけり

右

分きて今日逢阪山の霞めるは立ちおくれたる春や越ゆらん

三番　左

若菜つむ野邊の霞ぞ哀なる昔を遠く隔つと思へば

右

若菜生る春野の守に我なりて浮世を人につみしらせばや

四番　左

古巣うとく谷の鶯なりはてば我や代りて鳴かんとすらん

右

色にしみ香も懐しき梅が香に折しもあれや鶯の聲

これら諸作の價値如何。かの自讃歌十首はなほ拙くとも二流の値は充分あつた。しかるにこれら歌合から拾つたものゝ大部は、何といふ時流的のものであらう。所謂秀句めいたもののみではないか。かれは何故に、かゝる歌合を作つて、俊成や定家の判を乞うたのか。またそれを後生大事に笈の中に終身收めてゐたのか。かれは、千載集に十八首選入された喜こびを味はつたであらうけれど、眞に、かれ自身を歌つた作の値を知らずに逝つたのではあるまいか。

しかしこゝに、これを「しかり」と決定することはいくらか早計の嫌ひがある。これには愚祕抄（下ノ五）にある西行の逸話が、多少の參考にならう。

歌を詠まん時、あからさまにも座正しからで詠むこと勿れ。自由にて詠み習ひぬれば、いかにも晴れの時詠まれず。西行は毎度、歌を詠まん時は、縁行道して嘯きよみけるが故に、先年仙洞にて、老幼の勝負の御歌合、當座なりしに、「西行出だすな、立て籠めて詠ませよ」と勅諚ありき。げにもと覺えて侍りしか。されば其の時はさまで秀逸と覺しき歌なかりき。

眞否の問題は別として、如何にも西行にふさはしい逸話ではないか。かれは常々、山野の中にあり、自然と一體となつて、歌を詠出する。かれはその瞬間において眞に幸福であり、純一である。歌合においての如く、相手に勝たうといふ心もなければ、晴の座においての如く制約も感じない。さればこそ、前述の如き歌道に對する熱愛も持ち得たのである。

しかし、わが西行も、容易に社會から、名譽から超脱することは出來難かつた。時世の暗翳は、かれの胸中にも入り込んでゐた。本歌取の作がはやれば、かれ西行も物眞似をしたし、題詠、百首詠が催されるとまたその仲間入りをした。晴の座にも出入し、千載集に「心なき身にも」の自作が入らなかつたとぷり〳〵怒りもした。もし人あつて、かゝる西行の一面を叱責するなら、遠く西行の作は湮滅して現代に傳はらなかつたであらう。俗流の中に立つ藝術家の妥協的苦衷は古今東西その規を等しうしてゐる。

さて、いよ〳〵つぎに、西行の和歌の價値を決定すべき場合に立ち到つた。

これは西行の作のみに限らないが、その作全部を、表現における實の甘みと、綾の巧みさとの二方面に分け得ることが出來るであらう。西行の歌の實の甘みとは如何。すなはち、それは思想とか着想とかでなく、實に清爽的自然さとその煌々とした純澄さにある。

それは、セザンヌの繪畫の様に、何物の模倣でもなく、また何者の追隨をも許さない獨自的のものである。西行の前に西行なく、西行の後に西行が無い。恰もセザンヌの手法を追つた畫家は無數にあつたらうが、セザンヌの鋭い觀照力を持つた人は、遂に一人も出て居ないと同様に。

俊頼が後には釋阿、西行、俊惠なり。姿殊にあらぬ體なり（中略）西行は面白くて而も心殊に深くてあはれなる、あり難く出來難き方も、共に相兼ねて見ゆ。生得の歌人と覺ゆ。これに依りて朧氣の人の眞似びなんとすべき歌にあらず。不可説の上手なり。

と、後鳥羽院が、その「御口傳」の中に殘し給うた御言葉は、要を得た批判である。新古今集に選入された歌數から見ても西行は、歌人中の筆頭であつた。かれの歌調の追隨者が多く出たことは、恐らく現代の啄木歌調におけるよりも、なほ以上であつたかも知れない。順德院は、また西行の跡を學ぶべきを宣給ひ、「たゞ詞を飾らずして、ふつ〳〵と言ひたるが聞きよきなり」（八雲御抄）と評されたが、これは後世いふ平淡主義、無味主義をさしてゐる。しかし西行の特色はそれだけに止まつてゐない。平淡さはかれの表面だけのもので、かれの歌の内部にはそれと共に清爽味と純澄味とがある。

――西行上人の様を學ばんことは、其の人ならでは、非器の輩の努々叶ふまじき様にも侍り。眞似損ぜば、世に平懐にも又かたはら痛くも聞ゆべき

と、更に愚祕抄の作者が評した語は正しい。啄木の歌は、遂に啄木と同じく體驗を得たものでなければ、成功しないと同轍である。

しかし、自然的の味といふ點から見て、西行の作の中にも他の模倣しうる拙作もある。たゞ、その中に到底他の追隨を許さない光つた佳作を傳へ得た處に、西行の歌人西行たる所以が存してゐる。それを論外にしては西行の價値は分らない。古來西行々々と稱しつゝも、西行を諒解し得なかつた歌人の群は、西行の作すべてを佳作と考へようとしてゐたのであつた。わたくしは、宣長をさへその群の中に見出ださなければならないことを悲しむものである。

水底に深き碧の色見えて風に波よる川柳かな（山家集）

なか〳〵に風の押すにぞ亂れける雨に濡れたる青柳の糸（山家集）

初花の開け始むる梢よりそばへて風の渡るなるかな（異本）

眞菅生ふる荒田に水をまかすれば嬉し顏にもく鳴蛙かな（異本）

小笹敷く古里小野の道の跡を又澤になす五月雨の頃（山家集）

旅人の分くる夏野の草繁み葉末に菅の小笠はづれて（異本）

夕立の晴るれば月ぞ宿りける玉搖り据うる蓮の浮葉に（異本）

分けて出づる庭しもやがて野邊なれば萩のさかりを我が物に見る（山家集）

池の面に影をさやかに映しもて水鏡する女郎花かな（山家集）

何事をいかにと思ふとなけれども袂乾かぬ秋の夕暮（追而加書）

僅かなる庭の小草の白露を求めて宿る秋の夜の月（山家集）

荒れわたる草の庵に洩る月を袖にうつして眺めつるかな（山家集）

月はなほ夜な〳〵毎に宿るべしわが結びおく草の庵に（山家集）

横雲の風に別るゝ東雲に山飛びこゆる初雁の聲（異本）

蟋蟀夜寒になるを告げ顏に枕のもとに來つゝ鳴くなり（山家集）

霜冴ゆる庭の木の葉を踏み分けて月は見るやと訪ふ人もがな（異本）

嵐吹く嶺の木の間をわけ來つる谷の清水に宿る月影（山家集）

玉垣は朱も綠も埋もれて雪面白き松の尾の山（山家集）

瀨戸渡る柵無し小舟心せよ霰亂るゝ旋風横ぎる（異本）

淡路潟磯わの千鳥聲しげし瀨戸の鹽風さえまさる夜は（山家集）

以上、かりに四季の部類から廿首を選出したものを見よ。何れも彩りの乏しいものでは無いか。觀照のまゝが、ただ素純に歌はれてゐる。前說した西行の自然愛、すなはち花を慕ひ月を待つ情緒のはつきり歌はれた作などに比すると、そこに、何とも言へない靜かさがある。しかも所謂新古今調などに

よく見る硬張つた感じはすこしもない。寂味が爽かにすき〳〵と出てゐる。

なほ、愛誦すべき句は、己が庵を詠んだものの中に多い。

鶯の聲ぞ霞に洩れてくる人目乏しき春の山里（異本）

鶯は我を巣守に頼みてや谷の外へは出でゝ行くらむ（山家集）

谷の間に獨りぞ松は立てりける我のみ友は無きかと思へば（異本）

わが園の岡べに立てる一つ松を友と見つゝも老にけるかな（山家集）

春雨の軒垂れこむる徒然に人に知られぬ程の住家か（山家集）

尋ね來て言訪ふ人も無き宿に木の間の月の影ぞさし入る（山家集）

月ならでさし入る影もなきまゝに暮るゝ嬉しき秋の山里（山家集）

眺むるに慰むことはなけれども月を友にて明かす頃かな（山家集）

曉の嵐にたぐふ鐘の音も心の底にこたへてぞ聽く（異本）

立寄りて隣訪ふべき垣にそひ隙なく生ゆる八重葎かな（山家集）

自ら音する人も無かりけり山めぐりする時雨ならては（山家集）

嵐のみ時々窓を訪れて明けぬる空の名殘をぞ思ふ（山家集）

寢覺めする人の心を佗びしめて時雨るゝ音は悲しかりけり（山家集）

道も無し宿は木の葉に埋もれぬまだきせさする冬籠りかな（山家集）

降り積る雪を友にて春迄は日を送るべき深山邊の里（山家集）

かゝる境地は、これをたゞたましひの冴えに待つのみ。「訪ふ人も思ひたえたる山里の寂しさなくば住みうからまし」といふ徹した寂寥からのみ觀じ得られる界である。「人知らでつひの住家に憑るべき山の奥にもとまり初めぬる」といふ最後の治定の地を得た氣持から、眺められ得る相である。靜穩の祕奥である、しかもなほすら〳〵とした清爽味を失はない。歌に捕はれてゐない、濶達とした態度がそのまゝ韻律化されてゐる。鋼鐵の樣に、寂寥味がびいんと反撥しさうである。西行は如何なる場合にも他に捕はれない、盲目にならない。

庵の生活に較べると、旅にある方が心が搖さやすい。周圍の變化にもよるであらうが、まづ生活そのものが全然異なつたものになる。しかし、澄み切つたかれの心持は、さうした場合にも容易に崩れなかつた。

越え來つる都隔つる山さへに果ては霞に消えにけるかな（山家集）

都近き小野大原を思ひ出づる柴の煙のあはれなるかな——下野にて（山家集）

菫咲く横野の茅花生ひぬれば思ひ〳〵に人通ふなり——上野にて（追而加書）

常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮れぬる——陸奥にて（山家集）

夕されや檜原の嶺を越えゆけば凄く聞ゆる山鳩の聲——紀伊にて（追而加書）

旅寢する嶺の嵐につたひきてあはれなりける鐘の音かな（山家集）

千鳥鳴く繪島の浦にすむ月を波に映して見る今宵かな——淡路にて（追而加書）

何れも、愛誦してやみ難い絶品ではないか。些しの嫌味すらそこには無い。プラチナの光のやうな感じのみがある。それは、源氏物語中に散見する抒情的叙景の妙趣をも聯想せしめる。

これは曾呂利の狂歌咄にも出てゐるが、醒睡笑に次の樣な短話が載つてゐる。

西行法師修行の時、津の國七瀨の河にて麥粉を喰ふとて頻りにむせられけるを、馬上より侍の見つけ

この河は七瀨の河ときくものをお僧を見ればむせ（六瀨）わたるかな

時に西行の返歌

この河は七瀨の河ときくものを召したる馬はやせ（八瀨）わたるかな

生眞面目に思へる西行には、かく一面に甚だ洒脫な點があつた。この逸話は、たゞに狂歌的機智を持ちあはしたかれを語るに過ぎないけれど、かれの和歌にあつては充分童心として、はたユーモアーとして、この氣分の表現されてゐるのを見得る。古今集中に、われ〳〵は既に、遍昭法師やその子素性法師の如きユーモリストを持つてゐる。否、編者紀貫之自身も、ある意味にユーモリストであつた。しかし、われ〳〵がかれらに、ユーモリストとしてなほ不足を感ずる點は、情味の缺乏である。とすれば、滑稽だけのものに墮しがちな點である。

西行の出家した年、恰かも鳥羽僧正が寂して居る。鳥羽僧正の畫は、鳥羽繪の元祖をなすもので、誰も知るやうにそれは極めて洒脫味に富んでゐる。わたくしは、鳥羽僧正が出、曉月が出て、平安期末期の藝術の上に瓢逸的新鮮味の加はつて來たことを、西行の一生と思ひ合して、必ずしも偶然でないとしたいのである。藝術は一方には、土佐繪となり新古今調となつて重厚味を傳へると共に、他方にかく輕妙な一派を出さしめた。こゝには、急激な時世の變化がある、人々の心に點ぜられた暗い運命觀がある。矢叫びがある、劍戟がある。さうして強い意思と信念とを以て難局を乘り越し、時世を達觀し得た人々の心に萠した氣持はまづこの瓢逸さではなかつたらうか。

時代の轉回を目のあたり感じた歌人に、平安朝の初期在原業平がある、末期に鴨長明がある。しか

るに多感な兩人は、周圍に演ぜられた怖ろしい悲劇の壓迫下に流浪の身となり、隱者の身と迄ならざるを得なかつのである。意力の乏しいかれらには、時代を超越する志操が缺けてゐた。しかも、同じ運命にありながら、また同じ鋭敏な感受性を持ちながら、なほよく、涙に溺れなかつた歌人は、わが西行であつたらう。

承安三年（西行五十六歳）清盛が經が島を築き、和田岬築港の大供養を行つた時、西行は出かけてそれに加はつてゐる。安元元年（西行五十八歳）鳥羽院皇女の命をうけ高野東別所に蓮華乘院を建立してゐた大義房兼宗の中途で寂した際も、西行は餘業を自らひきついでそれを完成し奉つてゐる。文治二年（西行六十九歳）東大寺再建勸進の際も、西行は依頼をうけて東北旅行に出かけていつた。

かく西行の晩年は、成年時代に比して寧ろ世間的であり、活動的のものとなつてゐる。しかし、西行を眞に解する者は、誰かこれを以て西行の妥協的態度となし、墮落した結果であると言ひ得よう。むしろそこに、西行の本質と見なすべき潑溂さが出て來たのである。煌々と輝く氣質が溢れ出たのである。

こゝに疑念を挾むものは、いかなるものよりも、まづ山家集を繙いて、その中の張り切つたリズムを感得されよ。

思へ只花の無からん木の下に何を陰にてわが身住みなん（異本）

如何てかは散らであれとも思ふべき暫と慕ふ情知れ花（異本）

心得つ只一筋に今よりは花を惜しまで風を厭はん（山家集）

たゞ花一つに對してすら、かくかれの緊張さは横溢した。かゝるかれにして、始めて洒脫の境界にも立ち得たことが理解される。

いざ今年、散れと櫻を語らはむなか〳〵さらば風やをしむと（山家集）

宵の間の露にしほれて女郎花有明の月のかげに戯るる（山家集）

まづ、これらは、遍昭、素性の態度と餘り遠からぬものであらう。しかし、「いざ今年」と詠み始め、「かげに戯るる」と言ひ切つた氣持には、兩歌人に見られぬ朗らかさが見えてゐる。氣取つた感じは少しもない。

嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな（異本）

あはれわが多くの春の花を見て染めおく心誰に讓らん（山家集）

消え返り暮待つ程ぞしをれぬにおきつる人は露ならねども（山家集）

浮世をばあられば　あるにまかせつゝ心よいたく物よ思ひそ（山家集）

あくがるゝ心はさてや山櫻散りなむ後や身に歸るべき（異本）

花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎にぞありける（追加書）